

鄭成功の金印

作

夏之始

プロローグ

浅田玄は寝つきが悪くなかなか眠れない夜がある。そうしたときには何時間も布団の中で、今日起こったことや先ほどまで考えていたことなどがあれこれと頭に浮かび眠りが妨げられる。眠ろうとしているので、浮かび上がってくるひとつひとつのこゝとを深く考えようとはしないのであるが、ひとつが消えると、すぐに次が浮かんできて止めどもなく夢と現実の間をさまよっているようである。そうして、いつの間にか意識が薄れて眠りに落ちているのであるが、そんな時に決まって夢を見る。

それはいつも同じ夢で、幼い自分が真っ暗な暗闇の中をどこまでも落ちていくのである。暗闇で何も見えず頭が上になったり

逆さになったりするが掴まるものはなくどこまでも、どこまでも落ちていく。落ちながらだんだん自分が悪鬼のように角が生え、牙を出し、手足に鋭い爪が生えていく。そして落ちていくスピードが落ちていくと真っ黒な大入道が現れ、鬼になった自分を受け止める。そして、自分と同じ幼い女の子を殺せと言う。鬼となった自分は言われるままに悪鬼の能面のように顔色を変えず、なんの感情もなく幼子をナイフで刺すのであるが、夢の中ではもう一人の自分が傍観者のように近くで静かにそれを見ているのである。その夢はいつも短く、刺された相手もぼんやりしており、刺されたことに対する反応もなく現実感はない。ただ何度も同じ夢を見ていると本当に自分は人を刺し殺したのではないかという観念が生まれてくるような気がしてくる。身震いするような恐ろしい夢であるが、もちろん、そんなことは現実に起こ

っていないはずであるし、家族も周りの友人も、そんなことが起こったらなかったと知っている。ではなぜそんな夢を見るのだろうか。前世で自分は人殺しであったのか、あるいは二重人格者で本当に人を殺したが、周りの人たちが黙っているだけなのだろうか。

浅田の心の中にはこの恐ろしい夢が現実だったらどうしようかという強迫観念が潜在しており、とにかく幼い頃の自分を知っていると思われる周りの人の目から逃れようとして、東京の大学を卒業した後も地元の名産には帰らず、そのまま東京の建築設計事務所に就職した。しかし、両親は何かにつけて帰ってくるように言ってくる。それが余計に何かを暗示しているのではないかと思ってしまうのであった。

九年ほど東京の設計事務所働いた頃に、会社が台湾のイベ

ントホールの設計と工事監理を地元的设计会社と共同で受注した。このイベントホールの屋根は大空間を創出するために一般的な鉄骨構造ではなくケーブルを組み合わせた複合構造という斬新な設計になっていた。建物の中に入ると頭上にケーブルとパイプを複雑に組み合わせてできた美しい幾何学模様が見えるようになっていた。浅田は志願してこの斬新な設計のプロジェクトチームに入れてもらい、日本から遠く離れた台北に赴任した。プロジェクトの仕事は日々が新しく毎日夜遅くまで没頭して働く日々が続き、さらに会社の人以外に知り合いのいない台北での生活は、日本から遠く離れているという安心感なのか夢を見る頻度も少なくなり、このまま夢のことも忘れていくのではないかとさえ思った。しかし、そのプロジェクトも四年で終了となり、再び東京に戻るようになった。そうなるとまたしても夢

のことが脳裏に浮かび、再び恐ろしい夢が現実だったらどうしようかという強迫観念と向き合わざるを得ないと思った。それは今の浅田にとって耐えがたいことであった。そして、あれこれと考えた挙句に思い切って東京の設計会社を辞めて台北に残ることにした。それまでに四年間、台北に住んでみると、まずは金沢のような寒い冬から解放されるし、特に台湾の人々の活気が気に入った。そうした人々と付き合っていると、あの悪夢のような強迫観念を忘れていられると思ったのだ。

台北での新たな一歩は、個人事務所「浅田建築設計」を一人で開業して、プロジェクトチームの相棒であった台湾の設計事務所から仕事を分けてもらおうようにお願いした。台湾の設計事務所に就職するという手段もあったが、会社の中で多くの人と深い関係を築きたくないというのも個人事務所を開業した理由で

あつた。浅田玄、三十六歳の新たな出発であつた。

王教授

台湾は宮古列島・八重山諸島の西側にある。宮古島と台北の緯度は約二五度とほぼ同じで、台湾の北半分は北回帰線の北側にあり、八重山諸島と同じ亜熱帯気候に属し、南半分は熱帯気候に属する。八重山諸島の最西端の与那国島から台湾まで約一一〇キロメートルで、肉眼で見えることはできないが、航空便なら三〇〜四〇分、高速艇でも一時間半から二時間程度と近い。また中国福建省と台湾の間の台湾海峡は狭いところで一三〇キロメートル、平均一八〇キロメートルの距離で東京・静岡間ほどの距離で

ある。また福建省の厦門（アモイ）の沿岸にある金門島と福州の沖合の馬祖列島は台湾に属し、金門島へは台湾の六市から航空便が飛んでおり、馬祖島へは台北・台中からの航空便と台北からのフェリーが運航されている。また台湾の最小自治体である烏坵郷と呼ばれる島々は中国福建省の莆田市の沖合にある。つまり、台湾海峡の西側の中国本土の沿岸にも台湾に帰属する島々が点在する。また台湾の南方には南シナ海とフィリピンとの間のルソン海峡が広がっている。南シナ海に浮かぶ東沙群島は高雄から四四五キロメートル、香港から三三〇キロメートルと遠く離れた絶海の孤島であるが台湾が実効支配しており、台湾軍の基地が建設されている。

台北に個人事務所を開業して一年が過ぎた。台湾海峡に流れ

出す淡水という河が台北市の西側を流れており、河の東側に数々の名所・旧跡がひしめく市街が広がる。淡水の西側は新北市で比較的新しい街が台北市を取り囲むように広がっている。浅田の事務所兼居住スペースは、淡水のすぐ東側にある龍山寺という古刹の近くにある。

台北での仕事は順調とまではいかないが生活ができる程度には仕事が入ってきていた。下請けの仕事であるので報酬はよくないが、浅田の仕事に対する正確さと速さが評価されてコンサルタントに仕事を回してくれていた。そんな中、九月の末に台北で開かれた建築の国際フォーラムで知り合った台湾大学の王猛波教授から時間があったら一度研究室に来ないかと会議場で誘われた。フォーラムで浅田が吊構造の耐風性についてプレゼンをしたのが目に留まったのであった。イベントホールの仕事を通

してケーブルを使った構造について専門性を高めることができたのをきっかけに、仕事の合間に吊構造について研究してきたのだった。前の会社でやったイベントホールの設計を軸に耐風性的に絞って発表したのであった。王教授は国際フォーラムの組織委員のひとりで様々な人々と面識があり、浅田にとっても願ってもない申し出であった。

それから一週間ほど経ってから浅田玄は、台湾大学に王教授を訪ねた。台湾大学は台北市のほぼ中央に位置し、基隆路の大通りの西側に広大な敷地を有している。基隆路の門を入ると広いヤシの並木道が真っすぐに西に向って延びており、一〇〇メートルほど行くと正面に一九二九年に建てられた記念講堂がある。国際フォーラムの行われた場所である。この講堂の左側を通ってさらに一〇〇メートルほど行ったところに建築・土木関係の

建物が建っており、その三階に王教授の研究室がある。すでに十月に入っているが午後の太陽は容赦なく歩いている人々を照り付ける。建物の横には、たくさんの葉を付けた大きな木の並木が並び心地よい日よけを作り出している小道を進むと、蔦のからみついた玄関が見えた。苔むし、黒く変色した建物を見るとかなりの年月が経っているなと思われる。汗を拭きながら三階に上がり外廊下を進むと「構造研究室」と書かれた案内板が掲げられており、その下ドアを、ノックをして中に入る。ドアを開けると、エアコンが効いておりスウーと汗が引いていく。中には広い部屋があり七、八人の人たちが机を並べて、パソコンを操作したり、書きものをしている。ドアに近いところの机でパソコンに向き合っている女性に王教授とアポイントがあることを告げると、部屋の奥に案内された。どこかエキゾチックな容姿の女性であ

る。奥に部屋があり教授の研究室だとのことである。研究室に入ると白髪頭で大柄の王教授がにこやかな笑顔で迎えてくれた。

「やあ、浅田さん、よく来てくれましたね。仕事の方は繁盛していますか？ 忙しいのにわざわざ来てもらって申し訳ないね」
王教授は、若々しくエネルギーシユな顔つきに見えるがすでに六十歳を超えているとのことである。

「先日は、フォーラムでお世話になりました。先生のお誘いを受けて遠慮なく訪ねて来ました。今日はいろいろご教授ください」
浅田は台北にいた四年の間に流暢に中国語を話せるようになっていた。

「いやいや、私も先日のあなたのプレゼンを聞いて、私たちの研究とラップするところがあるなと思って来ていただきました。林さん、皆を呼んでくれ、日本の浅田さんと意見交換をするよ」

と案内してくれた女性に言った。

教授の部屋は広くはないが、教授の大きな机の前に、詰めて座れば十人ほどが座れる会議机が置かれており、正面に教授が座りその右側に浅田が座った。座ってしばらく待っていると、先ほどの部屋にいた人たちがパソコンやノートを持って集まってきた。全部で七人の男女である。

「よし、集まったな。では皆、紹介するよ。こちらは日本人で、台北で建築事務所をやっておられる浅田玄さんだ。この間のフォーラムに出ていた人は聞いたはずだが、『吊構造の耐風安定性』というテーマでプレゼンをされた。我々が取り組んでいるテーマとラップしているところがあると思っ来てもらった。それじゃあ、浅田さん、まずこちらから紹介するよ」と言って集まったメンバーを紹介した。

「こちらから周健松副教授、趙博文助理教授、学生の何佳佳さん、李文雄君、そして君の隣が助理教授の林美玲さんと張浩宇君だ。そしてその隣は黄天佑さんで彼は万建設公司の部長さんです。大学の研究とは関係ないが、今日たまたま研究室に来られていたので同席してもらおうことにしました」

研究者にしては雰囲気が違うなと思った四十代後半かと思われる男性は建設会社の人だったのだ。そして、先ほど案内してくれたのが林美玲という名前の女性なのだ。隣をわずかに見ながら「よろしく」と小さく挨拶した。

「我々は研究室の中で主にコンピュータを使った新しいシステムを作り出そうとしているが、そのシステムが実際のプロジェクトにどう対応するかがいつも問題になります。実際の構造物を設計されている浅田さんの話を聞くのはたいへん参考にな

ると思うよ。ではまず我々がどんなことを研究しているかを紹介しよう。林さん、お願いします」と浅田の横に座っている林美玲に言った。早速、教授の正面の窓のカーテンを閉めて、スクリーンを下す。そして林美玲は自分のパソコンをプロジェクターに繋いでプレゼンを始めた。

「この研究室では建築の構造に関する様々なテーマについて研究しています。私が研究しているのは流体の流れをコンピューターで再現して構造物の周りの流体、すなわち空気の流れや水の流れが構造物にどのような作用をもたらすかをシミュレーションします。……」

林美玲は、スクリーンに映し出された図やコンピュータグラフィックの動画の上を赤色のポインターで指し示しながら説明をしていく。スクリーンは教授の正面にあり、他の人たちはスク

リーンを見るため横を向くことになる。浅田はスクリーンを目で追っているが、隣の林美玲の横顔が自然と視界に入ってくる。一瞬、彼女の横顔に焦点を当てて間近に見た。彫りの深い美人だなどと思った途端にわずかに体が熱くなった。しかし、何を考えているんだと思い直し、すぐにスクリーンに意識を戻して彼女の説明に集中する。

構造物の風による振動や河川の氾濫をコンピュータでシミュレーションした結果をコンピュータグラフィックで示されると、具体性があり理解し易い。こういうシミュレーションがコンピュータでできれば風洞実験や水理実験をせずに設計できるのだろうかと思った。

林美玲の一通りのプレゼンが終わり、浅田は隣の彼女の顔を見て質問した。

「僕もコンピュータシミュレーションのことは聞いていましたが、この分野は大変なスピードで進化しているのだということが分かりました。ところで、実際の構造物は林さんが説明されたものより複雑です。例えば複雑なトラス構造であったり、それにいろいろな付属物が付いたりします。そのような複雑な構造物に対しても林さんのシステムは対応できますか？」

林美玲は、浅田の顔を見た後に目を斜め上にあげて少し考えてから、

「もちろん理論的には可能です。ただし、それはコンピュータの容量次第という面を持っています。対象物が複雑になればなるほど処理時間がかかり、あまり複雑なものは解けない場合もあります」と答えた。

「では、例えば僕がこの前のフォーラムでお話ししたイベント

ホールはたくさん小さいアーチを構成する複雑な鉄骨が表面にあり、これを押し上げるように内部にケーブルが放射状に張られています。覚えておられますか？」

「はい、浅田さんのプレゼンはフォーラムで拝聴しました。これも基本的には可能です。ただし、どの程度まで解析するかによると思います」とやや歯切れが悪い。その時、王教授が話を引き継いで、

「浅田さん、やや歯切れが悪いと思われたでしょう。シミュレーションシステムとしては出来上がっています。十分なデータがあれば浅田さんが言われたドーム型屋根の振動シミュレーションは十分に可能です。ただし、膨大なモデルを解くためには膨大なコンピューターの容量が必要です。台湾大学には台湾でトップクラスのコンピューターがあります、いろいろな研究者が

利用するために特別なテーマ以外に膨大な容量を一人で使うことが難しいのですよ」

「ああ、なるほど、一般のパソコンでできるような容量ではないのですね。となると、なかなか実際の構造物のシミュレーションは難しいということになるのではないでしょうか？」

「その通りです。先ほど言ったように我々の研究を実際のプロジェクトに適用するときの悩みはそこにあるのです。パソコンでできるのは、浅田さんらがやられている構造計算の範囲です。シミュレーションはその構造計算を瞬時に何万回も行う必要があります。このため大型コンピュータではCPU（外部記憶装置）の構造そのものが違うのです」

「なるほど、それでは僕らがすぐにお願いでやっていただけるとなるようなことにならないわけですね」

「そうです。もう少し一般の人が利用できるようにするのが課題の一つでもあります」

「分かりました。それでは今度は僕がやってきたプロジェクトについてお話ししましょう。その中で実際に何を問題にしているかをお話しします。僕も何かヒントを頂けたらいいのですが」と王教授を見て軽くにこりと笑った。王教授も何かのプレゼンを浅田に期待していたはずで、それにお応えしますよという意味である。

「おお、それはありがたいね。我々も参考にさせてほしいね」と言って教授も笑みを返した。

浅田はパソコンを開きプロジェクトに接続してプレゼンを始めた。

「僕は若輩ですので多くのプロジェクトにかかわってきたわけ

ではありません。その中で僕が台湾に来てかかわったイベントホールのお話をします。この前のフォーラムでは、ざっと設計の概要とその耐風性についてお話しましたが、今日はもう少し掘り下げて設計したときの問題についてお話します」と前置きを言ってから、本題に入っていった。

「これが全体の構造概要です。ご覧のようにこの屋根は小さいアーチの組み合わせからなっており、表面は膜構造からなっています。・・・・・・・・」

浅田は用意してきたパワーポイントの資料を一枚一枚スクリーンに映しながら説明していく。他の人たちは静かにうなずいたり、テーブルに頬杖をついたりしながら聞いている。そして、最後の一枚が映し出される。

「では、これが今日のプレゼンのまとめです。この構造では台風

が来ても全体が揺れて壊れることはないのですが、強風で一枚一枚の膜が振動して内部のケーブル張力に変動をもたらし、疲労問題を引き起こす危険性はあるのです。つまり、林さんのシミュレーターで全体構造をモデル化して行うのが理想なのですが、難しい場合は部分モデルに対してシミュレーションをしてみるということも十分に有効なのです。謝謝」

「浅田さん、ありがとう。参考になったよ。実際に設計している人から生々しい話を聞くのはなかなかないからね」
王教授のコメントに続いて、隣の林美玲が質問する。

「その部分モデルでシミュレートする場合の注意点はどういうことがありますか？」

「そうですね、物を局所的にとらえるのでなるべく微細なモデル化が必要ですね」

「でもそうしたら、モデルそのものはまた大きなサイズになってしまい、計算は大容量になってむずかしさは同じことではありませんか？」

「そうかもしれませんが、微細なモデル化ができないと現実的ではないです」

ここで王教授が話を引き取って、

「なかなか現実には即したシミュレーションが難しいということですね。この続きは今夜、夕食のときにでもしよう。今夜、一緒に夕食をしようと思うが、浅田さん、時間はありますか？」と夕食に誘ってくれた。浅田にとっては、高名な王教授と親交を得るチャンスであり願ってもないことであった。

夕食の場所は、市の中心部を東西に延びる信義路を少し北側

に入ったところにある「梅子餐廳」という台湾料理の店であった。信義路の東側を望むと、台湾一の高層ビルである台北一〇一がそびえている。台北一〇一は二〇〇四年に竣工し、当時は世界一の高い建物であった。八つの逆台形を積み上げたような形の建物で、台北の象徴的存在である。店の場所は、浅田の事務所のある龍山寺と台湾大学のちようど中間あたりにあったので、浅田は一旦、事務所に戻って仕事をした後ひとり店に出向いた。約束の時間は七時であったが、十分ほど前に店の前に着き、ゆっくりと赤い色の階段を五段上って店に入って行った。この店は有名なレストランで歴史を感じさせる雰囲気醸し出している。

「歡迎光臨（いっらしやいませ）」と言って出てきた若い女性に、「台湾大学の王猛波教授の予約があると思いますか、」と言うと、

二階の部屋に案内された。

案内された部屋に入ると、大きな円形の中華テーブルが中央に置かれており、窓際に二人の男が立って話をしていた。

「你好」と声をかけると、二人が振り返って浅田を見た。ひとり
は、先ほど大学の会議にいた黄天佑という建設会社の人でもう
一人は見覚えのない人であった。二人が歩み寄ってきて、

「先ほどは、たいへん学術的なお話を聞かせていただきありがとうございます。こちらは、日
とうございました。王先生も喜んでおられました。こちらは、日
本人の金城さんです。沖縄で建設会社を経営しておられます。浅
田さんは若いのに大変優秀なエンジニアだと王先生も褒めてお
られましたよ」

黄天佑がまるで自分があのかの会議をアレンジしたような言い方で
言った。

「それはありがとうございます。先ほどは、声をお掛けする暇もなく失礼しました」と言つて二人に名刺を差し出した。二人もまた名刺をくれた。黄天佑は万建建設公司という会社の営業部長とあり、もう一人は金城建設の社長とあった。

「浅田玄です。よろしくお願いします。日本の方でしたか。沖縄で建設会社をなさっているのですね」と名刺を見ながら日本語で言った。久しぶりに話す日本語であった。

「金城海です。台北で、一人で設計事務所をやっておられると聞きました。お若いのにたいしたものですねあ」

金城海は、六十代後半であろうか、小柄な人で少し禿げ上がった頭であるが血色はよく堂々とした人である。

「台湾にはよくお仕事でいらっしやるのですか？」

「いや、そう度々ではないが、この万建建設と一緒にある仕事を

やろうかという話があり台北に来ています。今日は、黄さんが日本人のエンジニアを紹介するというので厚かましくやってきました」

「そうでしたか、それは恐れ入ります。何かお役に立ちそうなことがありましたら、ぜひ手伝わせてください」

二人が日本語で話している間、黄天佑はどこかに電話をかけていた。とそこに王教授らが入ってきた。メンバーは教授のほかにも周健松副教授、助理教授の趙博文と林美玲であった。

「ああ、皆さんお揃いですね。さあ座りましょう」
教授が皆を席に誘った。

「王先生、先ほどお話ししていた金城建設の金城社長です」
黄天佑が金城社長を紹介した。教授も初対面のようである。席は王教授の右に浅田、その隣に金城社長、趙博文、黄天佑、林美玲、

そして周健松副教授の順であった。

「今日は、日本の人に二人も来ていただきました。そして、浅田さんには先ほど大変有意義な話をしていただきました。それでは、皆さんの健康と発展のために乾杯しましょう」

と王教授が言っていて、台湾ビールで乾杯して宴会が始まった。ひとしきり、最近の台湾のニュースの話などして盛り上がった。だが、王教授が浅田に向って、改めて昼のプレゼンの礼を言う。

「今日は、わざわざ来ていただき、有意義な交流ができました。ありがとうございます」

そう言っていて、ビールの杯を浅田に向けて上げた。浅田もそれに応えて杯を上げる。

「今後ともよろしくお願いします」
すると、続けて、

「ところで、浅田さん、今度、高雄に『高雄超級競技場（スーパーアリーナ）』という様々なスポーツのできるスタジアムであるとともにイベントホールでもある建物ができます。つまりこれは内部に大空間が必要な建物になります。このための入札が行われるのですが Design & Build、つまり設計・施工込みのコンペ方式で行われるのです。そして、この入札に万建建設と金城建設がJVで参加しようとしています。この場合、設計の良し悪しが大きく評価されます。そして、ここにおられる黄さんは斬新な吊構造の設計をしようとしておられます」と言って黄天佑の顔を見た。黄その話を引き継いだように、浅田の方を向いて、

「そうです。高雄は台湾第三の都市で台北・台中とともに国際都市を目指しています。そのためこの入札では先進的な設計が求められています。そこで我々としては斬新な吊構造の建物にし

ようと考えています。このために王先生から助言を賜りながら設計を進めているところです。一方で台湾は日本よりも大きな台風が来ますので、これに十分耐えられるようにしなければなりません。そこで王先生のご紹介で浅田さんに来ていただきました。浅田さんがこの間の国際フォーラムでお話になった『吊構造の耐風安定性』についての話が目に留まりました。王先生も浅田さんの能力を高く買っておられます。どうでしょうか、うちの設計チームに加わっていただけませんか？」と言った。

そうか、自分をわざわざ大学まで呼んでプレゼンまでさせたのは、この件に関してどの程度の能力があるか試したのではないかと浅田は思った。

「ええ、それは私にとっては願ってもない話です。ぜひ参加させてください。ただ、今抱えている案件がありますので、すぐに一

〇〇パーセントかかるというわけにはいきませんが、今の案件をなるべく早く片付けますのでよろしくお願いします」

実際に手間のかかる下請けの仕事ばかりやってきた浅田にとって、この申し出は願ってもないチャンスであった。

「では明日にでも私どもの事務所に来ていただけますか？ 設計チームと具体的な話をして頂きたい。いかがでしょうか？」

「分かりました。後で時間をお知らせください」

「よかった、話がまとまりましたな。では仕事もうまくいくように乾杯しましょう」

と王教授が言って、杯を上げた。それに呼応して、全員が

「乾杯！」と言って杯を飲み干した。

「よかったですね」

隣の金城社長が日本語で声をかけてきた。

「先ほど、万建建設と一緒に仕事する話があると言われたのはこのことだったのですね？」

「はははは、どう話が進むのかなと横で見っていました。うまくいって私も一安心ですよ」

「それにしても、ありがとうございます。がんばります」
そして、他の人たちも一人一人が、

「おめでとう」と言って浅田に杯を上げるように促す。
それに対して、

「ありがとうございます」と言って浅田も一人ずつと乾杯した。
一度に何人もと乾杯をして一気に酔いが回ってきたようである。
こうなることを全員が分かっていたのだと思うと、何か騙されたような気がするが、それもまた心地よい気がしてくる。周健松
副教授も笑顔で話しかけてくれる。

「研究室で話をしていたコンピュターシミュレーションのことも覚えておいてくださいよ」

「もちろん、覚えていきます。機会を見てまた研究室にお邪魔します」

「この林君もいい議論の相手ができたと思いますよ」と言って、隣の林美玲の方を見る。

「ええ、今日はいろいろ参考になりましたわ。またお話しをさせてください。いくら研究しても実際のプロジェクトに役に立たなかったら何にもなりませんから」と言ってにこりと浅田に微笑みかけた。その美しい笑顔がまた浅田の体を熱くした。

「はい、「こちら」そいい勉強になりました。コンピュターシミュレーションについてまた教えてください」

「でも明日からお忙しそうですから、なかなか大学に来られる

チャンスがないかもしれませぬね」

「いえ、今回のプロジェクトでもお話を伺う必要があるかもしれませぬ。その時はぜひお願いします」

「なんか、わしらは関係なく、二人で話が進んでいくようだな」
周副教授が茶化すように言って笑った。

「いえ、周先生にもぜひご教授をお願いします」

「浅田さん、無理しなくてもいいよ」と言ってまた笑った。

その後、宴会では浅田がどうして台湾で設計事務所をやることになったのかなど浅田の個人の話題が続き、さらに黄部長が高雄のプロジェクトの状況などを話して二時間ほどで終わった。会計を済ませた後、黄部長が、

「では、浅田さん、明日十時に万建建設でお待ちしています」と

明日のアップointの時間を教えてくれた。そして、店を出たところでタクシーに乗ろうとしている王教授に、

「今天感謝您。晩安（今日はありがとう）ございました。おやすみなさいませ」と言って全員で見送った。

その後、店の前で黄部長と金城社長は何か仕事の話をしている。酒で顔を赤らめた周副教授と趙博文は話しながら、どこか次の店に行こうとしている。林美玲はひとりで繁華街を歩いて帰ろうとしているようである。浅田は、黄部長と金城社長に礼を言った後、林美玲の後ろから声をかけた。

「林さん、まだ早いですがどこかでもう一杯やりませんか？」

「えっ、ああ、浅田さん」と言って振り向いてから、

「そうですね……。では少しだけならいいですよ。浅田さんのビジネスのことも興味ありますしね」と軽く笑みを浮かべな

がら応えた。

「よかった、断られるかと思いましたが、では、近くに『Ounce』というバーがありますのでそこへ行きましょう。外国人もよく行くバーです」

夜会食の後で

「Ounce」は、「梅子餐廳」から一〇分ほど信義路に沿った路地を東に歩いたところにある。とは言っても店の看板が出ている訳ではなく、両側にバイクが列をなして駐車している通りには「Relax」というカフェの看板があり、中に入ると一般的なカフェテーブルが並んでいる。それをかまわず進んでいくと、モダン

アートの絵が何枚も掛けられた壁がある。そのモダンアートの額のひとつにスイッチがあり、スイッチを押すと横の壁が開いてバーに入れるのである。この隠れ家的な趣向が評判になり、SNSで海外にまで広まっているのである。中はレトロな感じのバーになっており、二人は長いバーカウンターの空いているところに並んで座った。何組かの白人のカップルやグループも見える。林美玲もスピークイージー（アメリカの禁酒法時代の密売所）な雰囲気が入ったようである。

「よくこんなところをご存知ですね。びっくりしましたわ」

「僕も仕事をもらっている会社の人に連れてきてもらったのが最初です。最初はびっくりしますよね。ここはメニューがないので、適当に頼むと工夫して作ってくれますよ。何か思いついたものを頼んでみてください」

「そんなこと言われても、どうしたらいいの、」

そう言っただけでしばらく考えた末に、マンゴーカクテルを頼んだ。浅田の頼んだドライジンと一緒に来て、

「乾杯！これからもよろしく」

互いの杯を軽く合わせる。

「浅田さんは台湾で、一人で設計事務所を開かれて凄いですね。でも日本の方がもつといい仕事があるのではないですか？」

「そうかもしれませんが、僕は台湾の気候と人々が気に入っているのです。僕の生まれたところは、冬に雪がたくさん降ります。寒い上に薄暗い雪の降る日が長く続くと、気持ちまで暗くなってきますよ。それに比べて、台北の冬は僕らからすると天国のようです」

「そんなものなのかしら、私は雪を見たことがないので、一度雪

を見に日本に行きたいと思っっていますわ」

「それはぜひ行ってみてください。旅行で行く分には楽しめると思えますよ。冬のスキー場には、台湾の人もたくさん来られていると聞いています。ところで、林さんは、台湾のどこのご出身ですか？　たいへんな美人ですが、一般の台湾の女性と比べると彫りが深くてエキゾチックな感じがするのですが、」

浅田はグラスを持ち上げながら微笑みかけた。

「まあ、ありがとうございます。そうですね、日本人から見ても少し違和感があるかもしれませんね。台湾には、もともと台湾に住んでいた原住民と大陸から渡ってきた人たちの混血の人がほとんどですが、原住民の血を濃く残している人がいます。私の母はタイヤル族です。だから、一般の台湾人と比べると少し顔つきが違いかもしれません」

「そうですか、僕はその原住民について詳しくないので、日本では原住民というと差別的な呼称ですが、台湾では問題ないのですか？」

「問題はありません。憲法でも『原住民族』という言い方をしていますわ」

「すみません、そんなにむっとしないでください。つまり、台湾では原住民に対する差別などはないということですね。でももう一度乾杯してください」と言ってグラスをかかげた。そう言われて、林美玲も表情を戻してカクテルに口を付けた。そして、やや誇らしげに、

「今では、原住民と言われている人たちは五十万人ほどで、台湾の人口の二パーセントくらいですが、日本人がよく知っている人たちも原住民の出身ですよ」

「たとえば、どんな人たちですか？」

「たとえば、ビビアン・スーは私と同じタイヤル族ね。他には、野球の選手で陽岱鋼や郭源治はアミ族の出身ね。それに、今の蔡英文総統のお祖母さんはパイワン族だということよ」

「ええっ、そうなんですか！ まったく知りませんでした。それでタイヤル族というのは美人が多い部族なのですね」

「そういうわけではないけど、原住民出身の芸能人も多いわね。ジェリー・イエンはタイヤル族、シヨウ・ルオはアミ族ね」
誇らしげに微笑みながらカクテルを一口飲んだ。

「そうなんですか！ 台湾では、たくさんの方の原住民の出身の人が第一線で活躍されているのですね。それで中国人ではなく台湾人という人が多いのが分かる気がします」

「全国に十六の部族があるとされているけど、実際にはもっと

たくさんの部族がいるのよ。台湾は多民族国家というわけね。今では、昔の衣装を着た人たちの舞踊ショーなど見る程度だけど、昔は首狩りをしていたという部族もいたらしいわ」

そう言いながら、カクテルを飲み干してお替りを頼んだ。

「ええっ、首狩りですか！」

「そうよ、だからあまりひどいことをすると、あなたも首を狩られるかもしれないわよ」

二時間ほど「Unce」で林美玲と台湾の原住民の話題などで盛り上がった後、二人でバイクが横向きに並んで駐車している薄暗い路地を信義路の大通りに向かって歩いた。夜も遅くなり、人通りも少なくなっている。とその時、少し前の方の右横の狭い路地から一人の男が飛び出してきて、左側に並んでいるバイクにぶ

つかり、二人の前で「わっ、」と叫んで前のめりにひっくり返った。浅田は咄嗟に美玲の手を引いて避けた。黒っぽいシャツを着た男はすぐに起き上がって何かを探すように廻りを見まわしている。浅田と同じくらいの年代で少しくぼんだ感じで鋭い目をした男である。そうしている間に、何人かの人の走る音が同じ路地から聞こえてきた。咄嗟に男は振り向きながら浅田たちが来た方向に向って全力で走って行った。それを見ている間もなく、三人の男が横の路地からバラバラに飛び出してきて、息を切らせながら二人の脇を通り過ぎ、先に走って行った男を追いかけte行った。ほんの一瞬のことで、二人とも声も出さず突っ立て見送った。バタバタという足音が暗がりの中に遠ざかって行くのを聞きながら、

「ああ、びっくりした、大丈夫ですか？」

美玲に声をかけるが、浅田本人がびっくりして、そう声をかけるのが精いっぱいであった。

「ええ、大丈夫よ」とかすれた声で言った後、妙なことを言った。

「あの人、倒れたときに何かを落としたわね、落としたものが倒れた先の方へ飛んでいくのが見えたわ」

「ええっ、よくわかったね、どの辺りに飛んでいったか分かる？」
浅田も暗がりの中を何かが飛んで行ったなとは思っていた。

「小さなもので、あの辺りまで飛んで行ったと思う」

暗がりになっているバイクの列の十台くらい先を指さした。

美玲が指さした辺りまで戻って、二人で手分けしてバイクの間を探す。するとさらに二台ほど先のバイクの下に一〇センチに満たないほどの四角の木の箱が浅田の目に留まった。

「あつたよ、」

美玲に声をかけながら箱を拾い上げ、暗がりの中から光の当たる場所に持っていく。駆けよってきた美玲も浅田の手のひらにある箱を覗き込む。一見してかなり古いもので上蓋がついており、表面に墨で書かれた字の跡があるがほとんどかすれていて読めない。木箱の割にはけっこうな重さがある。幸い廻りに人通りがないことを確認してから、

「何が入っているか見てみますか」

美玲に同意を求めるように言ってから蓋に力を入れた。

中には、薄茶色に変色した紙で包まれたものが入っており、小さな塊のわりにはずっとした重さを感じる。相当な年月を経たと思われる紙が破れないように慎重に取り出す。箱を美玲に持ってもらい、ゆっくりと紙を開いていく。すると全体が金色で四角形の台に持ち手のついた印鑑らしきものが出てきた。五、六センチ

ちくらの印影の部分には文字が刻印されているはずであるが、何かの図柄のようにしか見えない。今まで見たことはないが、いわゆる「金印」というものではないかと思っていると、美玲も同じようなことを言った。

「ひよっとすると、これは昔の皇帝が遣わしたという金印のようなものではないのかしらね」

「うん、僕もそうではないかと思ったんだが、もし本物だったら相当な価値のあるものじゃないのか、そんなものがこの街中で見つかるとは考えにくい」

「でもさっき逃げて行った男が、どこか相当なコレクターの家などで盗んできて、三人の男に追いかけていた途中で落としてしまったと考えたらわからないでもないけど、もし本物の金印だとしたら、嚴重に保管してあるはずで、あんな悪少（チン

ピラ)に盗られるようなところにあるとは考えにくいわ」

逃げて行った男がそこらにいるチンピラかどうかはわからないがと思いつつ、

「確かにそうだね、とにかく面倒に巻き込まれるのは嫌だから警察に届けようか？」と言うと、美玲は、思ってもみないことを言った。

「それはやめましよう、多分日本と違って、台湾の警察はそこまです信頼性が高いとは言えない面があるのよ。これを持っていったら、いろいろ聞かれたあげくに私たちが犯罪に関係しているとみられるかもしれないわ。まず明日にでも本物かどうか確かめてみましょうよ、もし偽物だったらどこかに捨てればいいわ」

「ええっ、そうですか！でも、どうやって偽物かどうか判断するんですか？」

「その点は大丈夫、私の知り合いに台湾大学で歴史学をやっている教授がいるの、彼女なら確かめられるんじゃないかしら、明日にでも大学に来られますか？」

「えっ、僕も行く必要があるの？」

「それは当然よ、私ひとりで行ったら、どこでどうしてこんなものを手に入れたか怪しまれるわ」と言ったが、来てほしそうな顔であった。

明日は、朝から万建建設との打ち合わせがあるので、それが終わってから大学に向うと約束して別れた。結局、金印は浅田がもって帰ることになった。美玲は思っていることをズバリと言う感じで、台湾女性に特有の気が強そうだなと思うと同時に、一方ですこし気弱でかわいい面もあったなとタクシーの中で思い出しながら家路についた。

金印の謎

次の日の朝、新しい仕事に胸を躍らせて万建建設に向ってバイクを走らせた。万建建設と日本の金城建設がJVで高雄超級競技場の入札に参加するので、入札のための設計を手伝ってほしいと昨夜の宴会の席で頼まれたのであった。個人で設計事務所を開いているといっても、実際には前から付き合いのある台北の華光工程顧問有限公司という中堅のコンサルから図面や構造計算などの仕事をもらって、細々とやっているのである。今回のような大きなプロジェクトに最初から参画できることはまずないのが現状である。何とか今の状況から抜け出せないかと思っていた矢先に、王教授から研究室に来ないかと言われて台湾

大学に出向いた。教授の研究室でプレゼンをした後に誘われるままに夕食に行ったが、その宴席に万建建設の黄部長と金城建設の金城社長が同席した。その席で黄部長から先の依頼をされたのであった。浅田にとっては願ってもないチャンスであった。

万建建設は、中山区にある行天宮の近くにある五階建てのビルに入っていた。この辺りは台北のビジネスの中心で、多くのオフィスビルが立ち並んでいる。行天宮は関帝廟で三国志の英雄関羽と関聖帝君・関帝聖君を祭った宮であり、関羽が義に厚いとされたことから商売繁盛の神とされている。他にも台北故事館や台北市立美術館などがあり、観光客も多いところである。

受付で、黄部長とアポイントがあることを告げると、受付の女性が二階の会議室に案内してくれた。中に入ると、三人の人がテ

ーブルの椅子に座って話をしている。三人のうち一人は女性である。そのうちの一人が、浅田の顔を見ると椅子から立ち上がった、

「おお、浅田さん、おはようございます。よく来られましたな」と日本語で言った。金城社長である。

「金城社長、おはようございます。昨夜は、お世話になりました」金城社長は、横に座っていた二人を促して紹介してくれた。

「こちらは、うちの長嶺と金城です」

浅田はさっそく二人に名刺を差し出して、挨拶をする。

「浅田玄です。昨日は金城社長にお世話になりました。今回のプロジェクトに呼んでいただきありがとうございます。よろしくお願ひします」

二人がくれた名刺によると、背が高く五十近くかと思われる男

は、金城建設専務・長嶺幸信とあった。また浅田と同年代と思われる女性は、金城建設設計部・金城凜とあった。苗字が金城とあるなと思いながら名刺を眺めていると、

「娘ですよ。今回のプロジェクトをやらせることにしました」
金城社長が照れくさそうに説明した。再度、金城凜に向かって挨拶する。

「なるほど、そうですね、よろしくお願いします」

「浅田さんのことは、社長から優秀な設計家だと聞きました。こちらこそよろしくお願いします」

小柄な沖縄美人だなと勝手に思った。

その時、ガタッとドアが開き、四、五人の人が入ってきた。

「やあ、浅井さん、来てくれましたな」

と言って手を差し出したのは、昨日の黄部長である。黄部長は握

手した後、他に他人を紹介した。最初に紹介されたのは、万建建設の社長・劉旭鎮であった。初老の恰幅のいい人で、にこやかに握手をしてくれた。他の人らは設計部の何志偉部長、呉家豪課長と趙俊宏であった。席に着いた後、すぐに劉社長が口を開いた。

「浅井さん、よく来てくれました。懇意にしている王教授の推薦ということで期待していますよ。今回の入札では設計の良し悪しで決まると言っても過言ではなく、先進的な設計が必要です。しかし、時間も限られており、入札までにひと月もありません。すでにいくつかの案を考えていますので、後で何部長らと話し合ってください。この入札には絶対に勝ちたいと思っておりますので、渾身の力を入れてやっていただけるように期待しています。」

劉社長が挨拶の時とは違って変わって、鋭い眼光で浅田を見た。その眼光に、一気に緊張が高まる。

「わ、分かりました。頑張ります」

浅田は声を震わせながら応えた。

「よし、ではお願いしますよ」

それだけ言って劉社長は立ち上がり、部屋を出て行った。同時に金城社長も部屋を出て行った。

「ではまず契約の話からしましょう。基本的に浅井さんにはご自分の事務所で仕事をしていただき、必要に応じてこの事務所に来ていただくということでもいいですな」

黄部長が話し始めた。今回の入札の仕事は二、三週間で終わらせる必要があるとのことであるが、入札に通れば詳細設計、工事と続き数年のプロジェクトである。今回の仕事の報酬が少々少なくとも頑張ろうと思う浅田であった。

その後、両社の設計部の人たちが残って、万建建設の呉家豪課長が現状の三つの設計案を説明してくれて、

「今の説明を聞いて、質問かコメントがありますか？」と訊いてきた。印象としては、斬新なものが必要だと劉社長が言ったわりには、どれもそれほど斬新とは言えないかなと思ったが、一通り概要を聞いただけなので、後でじっくり見てみようと思った。

「今ざっと聞いたばかりですので、今説明された資料をいただきましたら事務所に帰ってもう一度見てからコメントを差し上げたいと思うのですがいかがでしょうか？」

「そうですね、まあいきなりですので、今日の資料をお渡しします。数日中にコメントなり、違うアイデアがありましたら概略で結構ですのでいただけますか？」

「分かりました。数日でもいいアイデアができるかどうか分かり

ませんが、期待に応えられるようにやってみます」
台湾では頼まれて「できません」とか「難しいです」などの否定的な答えは能力がないと判断されるので常にポジティブな受け答えをする必要がある。

午前中で会議は終わり、設計部の人たちと近くのレストランで昼食をとった。飲茶（ヤムチャ）の店で饅頭や団子などの点心料理をつつきながら会議で話した以外の話を聞くことができた。先ほど気にかけていたことを呉課長に向って率直に聞いてみた。「私は構造屋で全体のデザインにコメントするほど力がありませんが。ただ先ほど説明していただいた案ですが、私から見るとどれもどこかで見たような案で、劉社長が言われようなすごく斬新な案とは思えなかったのですがいかがでしょうか？」

呉課長は、何志偉部長を見てどうします？というような顔をしました。それを見て何部長がお茶を一口飲んだ後、ここう説明した。

「確かに浅田さんの言われるとおりです。三案ともあまり斬新とは言えません。他にもいくつか案があるのですが、吊構造を前提にすると一番の問題は耐風性で、毎年のように風速六〇メートル以上の強い台風が台湾を直撃します。これに耐えられる吊構造で斬新なデザインがなかなかできないのが現状です。他の案のコンセプトもお送りしますので見てみてください」

なるほど、すでにいろいろ議論があったのだなと思い、

「生意気なことを言ってますみませんでした。すでにたくさん議論されてきたのですね」と言って何部長に頭を下げた。

「いえいえ、いろんな意見が出るのは大歓迎です。他の案に対する意見もぜひください。意見が出たら議論しましょう」

その後もプロジェクトの話聞いて、昼食会は一時間ほどで終わった。帰り際に、金城凜に日本語で、

「いつまで台湾に滞在される予定ですか？」と尋ねた。

食事中、金城凜はあまり積極的に台湾人の話題に発言せず、皆が話すのを聞いているのが印象的だった。

「私はこういう特殊なプロジェクトの経験がないのですが、少なくとも入札が終わるまで台湾にいるように社長に言われています。このプロジェクトに参加できるのは光栄だと思っています。ですが、私、中国語が十分ではないので万建建設の人と議論するのがたいへんです」

「でも設計部の人は英語ができるのではないですか？」

「はい、私、英語もうまくないのですが皆さんが英語で話しているだけで助かっています。日本の方が加わっていたら、本

当に心強いです。よろしくお願いします」

「いえ、僕も若輩者であまり役に立つとは思えません、こちらこそよろしくお願いします」と挨拶して別れた。

うまくいくか心配していた最初のミーティングもなんとか終わり、昨夜に林美玲と約束した台湾大学の歴史学科に向かってバイクを走らせた。昨日と同じ基隆路の門を入れて、しばらく真っすぐ行くと右側に陸上のトラックがあり、この大きな赤土色のトラックの左側に四階建ての古い建物が何棟も道路と直角方向に建っている。木立の茂った横道に入ったところで、エンジンを切ってバイクを押しながら文学部の建物を探していく。一〇月とはいえ、木立の影は強い太陽の光を遮ってくれて心地よい。その時、五〇メートルくらい先で手を振っている美玲の姿を見

つけた。薄い空色のＴシャツとジーンズ姿の美玲に向かって浅田も手を振ってから急ぎ足で近づくと、

「浅田さん、大変よ、」

えらく緊張した顔で驚くようなことを言った。

「ニュースで男の変死体が基隆河の河原で発見されたと言っていたわ」

「ええっ、どういうことですか、それは、」

咄嗟のことに、浅田は何のことか分からない。

「今日の朝、松山空港の北側の基隆河の河原で男の変死体が発見されたのよ。それが黒色のシャツにジーンズを着ていたと言うのよ。昨日の夜の男も黒いシャツにジーンズだったわ、これは偶然ではないと思うのよ」

つまり昨夜、金印の箱を落とした男が殺されたのではないかと

言っているのだ。松山空港は台北にある古い方の空港で台北市街のすぐ北側にあり、飛行機が市街をかすめるように離着陸する。発見されたという男の変死体の場所は昨日金印を拾ったところからそんなに遠くではない。

浅田もびっくりして、

「まさか、そんなことはないんじゃないかな」と言ってから、

「確かに昨日の男も黒っぽいシャツを着ていたような気はするが、何も確定的なことは言っていないのでしょ」

とは言っても、ひよっとすると美玲の言っていることが当たっているような気もした。

「そうですね、黒シャツの男は、やくざっぽい感じの三人の男に追われて逃げて行ったのよ、そんな偶然があると思う？」

「万一そうだとしたら、ますますこの金印を持っていると危な

い、すぐに警察に届けよう」

「だめよ、昨日も言ったでしょ。そんなことをしたら私たちが殺人犯にされるかもしれないわ」

「じゃあどうする？」

「とにかく本物かどうか確かめてから捨てる、それが一番よ」
捨てるなら本物かどうか確かめる必要はないと思いつながら美玲に連れられるようにして文学部の建物に入っていた。

古い建物の中央にある階段を三階まで上がり、右側の廊下をしばらく行くと歴史学科と書かれた札がドアの上のところ、廊下に突き出るように出ていた。美玲はドアをノックして中に入っていく。中は二〇平米くらいのスペースで一方の壁に本棚が並びその前に古い置物が雑然と置かれており、反対側の壁に

沿って三人の学生らしきに人たちが机を並べていた。一番近くいた白いシャツに紺のスカートの女子学生に向って、美玲が話かける。

「呉先生はおられるかしら？ 私、工学部の林ですけど」

「林先生ですね、呉先生から聞いております。こちらにどうぞ」
女子学生は呉教授から聞いていたとみえてすぐに案内してくれる。本棚と廊下側の壁の間のドアをノックしてから隣の部屋に入っていく。

中には同じくらいスペースがあり、ミーティング用のテーブルと椅子があり、奥の窓際に大きな机がこちらを向いておかれており、机に向って座っていた女性が立ち上がって、美玲に微笑んだ。

「やあ、林さん、お久しぶりね」

オレンジ色のシャツに黒のスラックス姿ですらりとした五〇代前半かと思われる女性で想像していた歴史学者のイメージとは違うファツシヨナブルで品のある人である。

「こちらは建築家の浅田さんです」

「あら、日本の方なのね、呉麗華です」

「はい、日本人で、台北で建築の仕事をしている浅田玄です」

呉教授に促されてミーティング用のテーブルに向かい合って座る。座るとすぐに、

「それで金印を持っていると言っていたけど、どういうことなの？」浅田の前に置かれた箱を見ながら呉教授が美玲に尋ねる。

「はい、昨夜二人で信義路の近くの路地を歩いていたら、突然男が横の路地から飛び出してきて道端に止まっていたバイクにぶつかって転んだんです。その時転んだ拍子で、その男が持っている

たものが飛んで行ってしまったのですが、すぐ後から三人の男が追いかけてきて、転んだ男は落としたものを探す暇なく逃げに行ってしまった。その路地は暗くてよくわからなかったのですが、私たちは飛んで行ったあたりを探してこの箱を見つけたのです」

「それで中を見たら金印が入っていたのね、早速見せてくれない？」金印に興味が向いて、昨日の出来事には関心がないらしい。

「はい、どうぞ、昨夜拾ったときのままです」

浅田が箱を差し出すと、呉教授は目を近づけて箱の横や下をゆっくりと見ていく。

「相当古いもののようなね、蓋に何か書いてあるけど、かすれてほとんど読めないわね」

と言ってから、ゆつくりと箱の蓋を開けて中の金印を取り出す。美玲と浅田は黙って呉教授が金印を取り出すのを見ている。

取り出した後、呉教授は全体が金色に包まれた金印にしばらく見とれているようだった。そして、さらにじっくり見てから、

「くすんでいるけど本物の金でできているようね。でも、このままでは判然としないから、まず押してみましよう」と言って立ち上がり、自分の机から朱肉と紙を持ってきた。

丸い朱肉に金印を十分に押し付けた後、テールブの紙に金印を押し付けた。赤い模様のような四角い印が現れる。浅田と美玲は思わず覗き込むが、やはり模様のようにしか見えない。呉教授は、テールブに肘をついてじっと考え込み、現れた模様を指でなでるようにしていたが、しばらくして首をかしげながら口を開いた。

「多分、『東寧王国王朱成功』と書いてあるんじゃないかしら」
「どういう意味でしょう？」

浅田と美玲が同時に訊いた。

呉教授は、二人を見てにこりとしてから説明を始めた。

「そうね、あなたたちはもちろん鄭成功のことは知っているわよね、台湾の始祖と言われている英雄ですものね。東寧王国というのは、彼が台湾に作った政権の呼称で、台湾のことね。鄭成功は明の隆武帝から彼の功績と聡明さを称えて国姓である『朱』姓を賜った。つまり、朱成功は鄭成功のことよ。現代的に言くと、『台湾国王鄭成功』といったところかしら」

二人の顔を見ながら、さらに続ける。

「ただ彼は生涯『朱』姓を名乗ることはなかったと言われているわ。もしこれが本物なら、これを作って彼に贈ることができたの

は明の皇帝しかない。可能性としては、彼が明の正統と奉じて清と戦っていた永曆帝なんだけど、鄭成功がオランダ軍に勝って東寧王国を樹立したのが一六六二年二月で、永曆帝は同じ年の六月に清にとらえられて殺されているのよ。永曆帝をもって明の皇統は断絶しているから永曆帝以外ではありえない。まあわずかだけど可能性がないわけではないと言ったところかしら」ということは、もしこれが本物だったらすごい価値のあるものですね」

美玲が目を輝かせる。

「そうね、万一これが本物だったら国宝級の宝物ね。しかし、こんなものが今頃どこから現れるというのはあまりにも突飛な話だわね。台北の街の中で拾ったというのでしょ」

さすがに、すぐに本物とは言ってもらえそうにない。美玲も少し

気が沈みかけるが、教授は続けて、

「見つけた経緯はどうかとは思いますが、私も突飛な話には興味があるのでもう少し調べさせてくれない？」と言ってくれた。

「ええ、どうぞ、どうぞ、存分に調べてください。もし本物だったらどうということになるかとわくわくしますわ」

美玲は完全に金印の虜になっている。

浅田も鄭成功の話は知っている。日本の平戸島で日本人の母と中国人の父との間に生まれたハーフで、明が滅んだ後、満州民族の清の支配に対する抵抗運動を主導したが南京で大敗して台湾に逃れ、当時台湾を統治していたオランダ東インド会社を追い出して鄭成功政権を樹立した台湾の英雄である。日本でも近松門左衛門の『国姓爺合戦』として知られている。

しかし、現実はこの金印は偶然追いかけられていた男が落と

したもので、しかもその男が殺されたかもしれないというのである。

「お二人に水を差すようですが、先ほど林さんが話しましたように、これは偶然拾ったもので、しかも何かの犯罪にかかわっている可能性があります。なるべく早目に警察に届けた方がいいと思うのですが、」

浅田は、少し気持ちが高揚している二人に冷静になるように言った。

「何よ、昨日から警察には本物かどうかわかってからにしようと言っているでしょう。呉先生ももう少し調べて真贋を確かめようと言ってくださっているのよ」

美玲がむっとなって反対するが、呉教授は浅田に向かって頷き、「そうですね、学術的には大変興味深いものですが、あまり興味

本位で長く持っているのはよくないようですね、なるべく急いで調べますので二、三日待ってもらえますか？」と言ってくれた。

「分かりました。ではくれぐれも内密にしていただけのようなお願いします」

二人は、金印を呉教授のもとに置いて帰ることにした。

呉教授の研究室を出た後も、

「もし本物だったら大発見になるわね」と美玲は高揚している。

新華実業で

家に帰った後、浅田は金印のことはしばらく頭の片隅におい

て、高雄超級競技場のプロジェクトに専念しようと思つて翌日から仕事にかかった。J.V.の中では方針がおおよそ決まっていた、何か新しいものがでてくれば儲けものくらいに思われているかもしれないが、うまくいけば自分の力の見せどころでもあると思つて熱を入れることにした。

浅田の事務所は龍山寺と淡水河に挟まれた古く雑多な街の中にある小さくて古臭い三階建ての二階にある。部屋はいわゆる2LDKになっており、二部屋のうち一部屋は寢室でもうひとつが仕事部屋である。仕事部屋の窓は路地に面しており、洗濯物が干してある向かいのアパートの部屋と向かい合っている。十月の台北は気温が三十度を超えることはなく、窓を開けはなしで仕事をすることができる。部屋の中は建築関係の資料があちこちに山積みになっており、世辞にもきれいに片付いていると

は言えないが、浅田にとってこの雑多な街といかにも仕事部屋といった雑多な部屋が居心地のいい安住感を与えてくれる。

その後三日が経って、ひとつの案ができた。大雑把な案であるが、大きなアーチで下に平たいアーチを吊り下げ、この下のアーチは中間でそれぞれ大きく二股に分かれている。下のアーチからケーブルを使った屋根が両側の壁に延びているというものである。この二段アーチにすることで耐風安定性が格段に向上するとともに、中央に大空間のスタジアムを設置することができる。また上側のアーチはメモリアルアーチとして十分なインパクトを与えることができる。六枚の簡単な図面と計算書を万建建設の呉家豪課長宛にEメールで送った。さて、先方がどう思うか気になるところであるが、ひと仕事終わったので近所で夕食にビールを飲みながら肉料理でも食べに出るかと思いつながらパ

ソコンの電源を落とそうとした時、携帯電話が鳴った。

「你好、我是浅田（もしもし、浅田です）」

「美玲です」

「ああ、林さん、どうしたのですか？」

「今、台南にいるのよ、浅田さん、今から来られませんか？」

「えっ、台南？ それはどうしたのですか？」

「金印のカギは台南にあるかもしれないと呉先生がおっしゃるので、台南にある新華博物館に来たのよ。そこで意外なことが分かったのよ」「そうですか、それは緊急を要することですか？」

「そうね、大変な真相があるようなのよ」

浅田は美玲が何かの事件に巻き込まれようとしているのではないかと感じたのでどんな真相なのか訊くのをやめた。

「分かりました、今から新幹線で向います。どちらのホテルです

か？」

「台南大飯店よ」

「分かりました、今五時過ぎですから、八時過ぎには台南に着けると思いますが」

台北から台南までは新幹線で二時間ほどで行ける。浅田は急いで適当に旅行用品をリュックに詰め込み、表通りに出てタクシーを拾った。呉教授を訪問したときから美玲は金印に異常に興味を抱いていた。しかし、そもそもあの金印は追われていた男が偶然落としたもので、しかもあの男が殺されたかもしれないのである。

龍山寺近くの浅田の家から台北駅まで二キロメートルほどと近く、一八時発の新幹線に間に合い、二〇時過ぎに台南駅に着い

た。台南は台湾で最も古い都市で鄭成功が台湾政権を樹立して、その首府を置いたところである。当時は政治・経済・文化の中心都市であり、現在でも台湾の六大都市のひとつである。新幹線の台南駅は市の中心から一〇キロメートル以上南に離れており、浅田が台南大飯店に着いたのは九時過ぎであった。台南大飯店は台南市の中心にある三つのロータリーうち最も北側のロータリーのすぐ近くにあり、偶然かもしれないが成功路という通りに沿ってあった。五階建てのホテルに入って、フロントの女性に話しかける。

「先ほど予約を入れた浅田です」

チェックインの手続きをした後、すぐに美玲のことを尋ねる。

「ここに泊っている林美玲さんと待ち合わせているのですが、彼女に連絡していただけませんか？」

女性は、すぐに部屋に電話してくれ、しばらくして受話器を置いた。

「林様は当ホテルにご滞在ですが、今はお部屋におられないようです」と淡々と言う。

呼び出しておいてどこかに出かけていると分かり、すこしムツとしながら部屋に入って携帯電話をかけた。

「您撥打的電話無法接聽、因為它遙不可及或電源已關閉」つまり、美玲の電話は圏外または電源が切れていると言っている。

「ええっ、どういふことだ」と思いながら再度かけるが同じ応答である。

その後、時間をおいて何度もかけたが美玲が電話に出ることはなかった。

—美玲は、このホテルにチェックインしたが、浅田が到着するま

での間に何かが起こり外出した。そして携帯電話が通じない。これはすでに美玲が事件に巻き込まれた可能性があるのではないか。

—どうしたものか？ そうだ呉教授がカギは台南にあると言っていたと話していた。呉教授なら何かを知っているかもしれない。

ここまで考えて、この間もらった呉麗華教授の名刺を取り出す。幸運にも携帯電話番号が載っている。携帯電話をかける。

「您撥打的電話無法接聽、因為它遙不可及或電源已關閉」
美玲の電話と同じ応答である。

—ひょっとして二人は一緒なのか。警察に相談するか。いや警察に言っても犯罪に巻き込まれた確証はなく探してはくれないだろう。

—そうだ、美玲は新華博物館に行つて意外なことが分かったと言つていた。仕方がない、明日その博物館に行つて美玲のことを尋ねてみるかと思つた。

浅田は、美玲のことを考えるとなかなか眠れず、うとうとしながら、あのいやな夢を見た。幼い自分がナイフを持っていて仲間の子を刺そうとしている。ああつと言いながら目を開けた。すでに朝の光が窓を照らしていた。

ポ—つとしている頭を振りながらベッドから起き出してシャワーをする。シャワーをしながら、「あの夢から逃れるために台湾にいるのに、なんとということだ」と悔しさとともに悲しくなつた。自分もすでに何かに巻き込まれているかもしれないと思いつつも、美玲のことを考えるとそれから逃れることはできない

と感ずる。

ホテルの一階にあるレストランで、バイキングの朝食を食べながら新華博物館の開館時間を調べる。9…30〜17…30とある。また場所はホテルから南へ車で三十分ほどである。

ホテルの近くからバスに乗り、新華博物館站というバス停で降りる。博物館は台南都会公園という広大な公園の中にあり、中央にドームがありバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂を思わせる巨大な石造りの建物である。広大な池に架かる橋を歩いて博物館に到着する。入り口にはパルテノン神殿を思い起こさせる大きな石柱が何本も立っている。休日ではなく朝早い時間なのか人はまばらである。

石柱の間を通過して、入口を入ると外から見えたドームの下に巨大な空間があり、左右と奥方向に向って展示場が広がっている。

る。西洋の美術、楽器、兵器および自然史の四大分野に分かれていますと案内がある。どうも「金印」に関係するようなセクションはなさそうである。何の当てもなしに博物館に来たわけで、何をどう探せばいいかわからない。とりあえず、ドームの下にある案内カウンターで訊いてみることにする。

「突然の話ですみません、昨日若い女性が来て金の印鑑について尋ねませんでしたか？」

「いえ、そのような方はいらっしやいませんでした」とそっけない返事が返ってきた。少し突飛な質問だったと思い、質問を変えらる。

「そうでしたか、では鄭成功に関連した展示がないかとは尋ねませんでしたか？」

「いえ、ここには鄭成功に関する展示はありません」

元の質問の意図からずれた返事が返って来る。すると、近くにいた案内カウンター別の女性が、何かに気づいた様子で、

「そういえば、鄭成功について訊きたいことがあるので館長に会えないかと言う人が来たわ。なんでも台湾大学の教授から話を通してあると言うので私が館長室まで案内したわ」

「ええっ、そうでしたか、今日も館長はおられますか？ 昨日の女性を探しているのですが行方がわからず困っています。館長が昨日どんな話をされたか伺いたいのですが、」
懇願するように早口で言った。

「昨日の女性とはどんなご関係でしょうか？」

「彼女は台湾大学の建築工学の助理教授で、私は浅田と言いまして建築家で彼女と共同研究をしているものです」
そう言って名刺を差し出した。

「そうですか、すこしお待ちください」

館長に電話をかけてくれたようだ。台湾大学の名前を出したのが効果的だったかもしれない。

運よく館長は在席で浅田に会ってくれた。案内されて五〇平米もありそうな広い館長室に入ると、呉教授と同年代の女性が出迎えてくれた。

「你好、会っていただきありがとうございます」

「館長の郭玲玲です」

館長はにこりと笑って握手し、差し出した名刺を受け取ると、「どうぞ」と六、七人ほどが向かい合って座れそうな長いソファに促す。座るとすぐに、

「どういいうお話でしょう?」

郭館長がまっすぐに浅田を見ながら訊く。

「昨日、郭館長を尋ねてきた林美玲さんが昨夜から行方がわからないのです。電話も通じず困っているのですが、昨日林さんが郭館長とお話しされたことと関係があるのではないかと思います」

「そう、それはどういふことでしょう。林さんは当博物館に鄭成功に関連した『金印』が所蔵されていたのではないかとお尋ねでした。当館には鄭成功に関連したものは、以前から所蔵されていませんと、お応えしました」

館長は浅田が困っていると言っても平静に応える。これはどういふことか、美玲は、博物館を訪ねて意外なことが分かったとも、大変な真相があるかもしれないとも言っていた。

「林さんはそれを聞いて、そのまま帰ったのでしょうか？」

「これは歴史的に重要なことで台湾大学の歴史学の教授も当館に何かヒントがあると言われているとおっしゃいました」

「それで何かヒントがあったのですか？」

「私は西洋美術が専門で歴史学の専門家ではありません。ご存知かどうかわかりませんが、この博物館は新華実業の創始者である許建良会長が世界中から集めたコレクションを展示しているのです。許会長のコレクションはこの博物館だけでなく、ご自宅や会社にもあります。少し無責任と思いましたが、ひよっとしたら許会長がお持ちかもしれないとお話しました」

「では林さんは許会長に会いに行ったのですね？」

「許会長はご高齢でお会いするのは難しいかもしれませんが申しましたが、会って確かめると言われていました」

「許会長はどこにお住まいかご存知ですか？」

「台南のお生まれなのでこの近くにも家がありますが、会社のほうにお尋ねください、総務部長に電話しておきましょう。すぐ近くですよ」と言って郭館長は新華実業の住所をメモしてくれた。浅田は丁重にお礼を言って立ち上がった。

帰り際に、

「ところで林さんが言っていた鄭成功の金印の話はどなたかにお話しになられましたか？」と訊いた。郭館長は一瞬顔色が変わったように見えたが、

「いいえ、私の専門外ですのでどなたにもお話ししていません。お仲間が早く見つかるといいですね」とにこりとしながら応えた。

もらった住所をGoogle Mapで調べると新華実業の本社は博物

館からわずかニキロメートルほどのところにある。Google Mapをたよりに歩いていくことにした。低層の住宅や店舗の並ぶ道路を南方向に向って歩き、しばらく行くとバナナ畑が広がっていた。さらにしばらく行くと、片側二車線の広い道路に出て、この道路を東方向に向って地図を辿って行く。周辺に工場が立ち並んでいるなと思って歩いていると、右側に大きく「XINHUA（新華）」と書かれた八階建ての大きなビルが見えた。ビルの前には広大な芝生の庭が広がっており、庭の前の道路際に守衛所があった。郭館長に聞いた総務部長の名前を言うと、「來賓」と書かれた名札をくれて通してくれた。芝生の広がる広大な庭を歩いていくと、道の両側に大きな白い彫刻がいくつも置かれている。これも会長のコレクションなのだろう、どれだけの資産の持ち主だろうかと思ってしまう。入り口に四十代くらいと思われる

大柄な男が待っていて、話しかけてきた。

「浅田さんですか？」

「はい、浅田です。陳部長でしょうか、わざわざお迎えいただきありがとうございます」

突然やってきた男を玄関まで総務部長が迎えに来ていたことに違和感を覚えたが、陳部長は浅田の名刺を受け取った後、

「かまいません、どうぞ」と丁重に案内してくれる。

促されて中に入ると天井の高い広いロビーがあり、何人かの人
が立ち止まって話をしたり、書類を持ってゆっくりと歩いてい
る人らがいる。ロビーの横に並んでいる会議室のひとつに通さ
れ、テーブルに陳部長と向かい合って座る。

「陳金福です。昨日いらした林さんをお探しだと聞きました」
やはり、美玲はここに来たのだ。

「はい、昨夜から連絡が取れず心配しています。ここでどのような話をしていたのでしょうか？」と切り出し、

「ここへは鄭成功関連のコレクションについて許会長にお伺いしたいと申して来たのではないでしょうか？」

早速本題について訊いた。

「林さんは新華博物館に鄭成功に関連した『金印』があったのではないかとのお話でした。そこで許会長にお話ししましたが、そのような物を手に入れた記憶がないとのことでした」

総務部長の陳金福は浅田の心配な様子には気にも留めず平静に話す。

「では林さんは許会長にお会いしていませんのですか？」

「会長はすでに九四歳の高齢ですので、私が必要に応じて御用を伺ってお伝えしています。ただ会長は林さんのお話しになっ

た『金印』について興味を持たれ、どんなものかももう少し詳しく話を聞きたいと言われました。そこで私が林さんに尋ねましたが、会長にじかに話したいのでここでは話はできないと言われました。会長にそのことを伝えますと、では後で自宅に来てくれと言われ、林さんにそうお伝えしました」

「では、林さんは許会長のところに向ったのですかね？」

「だと思いますが、会長は夜きてくれと言われましたので、夜になつてから向かわれたのだと思います。浅田さんは林さんとういうご関係ですか？　また浅田さんらはその金印をお持ちなのですか？」

陳部長が突然金印について訊いてきた。

「ああ、すみません申し遅れました。私は台北で建築関係の仕事をしておりまして、林さんとはある建築プロジェクトの共同研

究を一緒にやっている仲間です」と言った後、

「私たちは歴史学とは無縁のものなのですが、林さんの友人の歴史学の先生が鄭成功に関連した金印が存在していたと林さんに話され、林さんがそれにたいへん興味を持ち調べていたので」となるべく曖昧に応えた。

「ではその歴史学の先生が金印をお持ちだったのですか？」とさらに突っ込んで訊いてきた。直感で、この話をこれ以上してはいけないと思い、

「いえ、私はその先生と直接話をしたことはありませんのでそのあたりについてはまったく知りません」

陳部長はその応えに納得したようではなかったが、それ以上金印について訊いてこなかった。

浅田は自分も許会長に会って美玲のことを訊ねたいと言った

が、会ってくれるかどうか後で連絡すると言われ、残念ながら美玲の所在について分からないまま新華実業を後にするしかなかった。美玲のことを思うと今すぐに会いたい、今どうしているのかと思うと胸が締め付けられるようである。美玲のことを考えながらとぼとぼと歩き、守衛所を抜け、会社の前のバス停からバスでホテルに向った。

バスの中で少し冷静になって今日のことを思い返してみた。

—美玲は呉教授の話を受けて、台南に来て少なくとも新華博物館と新華実業を訪ねてその後新華実業の許会長に会いに行こうとしていた。

—美玲も許会長には夜に来てほしいと言われた。ということは許会長に会う前に自分に連絡してきて台南に来られないかと言ってきた可能性がある。

—つまり、その時に、今日自分が聞いた以上の何かの情報がすでにあつたということではないか。

—許会長は美玲の話に興味を持ったと言っていたが、今回の金印に心当たりがあるのではないか。

—そもそも美玲が台南まで来たのは呉教授が『カギは台南にある』と言ったことのようなだが、呉教授は許会長と関係があるのか？ もしそうなら自分で許会長に連絡すれば済む話ではないか？なぜ美玲が一人で来たのか？ 呉教授の電話が不通になっているのはなぜか？

—それにしても美玲はどこに行ってしまったのか？ もし事件に巻き込まれていたらどうしたらいいのか？

考え出すといろいろな疑問が出てくるが、いくら考えても答えが出るはずもない。もうすぐ台南市街に入るなと思ったその

時、携帯電話が鳴った。

「你好、浅田です」

「先ほどお会いした陳金福です」

「ああ、陳部長、会長にお会いできそうですか？」

「はい、会長がお会いになるそうです。浅田さんはどのホテルにお泊りですか？」

「成功路にある台南大飯店です」

「分かりました、では夕方七時に車を差し向けますのでそれで行ってください」

「ああ、わざわざありがとうございます」

許会長が会ってくれるという、しかも車で迎えに来てくれるというではないか。何かが進展しそうな予感で「よしっ、」と思わず呟いた。

ホテルには午後四時頃に着き、許会長に会えば美玲のことが何かわかりそうな感じになり、今まで忘れていた仕事のことへ気が向いた。万建建設の呉家豪課長に電話して、昨日の夕方に浅田が送った案について検討してもらったか訊いてみた。今検討中であるが明日、打ち合わせがしたいので、会社の方に来てほしいとのことであった。今日中に美玲のことが分かれば、明日の朝一番の新幹線で帰ると午前中でも間に合うが、少し余裕をみて打ち合わせを午後にしてもらった。

夕方六時前までにホテルの一階のレストランで夕食を済ませ、じりじりしながら何度も時計を見て過ごし、一五分ほど前には一階のロビーに下りた。玄関の見えるソファアームに座って玄関の方向をじっと見ていると、五分ほどして薄茶色のシャツを着た

若い男が入ってきてフロントに向って歩いて行き、中の女性に声をかけた。

「浅田玄さんの部屋に電話してほしい」

浅田はすぐに立ち上がって速足で歩いて行き、男の背後から、

「私が浅田ですが」と声をかけると、男はさっと振り向く。

「あっ、そうですか、お迎えに来ました」

年は二〇代前半ではないかと思った。

男に促されて玄関を出ると、玄関の正面にセダンタイプの白い車が停まっております、後ろの席に座った。男は何も言わずに車を出発させ、近くのロータリーで南横公路と標識に出ている道路に入った。

「私は、台南は詳しくはないのですが許会長の家はどの辺りにあるのですか？」と男に声をかけるが、

「東の方です」とだけ答えた。無口な男のようだ。

両側の照明に照らされた道路を曲がることなくどんどん進んでいく。しばらく行くと両側に畑が広がって家が点在するようになり、市街地を抜けたのが分かった。

「市街地から離れたようですが後どのくらいで着きますか？」と訊くが、

「三十分くらい」とだけ答えた。

新化という小さい町を通り越しさらに進んでいくと、民家も少なくなり両側に山が迫ってきた。こんなところに許会長の家があるのかと思っていると、右側に登山産業道路と標識が出ていた細い山道に入り、照明のない木々に囲まれた坂道をどんどん登っていく。三、四十分くらい登って行くと月明りに照らされて遠くまで見えそうな小高い丘の上に出たことが分かった。する

と車は道路の右側に建った二本の石柱でできた門に入った。門の中には薄暗い照明があり一〇〇メートルくらい先に平屋建ての家がある。

家の前で車が停まり、運転手の男に促されて車を降りて玄関に向う。一般的な家よりかなり大きいが別荘のような建物でもうも大富豪の許会長の家とは思えないなと思った瞬間、頭に「がっ、」という衝撃音が走ったという記憶だけを残してその場に倒れ込んだ。

脱出

薄暗い部屋の中で浅田玄は足を何かに揺らされているなと感じた。

「浅田さん、」

暗がりの中で美玲の顔が近くにぼんやりと見える、と同時に頭が「ずきつ」と割れるように痛む。頭を手で押さえようとするが手が上がってこない。再び、

「浅田さん」という声に応えて、

「ああ、美玲」と名前を呼んだ。

「気が付いてよかったわ、頭から血が流れているわ」と言うが、両手と両足を縛られて床に転がされているので確かめようがない。Gパンと黄色のシャツの美玲はやはり両手と両足を縛られてすぐそばの壁に寄りかかって腰を下ろしている。

「林さんは大丈夫？」

「私もひどく殴られたけど大丈夫よ」と言ったが顔を見ると唇の横が切れて腫れあがり血がにじんでいる。

「これはどういうこと？ 許会長に会いに来たんでしょう？」

「ごめんなさい、昨日の夜、許会長に会えますと言われたけど心細くて浅田さんに電話したのよ。電話してしばらくして浅田さんが着く前に迎えの車が来てしまって、ここに連れてこられたの」

「ええっ、それでなんでこういうことになったわけ？」

「それは、．．．」と美玲が話そうとしたとき、

照明がパツ点いて明るくなり、部屋のテーブルやソファが光って見えた。と同時に

「気が付いたようだね、浅田さん」と言う声がドア方から聞こえた。声の方を見た瞬間、

「えっ、陳部長、」と叫んだ。

新華実業の陳金福部長だった。他に運転手の若い男ともう一人

の男が入ってきた。もう一人は浅田と同じか四〇歳近くであるか。浅田にはもう何がどうなっているのか分からない。

「何がなんだかわからないって顔だな」

陳部長が浅田らのそばまで寄って来る。

「どういうことだ、これは許会長の指図か？」

壁際まで這いずりながら言った。

「まあ、そう急かしなさんな。これは許会長とは関係がないんだよ。わしらはただ盗まれた金印を返してほしだけなんだよ」

「なにっ、あの金印はお前らのものだといふのか」と言ってから「あっ、しまった」と思った。

「ほほう、金印のことをよくご存じのようだね、浅田さん、あなたの持っている金印を返してもらおうよ」と言うではないか。

「僕がそんなものを持っているはずはないだろ」

「そこのお嬢さんはあんたが持っていると言っているのだがね」
「えっ、」と声を出して美玲を見る。

「ごめんなさい、私ひどく殴られて、つい浅田さんが持っていると言ってしまったのよ」と美玲が言った。浅田は啞然となって美玲を見ると、涙を浮かべている。

「ということ、わしらはあんたが現れるのをずっと待っていたのだよ。さあ、どこに隠しているか言ってくれ。ここは野中の一軒家だ、いくら大声を出しても誰も来ないぜ」と陳部長が言った途端、他の二人が浅田を立てておいて殴りかかった。両手と両足を縛られているので抵抗などできるはずもない。

「やめてっ、その人は持っていないわっ！」

美玲が叫んだが、それにかまわず、腹や顔面を蹴ったり殴ったりしてくる。たまらず膝から崩れ落ちた。

「どこに隠してあるか言う気になったかね」

陳部長が両ひざをついている浅田の顎を持ち上げながら言った。

「そんなもの持っていないと言っているだろう。本当のことだ」
陳部長の目を下から睨みつける。

「そうか、そんなに痛い目に会いたいということだな、もう少し可愛がってやれ」

陳部長が言った途端、運転手の男がボディと顔面を何度も殴ってきた。浅田の記憶が途切れ床に倒れ込む。

その間、美玲が何度も

「やめてっ！」と叫んでいた。

「よしっ、こいつに水をぶっかけろ」

運転手の男がバケツに汲んできた水を浅田の血だらけの顔にぶっかけた。しばらくして浅田が薄目を開くが、もう自分で立つこ

ともできず倒れたままぼんやりと見上げた。

「気が付いたかい、あんたがそんなに強情ならこのお嬢さんの体に訊いてみるか」と言いながら二人の男に合図を送る。男たちが美玲に寄って行って掴みかかる。

「やめてっ！」美玲が叫ぶ。

「やめろっ、分かった、在りかを言うから美玲に手を出すな！」
浅田が大声で叫んだ。

「おお、やつと思い出したようだな、あんたの可愛い女が傷だらけになるのをわしらも見たくないしな。で何処にあるのだ？」

「台北だ」

「台北のどこだ？」

「お前らに言ってもわからん」

「お前、わしらをからかっているのか、もう一度女に訊くしかない

いな」と言って男たちに合図した。男たちが美玲を掴み上げた。

「やめろっ、お前らを案内してやるからやめてくれっ、」

「最初からそう言えばいいのだ。よしっ、明日の朝一番で出発するぞ。こいつらをその部屋に閉じ込めておけ」

二人の男が浅田と美玲をとなりの部屋まで引きづっていった。

薄暗い部屋の中で浅田と美玲は縛られたまま床に横になっていた。

「大丈夫？」と美玲が囁く。

「ああ、相当やられたけどなんとか動けそうだ、美玲は大丈夫？」

「ごめんなさい、こんなことになってしまって。私が金印にこだわったばかりに……」

美玲のすすり泣く声が聞こえる。

「大丈夫、なんとかなるさ」

と言ったがあてがあるわけではない。

「大丈夫と言ってもどうするの？　呉先生のところに連れて行くつもり？」

「いや、昨日の夜に電話したけど、呉先生も電話がつながらなかった。何かがあったかもしれない」

「じゃあどうするのよ」と言ってまた泣き出す。

「明日、台北に行く間にスキを見て逃げよう」

具体的な方法があるわけではないが、美玲の泣き声はどうにも心を締め付け、いとおしく思えてくる。美玲のところまですり寄り、

「大丈夫、きっとなんとかするから」と言いながら美玲の顔に近づいてキスをした。美玲の泣き声は少しの間やんだ。

次の朝まだ日が昇る前に、陳部長ら三人は閉じ込めていた部屋から浅田ら二人を引きずり出して縄を解いた後、昨日の白いセダンの後部席に詰め込むように乗せた。浅田の顔は腫れあがったままである。運手席にはあの若い運転手が座り、隣に陳部長が座っている。後部座席には運転手の後ろに浅田、真ん中に美玲、そして美玲の横にもう一人の男が乗った。男はナイフを持っている。

「逃げようとしたら傷だらけになるぞ。分かっているだろうな」
陳部長が男のナイフを指さす。

「で、台北のどこに行けばいいのだ？」

「龍山寺の近くのコインロッカーの中だ。その前に僕らが台南のホテルをチェックアウトしないと、警察沙汰になるかもし

れないから台南大飯店に寄ってくれ」

「スキを見て逃げようと思っっているのだろうがそうはいかないぜ。ホテルは、すでにわしらが先にチェックアウトしておいたから、何も問題ないぜ」

「よしっ、行くぜっ」

運転手の男は白いセダンをゆっくり走らせ始めた。朝日がまだ顔を出しておらず、遠くの東の空が少し赤くなり始めている程度で周辺は真っ暗である。車は昨日来た登山産業道路をゆっくり下りて、南横公路を台南方面に向かって速度を上げた。朝早いためか通行している車はほとんどいない。

「ところであの金印は何なのだ？ どうせ金印を手に入れたら僕らを殺すのだろう。教えてくれないじゃないのか」と陳部長に向って言った。美玲が「えっ、」と小さく言って浅田の顔を

見る。

「お前らの知る必要はない。黙っている」

「四日前に松山空港の近くで男が殺されたってニュースがあったが、あれはお前らの仕業だろう」

「なにっ、お前なんのことを言っているんだ、黙れと言っているだろう」

「やはりお前らの仕業だな」

美玲の隣の男がナイフを浅田に向ける。

「わしらはそんなことは知らんと言っているだろう、黙れ」と陳部長が怒鳴ったと同時に、浅田は美玲を両腕で強く抱きかかえるようにして座席に深く沈みこむ、と次の瞬間、運転手の座席の頭部を後ろから力いっぱい蹴った。運転手は「ぐっ」と短く声を上げて頭を前のウィンドウに突っ込んだ。同時に車は大きく左

に曲がる、曲がったと思った瞬間、「がががつ、がががつ、……」と音を立てながら横に何回か回転して、そのまま道路脇の畑に転がり込んだ。

車は運よく輪から着地した。美玲は声も出さず浅田にしがみついている、二人とも生きているようだ。真っ暗な車内であるが、美玲の横にいた男は何回か飛ばされた後、前の座席と車の天井との間に挟まれるようして動かない。浅田は二人分のシートベルトを外してからドアを力いっぱい蹴って開け放し、美玲を抱えるようにして草むらの中に転がり出た。どうやら浅田自身にはたいした怪我はないようだ。

「大丈夫か？」美玲の顔を見る。

「ああ、大丈夫、いったいどういいうことよ」と小さく震える声で応えた。大丈夫そうだ。

「歩けるかい？」美玲の手を引いて立ち上がる。

「ええ、そこいら中を打ったけど大丈夫そう」

立ち上がって車を見ると、天井も側面も前方も大きくへこんでいる。前方の暗い座席を覗き込むと陳部長も運転手も左側に倒れ込んで動かない。浅田は開けたドアを閉めて、

「よしっ、逃げよう」と言って美玲の手を引いて道路に上がる。

街灯がなく暗い道路を二人は台南の街の方向に歩き始めた。

しばらく行くと信号があり、角に小さい工場と数軒の民家があった。信号の手前の工場の隅に隠れるようにしてたたずんだ。信号でとまった車は工場の街灯で照らされる。通行する車は少ないが、ここまで来る間に長距離とみられるトラックが何台か通り過ぎて行った。じっと待ちながら何台かのトラックをやり過ごした後、ホロのついた大型トラックが来て赤信号で停まっ

た。浅田はナンバープレートを見て、

「よしっ、これだ」

美玲に合図して二人でトラックの後ろにさっと駆け寄った。美玲が荷台の端を掴んだところで美玲の体を荷台の中に押し込み、浅田も素早く荷台に転がり込んだ。

運転手は何も気付かなかったようで、青信号に変わった途端にトラックを発車させた。荷台はホロが付いており、暗くて何が積んであるかわからないが二人が横になって隠れるスペースは十分にあった。車のナンバープレートには「台北市」とナンバーの上にかかれていたので運が良ければ台北近くまで行くはずである。

トラックは、南横公路をまっすぐに台南市街方向に向かって走

って行く。三〇分くらいすると太陽が東の空を赤く染めだし、ホ
口の中も明るくなってきた。さらに三〇分ほど行くと市街地に
入り、車の数も増えてきた。荷台の奥にはセメント袋がうず高く
積まれ、さらに建設用の小型の機材が積まれていた。二人はこの
機材の影に身をひそめるようにして座っていた。ほどなくして
トラックは右に曲がり、中山高速公路の標識が後方に遠ざかっ
ていくのが見えた。トラックは浅田たちの期待どおりに高速道
路に入り北に向った。台湾のインターチェンジには料金所がな
く、ETCで料金がカウントされるのでトラックはあつという
間に本線に入った。北に向ったことが分かり二人は顔を見合わ
せて微笑み合う。

その後トラックは中山高速道路を北へ北へと進み、両側の緑
であふれた景色がどんどんと後ろの方に飛んでいく。台中を通

りこし、さらに新竹を通り越して行った。台南から三時間あまり経ったところで、トラックは新北インターチェンジで一般道に下りて南の方向に向って進んでいく。新北は台北のすぐ西側の市で台北の衛星都市として発展が著しいところである。トラックは一〇分くらい走って、小高い丘を少し登ったところにある塀で囲まれた建設現場へと入って行った。ビルの建設現場であろう、大きな鉄骨が組み立てられており、ヘルメットを被った何人も作業員が作業をしているのが見える。運転手はトラックを事務所横の駐車スペースに停めて事務所に入って行った。浅田は人目につかないことを確認してから美玲に合図をして、二人でさっとトラックの荷台から飛び降りた。二人は事務所から出てきた人を装いながら出口に向って速足で歩いて行く。出口のところ警備員が立っている。近づくと二人を見た。顔を隠す

ように手を上げて「ご苦労様」と挨拶した。警備員は何かを言うようにとしたようであるが、何も言わずに手を上げて軽く敬礼した。

外に出ると丘の中腹でずっと東に広がる新北市が一望できた。「僕の家は台北の西の端にあるからここから真っすぐに新北を横切れば着く。ここから歩いて行こう」

「そうね、私たち携帯もお金も何も持っていないから仕方ないわね」

「ああ、それにあの事故で連中が死んだかどうか分からないから、それが分かるまで他の人と関わらないほうがいい」と言ってみて、速足で丘を下り始めた。歩きながら、

「あの男たちが死んだら、私たち殺人者になるわ。だって運転手をあなたが蹴ったので事故になったのよ。これからどうするのよ」

美玲が真剣な顔をして問い詰めるように言った。今まで荷台に隠れていてなるべく話さないようにしてきたが、やっと思っていたことが自由に言えるようになったのだ。

「しかしあの状況で逃げるのはああするしかなかった。あのまま連中と台北まで来て嘘と分かったら僕たちが殺されていたかもしれない」

「そうかもしれないけど警察に捕まったら殺人者よ」と冷静ではいられないという顔である。

「いやまだ彼らが死んだと決まっていない。生きていれば僕たちのことを警察に話すはずはない。とにかく家に帰って様子をみよう」

「もし生きていたらまた私たちを探しに来るわ。どんな仕返しされるかわからないから、彼らが来る前に早く呉先生を見つけ

て、金印を彼らに返しましょう」

「ああ、それが一番いいと思うけど、呉先生がすぐに見つかるといいのだが。とにかく家に行ったら電話もあるしパソコンもあるから状況が何かわかると思う」

「わかったわ、じゃあ急いでいきましよう」

美玲も少し冷静な顔になった。

「ところで大学に二日以上行っていないけど大丈夫？」

「大丈夫よ、今日まで休暇をとってあるのよ」

腫れあがった顔をなるべく見られないようにしながら一時間ほど東に向って歩くと、淡水河の支流である大漢溪を渡る橋が見えてきた。

「これを渡ったらもうすぐ龍山寺じゃないかな？」

「いえ、淡水河は龍山寺のところで大漢溪と新店溪に分かれて

いるからもう一つ橋を渡らないといけないわ」
美玲の方がこのあたりの地理に詳しいようだ。

大漢溪を渡ると台北と同じような高層のオフィスビルやレス
トランがひしめいている。さらに一時間ほどあるいて新店溪に
架かる華河橋の上に出た。橋の上から東に広がる台北市が望め
た。ここまで来ると浅田のアパートはすぐ近くであることが分
かる。安堵感が広がり、ものすごく遠くからたどり着いた気がす
る。

さらに十五分くらい歩いて二人は浅田のアパートに着いた。
部屋のキーは幸運なことにズボンのポケットに入ったままであ
った。二人とも部屋に入って何も言わずに倒れ込むようにソフ
アーに腰かけて足を投げ出した。台南の屋敷から連れ出されて

から七、八時間あまりが過ぎており家の時計はすでに午後一時を過ぎていた。しばらくして、

「昨日から何も食べていないから死にそうだ。悪いけどもう少し休んでから何か食べ物と必要なものを買ってきてもらえないか？ 僕の顔を見たら何か怪しまれそうだ」と美玲に言って部屋にあつたクレジットカードを差し出した。

「分かったわ、その顔じゃあ今日は外に出ないほうがいいかもしれないわね」

「その間に何か情報がないか調べておくよ」

美玲が出て行った後、今日の午後に打ち合わせの約束をしている万建建設の呉家豪課長に電話した。

「你好、浅田です。申し訳ありませんが朝から体調が悪く今日の打ち合わせを明日に延期していただけませんか？」

「你好、それは大変ですね、明日でもかまいません。ただこちらとしては基本的には浅田さんから提案いただいた二重アーチの屋根の方案でいくことになりました」と呉課長が言ったのである。

「えっ、そうなんですか、ありがとうございます」
暗く沈んでいた心が、ぱあっと明るくなった。

「それで時間もないので今後は金城建設と分担でやることになりました。そして屋根部分については金城建設でやり、建物内部の詳細は万建設でやることになりました。そこで浅田さんには沖縄に行っていただけで金城建設と一緒に仕事をしていただきたいのですがいかがでしょうか？」

「ええっ、それはまた急な話ですね。いつから行くことになりましたか？」

「早急に取り掛かる必要がありますので、明日打ち合わせをして明後日に出発できませんか？」

浅田は美玲のことや金印のことが思い浮かんだが、これはチャンスだとの思いが強く、

「分かりました、その方向で準備します」と応えてしまった。

電話を切った後、ああ何ということ言ってしまったか、美玲を置いて沖縄には行けないとの思いでいっぱいなる。

とりあえずあの事故がどんな状況かパソコンを開いて調べることにする。「台南 交通事故 速報」と打ち込むとすぐにくつかの記事がヒットした。そのひとつを開くと、

「本日六時半ごろ、台南市の雲山寺近くで道路脇の畑に突っ込んでいる車が発見された。車は横転したとみられ車内いた三人は身体を強く打っており近くの病院に運ばれた。三人とも重体

であるが意識はあり、警察は回復を待って事故原因を調査する模様である」

美玲が弁当やシャツなどを買って帰ってきてドアを開けた途端、浅田はすぐにパソコンを見せながら、

「これを見て、三人とも死んでいなかった」

「ああ、よかったわ！私たち殺人者にならなかったわね」

「それに重体とあるから当分は動けないだろうし、彼らが僕たちのことを警察に話すとは思えない」

「だけど、もし他に仲間がいるとまた探しに来るわ。早く呉先生を探さなきゃ」

「そうだけど、とにかくまず何か食べよう」

立ち上がって冷蔵庫を開き、缶ビールをふたつ取り出した。明後

日から沖縄に行ってくれと言われていたことは、どうしても言い出せなかった。

缶ビールを一口飲んだ後、二人とも空っぽの胃を満たすべく弁当を何も言わずにがむしゃらに食べた。どこにでも売っている排骨弁当であるが瞬く間になくなった。

「こんなにお弁当が美味しいと思っただことはなかったわ」美玲が残りのビールを飲み干すのを見て難を逃れた実感が湧いてくる。

「なんとか生きて帰ってこられて本当によかった」

「本当にそうね、浅田さん、本当にありがとう」

「よしっ、ではもう一度呉先生に電話してみよう」

呉教授の名刺をみながらプッシュフォーの番号を押す。「ルルル」と鳴りすぐに繋がった。

「你好、呉です」

「你好、先日林先生と一緒に伺った浅田です。林先生に代わりますので少しお待ちください」美玲に受話器を渡す。

「你好、林です」と言った途端、美玲の目から涙が溢れ泣き声になった。

「ああ、林さん、どうしたのよ？」

美玲は涙を拭いて一昨日、台南の新華博物館に行ったこと、その後、新華実業に行ったこと、そして金印の窃盗犯と間違われて殺されかけたことを延々と話した。呉教授は「うんうん、ええっ、」と頷いたり、驚いたりしながら聞いて、

「それは大変なことだったわね、本当にごめんなさい。私が新華博物館のことを言ったばかりに。あなたが台南まで行くとは思わなかったのよ」と言った後、

「金印はまだ私が持っているから安心して。あれから私もいろいろ調べたのよ。今からでも私の研究室に来られるかしら？」
「もちろんです、すぐに伺いますわ」

二人は傷の手当をしてから、タクシーで呉教授の研究室に向った。途中で浅田は沖縄に行ってくれと言われたことを話した。

「美玲、実は先ほど万建建設に電話したら明後日から沖縄に行ってくれと頼まれた。ごめんなさい、こんな時なのに言われるがままに、『分かりました』と言ってしまった」

「ええっ、それは私を置いて日本に逃亡するってこと？　ほかの仲間がいてまた私たちを探しに来るかもしれないわ。私のところに来たら私が殺されるかもしれないわ」

えらく極端なことを言うと言ったが、浅田は思ったが、美玲はあの陳部長

の仲間が他にいてまた襲ってくるのではないかと、あの恐怖が蘇っているのである。浅田は美玲の心理状況から考えるとやはりそうなるなと思うと同時に、仕事の話が薄れて美玲への熱い思いが沸き上がる。

「そんなことを言わないでほしい。美玲は僕にとってかけがえない人なのだから。大きなビジネスチャンスだと思ってつい『分かりました』と言ってしまったけど後で断ることにするよ」

「浅田さん、ありがとう、私も浅田さんが一番大切な人よ、そう言ってくれて本当にうれしいわ」

そう言って浅田の首に両手を回した。喜怒哀楽をすぐに表す美玲であるが浅田にとってはそれがまた愛おしく思えた。

二人が呉教授の研究室に入ると、呉教授は、美玲を抱きしめ

て、

「本当に大変だったわね、ごめんなさいね」と言ってから、机の引き出しにあった金印を取り出して美玲に渡した。二人をテーブルに座らせると、

「あなたたちがこの金印を持ってきてから、これはどういうものかと考えたのよ」と話始めた。

「もしこれが本物で、この前話した永曆帝からの賜り物だとしたら、これまでなぜ表に出てこなかったか、と考えると、もし個人収集家がずっと持っていて、自分だけのコレクションにしていたらその可能性もあるかもしれない。そこで思いついたのが台湾で随一の古美術収集家ある許建良さんよ。彼が運営している新華博物館に個人的な古美術品もたくさん収蔵していると聞いたことがあるわ。そこからこれが盗まれた可能性はあるかも

しれないと思ったのよ。それで林さんに、新華博物館にヒントがあるかもしれないと話したのよ。でもまさかあなたが新華博物館を訪ねていくとは思いませんでしたわ」

「あの時は、この金印が歴史的にすばらしいものだと思います、夢中になっていました」と美玲が口をはさんだ。

「そうね、私もこれが本物だったら歴史的発見だと思ったわ。それで許会長には以前、一度お会いしたことがあったので直接連絡してみたのよ。そしたらそういうものが確かに博物館にある。ただしそれがどういうものかはわからないと言われたわ。そこで私の推測を申し上げたら、そういう可能性もないことはないが永曆帝は最後には清軍に押されてビルマあたりまで逃げたわけ、そんな状況の中で鄭成功に賜り物を送ったというの可能性があるのではないかと言われた。もう一つの可能性は、

鄭成功には弟がおり兄の台湾での成功を祝って贈り物をしたのではないかと言われたのよ」

「鄭成功には弟がいたのですか？」と美玲が訊く。

「そうよ、鄭成功は日本の平戸島で生まれて父とともに福建に渡るのだけれど、弟は母とともに日本に残って日本人として育った。名前を田川七左衛門といっって商売で成功して、兄を資金や物質面でずっと援助していたと言われていた。それを考えると許会長が言われた可能性の方が現実的かなと思ったわ」

「そうですね、それはその可能性が高いですね」

美玲はまた興味が湧いてきて目を輝かせる。

「そこで私はそれを確かめるために福建の鄭成功記念館に行ってきたのよ。そして先ほど帰ったばかりよ」

「ええっ、大陸に行かれたのですか！」

二人ともびっくりする。と同時に、浅田はそれで一昨日電話が繋がらなかったのだと納得する。

「記念館には鄭成功と田川七左衛門がやりとりした書簡がいくつか所蔵されていたわ。だから確かに兄と弟がずっと連絡しあっていたことは分かったけど、弟が金印のようなものを送ったという記述は結局見つけられなかった」

「でも可能性が消えたわけではないですよ」と美玲が言う。

「ええ、そうよ。だけどいずれにしてもこれは新華博物館にあったものである可能性が高いわけで新華博物館に返す必要があるわね。許会長は盗まれたことをご存知なかったわ。後で許会長に連絡して返すようにしましょう」

「しかし、博物館の郭館長はそんなものは所蔵していないと言っていたし、新華実業の総務部長が僕たちを閉じ込めて殴った

り脅したりしてまで在りかを聞き出そうとしました。これはいい
ったいどういことでしょう」と浅田が口を開いた。

「少なくともあの総務部長には裏の顔があり、会長に知られた
くない何かがあるのではないでしょうか。そうするとこの金印
にも何か裏があるかもしれません」

「そうね、でもどういことかは分からないわ。いずれにしても
これを許会長に返したら襲われるようなことはないでしょう」
と呉教授が二人を見て言った。

「そうだわ、返してしまつたら私たちを狙う意味がなくなるわ。
そして返した後でも調べられますものね」と金印への興味はな
くならないようで、さらに、

「浅田さん、そうしたら沖縄に行つてもいいわよ。私と呉先生で
また調べるわ」と美玲が浅田に向つて言う。先ほどの心配はどこ

吹く風である。

「きつと許会長自身に返すようにしてください。会長の周りの人間は信用できません」

浅田が呉教授に念を押すように言った。

「わかったわ、そうします」と言ってくれたが浅田にはまだあの陳部長がどういう人間なのかわかっていないという不安が残っている。

二人は呉教授の研究室を出た後、光華数位新天地という電気街にある中華電信の店に行き、前のスマホの回線を停止して新しいスマホを買った。光華数位新天地は龍山寺に近いところであるが、そのまま美玲を送って美玲の家に行った。美玲のアパートは大学の東側にある福州山公園の近くにあった。四階建ての

建物を三階まで階段を上がり、美玲のGパンのポケットに残っていたキーで中に入る。入ってすぐのところに大きなソファーとリビングテーブルがあり、その横に小さいダイニングテーブルが置いてあり、その奥にキッチンがある。台北の一般的な一人用の部屋であるがいろいろな資料などが雑然と置いてある。

「部屋を荒らされたということはなさそうだね」

「ええ、大丈夫ね、誰も入った形跡はないわ。ごめんなさいね、いつも忙しくてあまり片付いていなくて」と言ってテーブルの上を片付けようとする。

「それより無事に帰ってこられてよかった」

「ああ、本当に殺されるかと思ったのに、浅田さんのおかげだわ。呉先生が金印を返してくださったらもう安心ね」

美玲は家に帰って本当に安堵の気持ち湧いてきていた。ただ

浅田にはまだ金部長に襲われたという不安が残っている。

「そうだね、多分すぐに襲ってくることはないと思うけどあの陳部長は得体のしれない男だということは確かなので用心するに越したことはない。僕の出張もしばらく延ばしてもらうことにするよ」

「大丈夫よ、だって金印を返したら襲う意味がないじゃない。浅田さんにとってこの出張はビッグチャンスよ、私のことはいいから行ってください」と言っって浅田に親指を上げて微笑みかける。その朗らかさに魅了されるように美玲の手を引き寄せ、

「ありがとう」と言いながら美玲を抱きしめて美玲の唇に自分の唇を重ねた。しばらく互いに強く抱きしめ合った後、唇を重ねたまま二人はソファに崩れるように横になっていた。

そのころ、呉教授は許建良会長と電話で話をしていた。

「ところで、先日お話ししていた金印の件ですが、会長は新華博物館に所蔵されていると言われましたが最近ご覧になりましたか？」

「呉さん、なんでそんなことを訊くんさい。最近実物は見てはいないが博物館にあるはずだよ」

「実は、似たような金印が私のところにあるんですよ。これは博物館にあったものではないかと思っっているのです」

「なに！ それはどういうことだ」

「話は少し長くなるのですが、」と言った後、呉教授は美玲と浅田が金印を拾ったこと、新華博物館を訪ねたこと、そして新華実業を訪ねた後に総務部長にひどい目にあわされたことを話した。「ちよつと待て、陳金福がそんなことをするはずがない。仮にも

新華実業の総務部長なのだぞ」

「お言葉ですが、陳部長は今朝彼らを拉致したまま台北に向う途中で交通事故にあつて入院中のはずです」

「なに！ 信じられん、ちよつと待ってくれ。後で電話する」と言つて許会長は慌ただしく電話を切つた。

次の日の朝、浅田は約束どおり万建建設に行き、呉設計課長を訪ねた。打ち合わせには、呉課長のほかに何志偉設計部長、黄天佑部長と金城凜が同席した。最初に何部長が、

「今日は集まってもらつてありがとう、じゃあ始めようか」と言つてから、

「浅田さん、面白いアイデアをありがとう。いろいろ検討した結果、浅田さんの案をベースにさらにアーチ部分をモディファイ

してモニュメントとしての見栄えを向上しようということになりました。詳しくは呉課長が後で話しますが、この屋根部分は金城建設で分担することになりました。そこで構造の専門家である浅田さんに沖繩に行って金城建設と一緒にやってほしいのですがどうですか？」

「はい、その話は昨日呉さんから聞いております。明日からと伺っていますが、ただ少し準備がありますので二、三日遅らせていただけないかと思うのですが、」

あんな事件に会ったばかりであり、美玲を残してすぐにはいけないとの思いが強い。

「そうですか、しかし金城さんはすでに準備が整って明日出発の予定ですのでなんとか今日中に準備できませんか」

浅田の思いを知る由もなく、何部長は金城凛の方を見て説得す

るように促す。

「そうですね、私たちの方はすぐに仕事にかかりたいので最初から浅田さんに入っていたいただけると助かります。浅田さんの飛行機とホテルもすでに手配してありますが、お願いできませんでしょうか」と中国語で凜が言った。これを聞いて何部長が、「どうですか？ 金城さんも準備が整っていると言われています。このプロジェクトの命運がかかっていることです。まだ半日ありますからなんとか準備してもらえませんか」と念を押すように言った。

ここまで言われて、浅田は美玲のことが頭の中に浮かぶも、断ることができなかった。

その後、呉課長からどのように変更したいか、入札用の設計なのでどこを注視して取り組むべきかなど話を聞いた。美玲は

「行ってもいいわ」と言っていたが不安を消すことができず、明日行くことに同意した後も優柔不断な自分を責めており、呉課長の話には集中できなかった。

そうした打合せの最後に黄部長が、浅田に向かって話しかけた。

「では浅田さん、期待していますよ。頑張ってください。プロジェクトを取るようにしましょう」と言ってから、

「少し頼みがあるのですが、ちよつとした荷物がありまして、金城さんだけでは大変なので手分けして沖縄まで持って行ってほしいのですが、」

「ああ、分かりました、かまいませんよ」

「ではうちの人間が空港まで運びますからお願いします。ちよつとした器械ですが精密品なので取り扱いには注意してください」

「了解しました」特に気にすることもなく引き受けた。

同じころ、美玲は三日ぶりに研究室に出て王教授に呼び止められた。

「ああ、王先生、三日間お休みをいただき、今日出てきました。

ゆっくりできましたのでまたがんばりますわ」

「それはよかった、コンピュータ解析は集中力だからね、期待しているよ。どこかに旅行でも行ってきたのかね？」と突然訊かれて、

「あつ、はい、台南の方に友達と行ってきました」とそのまま応えた。

「そう、台南には有名な新華博物館があるが行きましたか？僕も行ったことがあるが、一日では全部見えないくらいたくさ

んの美術品があった」と言われて、美玲はドキツとして胸が高鳴る。

「ああ、はい、私たちも行ってきました。たくさんあって全部は見えませんでした」

「そうだね、珍しいものがたくさんあったが、林さんは面白いものが見つかりましたか？」と訊かれて、またドキツとして、

「いえ、私らは古美術とかに疎くて眺めた程度です」と応えるのがやっとだった。

「何か思い出して興奮しているようだね、じゃあまた後で」

「はい、お願いします」と言って別れたが、何か見られていたような感覚になった。

浅田は家に帰ってから急いで出張の準備にとりかかった。準

備しながら美玲に電話をして、今夜食事しながら金印の話をすることにし、美玲の家から近い六張犁駅で待ち合わせることにした。六張犁駅は台北の地下鉄の駅であるが、この辺りは高架橋になっている。

二人は駅で会った後、駅のすぐ横にあった「神楽坂割烹」という日本料理屋に入った。日本酒と刺身をたのんだ後、

「今日は久しぶりに研究室に出てどうだった？」

「王先生にどこに旅行に行ってきたかと言われて、つい台南と応えたら新華博物館に行ったかと言われてドキドキだったわ」

「そう、何か見透かされているかもね」と冗談を言った後、

「ところで、呉先生から連絡があった？」と肝心なことを訊く。

「昨日、連絡はあったけどまだ返してないようよ」と言ってから、呉教授と話したことを長々と話し出した。話を要約すると、

―呉教授が連絡して浅田らのことを話すまで、許会長は金印が新華博物館から盗まれたことも、陳部長が交通事故で入院していることも知らなかった。

―そのことを許会長が確かめると、やはり博物館からなくなっていたことが分かり、また陳部長が入院していて重体であることも分かった。許会長によれば、骨董品や美術品の収集を陳部長が一手に行ってきたが、彼に裏切られた可能性についてはまだ信じられないとのことであった。

―許会長としては、警察沙汰にしたくないので黙って返してくれないかとのことだった。そこで明日か明後日に呉教授が時間を見つけて許会長を訪問して手渡すことにする。

浅田は、許会長が全面に出てきて話をしてくれていることに少し安堵感が出てきた。

「呉先生が信頼を寄せている許会長が動いてくれているようで少し安心かな」

「私もそう思うわ、あの陳部長の悪行もそのうち明らかになるわよ。ひどい目にあっただけど、これ以上追いかけることはないと思うわ」許会長に会ったことではないものの、呉教授の話から頼もしい人のように感じ、事件のこともこのままうまく行くように思われた。そう思うことで、二人は久しぶりの日本酒と日本料理をゆつくり味わうことができた。

ほろ酔いで気分よく日本料理店を出た後、一〇月の爽やかな夜の雰囲気を楽しみながら路地を歩いて美玲の家に向った。途中の嘉興公園まで来たところであつないでいた美玲の手を引き寄せてキスをした。しばらく夢中でキスをしてから抱き合ったまま、

「すぐに帰ってくるから、それまで何かあったらすぐに知らせよ」と先ほど言ったことを繰り返す。

「わかったわ、でも何もないわよ」

「着いたらすぐに連絡するよ」

「ありがとう、待っているわ」

などと同じことを繰り返しながら美玲の家に向い、そのまま浅田が美玲の肩を抱いたまま二人でアパートの階段を上っていった。ドアが開いて家に灯りが点いたがしばらくして暗くなり、朝まで灯りが点くことはなかった。

沖縄へ

浅田玄は桃園国際空港の中をエバー航空のチェックインカウ

ンターに向って急いでいた。EVA AIRの緑のサインが見える。近づいていくと金城凜がひとりで手を振っている。

「遅れてすみません、」と息を切らせながら謝る。

「大丈夫ですよ、でも急ぎましよう。これが昨日持って行っほしいと言っていた荷物です」と言って凜の横にある二つの薄茶色のトランクケースを指さした。運んできた万建建設の人はすでに引き上げたらしい。

「分かりました、けっこう大きなケースですね」

自分のスーツケースと合わせて3つの荷物を押しながら列に並ぶ。かなり重量のある荷物である。

「何が入っているんですかね？」

「私もよくわかりませんが特殊な測量器具だそうです」

無事チェックインを済ませて、二人はエバー航空186便に

搭乗した。那覇までの飛行時間は一時間二〇分である。

那覇空港の到着口はひとつだけであるが、国際線の便数も少ないためか出迎えに来ている人で混雑しているほどではない。金城凜がすぐに迎えに来た人を見つけて手を振った。それに応えるように二人の男が近づいてくる。

「ありがとう、こちらが浅田さんよ」と凜が浅田を二人に紹介する。

「初めまして、浅田です。よろしくお願いします」

「工務の新垣です」と言った人は浅田よりは年上で四〇代後半かなと思った。

「設計の上原健人です」

もうひとりには、自分と同じくらいか年下かなと思った。迎えに来

た二人が、頼まれたトランクケースを持って駐車場まで案内して行った。ワゴン車の後部座席に凜と浅田が乗り、上原が運転席に座った。走り出してから凜が、

「会社は沖縄市にありますのでここから二時間ほどかかります。着いたら簡単に夕食をしましょう」と言った後、

「新垣さんが今回の担当課長で、上原さんと私が設計関係を担当します」と二人を紹介した。

車は那覇の市街を抜け、識名トンネルと書かれたトンネルの中を進んでいく。

「この上には識名園（しきなえん）という庭園があるのよ。ここには琉球王国の迎賓館があったところで広大な庭園になっています」と説明してくれる。しばらく行くと那覇料金所を通って沖縄自動車道に入った。左側から西日を浴びながら、車はどんどん

と北に向って進んでいく。浅田は沖縄に来たのは初めてで、独特の赤茶色の屋根の家を見ると沖縄に来たなという実感が湧いてくると同時に、美玲のことが頭に浮かぶ。太陽が真紅の夕日に変わるころに「沖縄南・嘉手納 出口」とサインが出て、そこから沖縄市の市街に入って行った。料金所を出るところで、

「ここからは木々で見えないけどこの横に広大な嘉手納基地が広がっています」と凜が木で覆われた林の方向を指さした。

車はすぐにサンサン通りと書かれた片側二車線の大通りに入り、通りの両側には低層のショッピングセンターや会社のビルが立ち並んでいる。台北と違って高層ビルはなく空が開けて見える。しばらく行ってから右に曲がって路地に入ったところで車が停まった。右側に「Okinawa City Hotel」とあった。このホテルはキッチンが付いており、長期滞在者向けとのことである。

浅田がホテルにチェックインした後、四人は暗くなり、灯が点いたサンサン通りをまたいで嘉手納基地の方向に歩いて行く。この辺りはたくさんネオンサインを点けたレストランやバーが軒を連ねており、何組ものアメリカ人と思われる人たちが話しながら歩いているのとすれ違う。しばらく歩いて、「和琉ダイニング東や」という店に入った。入るとすぐにこちらを見て手を振る人がいる。金城社長である。テーブルにはもう一人おり、台北に来ていた長嶺専務であった。

「ご無沙汰しております」

浅田が挨拶すると、脇で凜が、父親が何でいるのかというような顔をする。

「大げさに社長と専務が来ることはないと思いますけど」

「まあ、そう言うな。今回はうちにとって大プロジェクトで、浅田さんに頑張ってもらわんといかんからな」

金城社長が凜に言い訳をするのを見て、社長は台湾から帰ってきた娘の顔を早々に見にきたのかもしれないと浅田は思った。社長と専務はすでに魚介類の刺身を肴に酒が進んでいるらしい。長嶺専務がいくつかの料理と泡盛を注文して食事会が始まった。台湾のプロジェクトについて万建設の状況などいろいろと話をし、皆が泡盛で顔がうつすらと赤くなったころ、

「ところで浅田さんは今までに沖縄に来たことがありますか？」と金城社長が訊いた。

「いえ、今回が初めてです。本土とは違う雰囲気圧倒されています」

「いたるところでアメリカ人が我が物顔で歩いているのを見て

どう思われますか？」

「初めて沖縄に来た人に、そんなこと言っても、すぐに答えられないわよ」

何と答えるべきか迷っていると、凜が助け舟を出してくれるが、社長はかまわず続ける。

「本土の人は沖縄の問題には無関心な人が多い。せつかく沖縄にきたのですから少しでも沖縄人の話を聞いていってけるといいのですがな」

「ああ、分かりました。僕も沖縄のことをそれなりには知っているつもりですが、仕事以外でも皆さんと交流させてください。よろしく願います」

「若い連中は知らんが、七二年に日本に復帰するまでここはひどいもんだった。当時、この町はコザと言ったが、何も産業がな

く米軍の基地頼みで生活が成り立っていた。わしの親父も基地の土木工事で子供らを養ってきた。しかし、琉球警察はあつてないようなものでアメリカ人が何をやっても罰せられることはなかった。ベトナムから帰ってきた兵隊は酒に酔って強姦はやるは、麻薬をやつて暴れまわったり、強盗に入る輩もいっぱいいたがMPに引き渡してもすぐに釈放された。そのころのコザの街は無法状態だった。基地の外で何をやっても基地の中に逃げ込んだら迷宮入りだ」と言つて杯の泡盛を一気に飲む。

金城建設は、もともとは基地の土木工事をやっていた会社なのだなと浅田は思った。

「そんな昔のこと言つても浅田さんは分からないわよ。もう少し浅田さんにも身近な話題にしたらどうですか」

他の人は頷いては杯を上げながら聞いていたが、凜が浅田のこ

とを思つて話題を変えるように言うも、社長はそれにもかまわずに続ける。

「わしが高校生のころには爆弾を積んだB-52が大爆発して爆風で何百件も家が吹っ飛んだ。真っ赤なキノコ雲が上がってわしらは原爆でも落ちたかと思つた。もし爆撃機が街に墜落していたら街が壊滅していたかもしれん」

「金城さんの家は大丈夫だったんですか？」

社長の話に興味が出てきて、浅田が口をはさむ。

「ああ、わしの家は基地からだいぶ離れていたのを助かったが琉球人には人権がないし、事故の補償も十分に受けられなかった。このころから沖縄の復帰運動が盛り上がって、六九年に佐藤栄作とニクソンの間で復帰合意がなつた」と言つて泡盛の杯を上げた。

「よかったですね、それでやっと念願の本土復帰につながったのですね。」

「浅田さん、そんな順調なものじゃあないのだよ。アメリカ人の無法状態はそれ以後もずっと続いたし、コザの町は微妙だった。本土復帰の合意には基地をそのまま残すということだったが、これに当時の沖縄政府は強く反対した。だが当時のコザの人たちは基地がなくなったら生活基盤を失うので、これに反対した。このころアメリカ人の無法行為に腹を立ててアメリカ人の車を焼き討ちにしたことがあったが、対抗策を取ってきおって、基地で働いていた人が何千人も首を切られた。わしの親父はストライキを先導して抗議したが無駄だった」と言ってさらに泡盛の杯を上げた。

「社長、だいぶ調子が上がってきましたが、この話はこのへんに

しておきましょう。浅田さんもお疲れのようだ」
そう言って、長嶺専務が持っていた杯を置いた。

「いえ、僕はたいへん興味のある話です」

「浅田さん、遠慮しなくていいわよ。社長、今日はこれでおしまいにしましょう。明日からうちの分担の仕事を始めるのよ」
凜も専務の話にもっともだという顔をして社長を見る。

「そうだな、浅田さんには明日から頑張ってもらわんといかんからな」

金城社長は、さらにお酒を飲みながら沖縄の話をしたいのを諦めて、皆で乾杯した。

浅田は、帰り路を歩きながら基地の土木工事をしていた会社がどうやって台湾の会社とJVを組んで仕事をするくらいに発展したのかなと思った。

金城建設で

次の日、浅田は教えてもらった金城建設の事務所まで歩いて行った。両側に低層のビルや様々な店が立ち並んでいるサンサン通りを北の方向に向かって二〇分ほど歩いて行くと、左側に金城建設と縦に書いた看板が出ており、白色の四階建てのビルがあった。ビルの横には広い敷地にトラックやクレーンなどの重機が並んでおり、その奥に大きな青い色の倉庫が建っている。いわゆる地方の大きめの建設会社だなと思った。玄関を入ったところに打ち合わせ用のテーブルが五、六台並んでおり、その奥にカウンターがあり事務室と仕切られていた。カウンター越しに「台湾から来た浅田です」と言つと二階の会議室に通された。中

には大きな事務机が四台ずつ両側の壁に向って並んでおり、中央に打ち合わせ用のテーブルが置かれている。すでに金城凜と他に三人の人がコンピュータのモニター画面を見ながら仕事をしている。浅田が入って行って、

「おはようございます」

浅田が入って行って挨拶すると、四人が一斉に振り返る。

「ああ、浅田さん、いらっしやい、待っていましたよ。浅田さんの席はこの窓際のテーブルです」
凜がにこりとして案内してくれる。

「この部屋が今回のプロジェクトルームです。みんなそれぞれの部署に自分のテーブルがあるけど、このプロジェクトの仕事は基本的にこの部屋でやるようにしています」

浅田が席に着くと、携帯電話から電話して他の人に集合をかけ

た。

「浅田さんが来られたわ、こちらに来てくださる」

しばらくしてもう二人が入ってきて、中央のテーブルに新垣工務課長、上原健人と金城凜のほか新たに三人が集まった。

「こちらが工事課の島袋徹さんと与那嶺良治さん、そして営業の前田源治さんです」

島袋は四〇代くらいで背の低い男で、先ほど入ってきた与那嶺は色の黒い背の高い若い男で、前田はがっしりした体格の男で自分と同年代くらいかと浅田は思った。前田は苗字からすると本土の人かと思われる。また何となくであるが、この男とどこかで会ったような気がした。

「よろしく、台湾から来た日本人の浅田です」

少し洒落たつもりで三人に向かって挨拶した。

「浅田さん、これがうちのプロジェクトメンバーです。設計は上原、金城とあなたでやっていただく。工事検討は島袋と与那嶺、工事費と全体の取りまとめは私と前田でやります。入札まであまり時間がありませんがプロジェクトが取れるように皆で協力しあってやりましょう」

新垣が浅田の方を見て会議の最初の挨拶をする。

「分かりました。頑張ってやらせていただきます」

「ではまず初めに、浅田さん、今回の構造概要を説明をお願いします。今回のプロジェクトは何と言っても浅田さんの発案だと聞いています。浅田さんからまず基本的なことをお聞きしたいと思います」

凜に手伝ってもらいテーブルの中央にあるコネクタにパソコンを接続すると、入り口の横に置かれた大型のモニターにパソ

コンのデスクトップが映し出された。

「みなさんもすでにご覧になられていると思いますが、これは僕が台湾で提案した屋根構造です。質問がありましたらその都度言ってください」と言って、テーブルに座ってモニター画面を見ながら説明を始めた。

「まず最初は、今回の全体図です。大空間を作るためにケーブルによる膜構造で屋根を構成します。ケーブルの片方は下段のアーチに固定されて、もう片方は建物の側壁に固定するようにします。膜構造には細かく仕切られた開閉式の窓を設置することで採光を取り入れるようにします。……」

浅田の説明は三時間ほどにおよび、その間にメンバーから材料のことや工事方法をどうするかなどの質問とディスプレイが行われた。正午近くになって、

「いやあ、最初から熱のこもった打ち合わせになりよかった、ありがとう、浅田さん。もう昼になったので続きは昼飯の後にしよう」と新垣が言っていて午前中の打ち合わせが終わった。

凜に案内されて四階建の事務所の裏にある食堂に入っていく。一〇〇人くらいは入れる大きな食堂で、バイキング形式で好きなものを取ってプラスチックの盆の上に載せていく。すでにたくさんの人がテーブルに着いており、二人分のスペースを見つけて浅田は凜と向き合って食事をした。事務所の設備のことや金城建設が現在やっているプロジェクトなどについて凜から話を聞きながら食事をした後、昼休みとあって凜と分かれて事務所横の広場にある重機置き場をゆっくりと見て回った。様々な能力のクレーン、掘削機械、トラック、トレーラーなどがすぐに入入りができるように一定の間隔で置かれている。これだけ

の重機を自社で持っているというのは、それなりのプロジェクトを継続的に受注できていることだなと思いつながら大型重機の間を歩いて行く。昼休みで人影はない。とその時、トラツククレーンの反対側から話声が聞こえた。

「それで『金印』はきちつとあつたのか？」

そう言う声が耳に届いた。浅田はびくっとして足を止めると同時に身をかがめた。

「ああ、確認して倉庫のいつものところにしまつてある」

「そうか、今日の夜だからな、」

浅田は音を立てないようにさらに身を低くして隠れるようにする。

クレーンの下から二人の足元だけが見える。

「何時だ？」

「九時に喜屋武公園だから八時半に車を回してくれ」

「分かった、………」という声とともに二人の足元が動いていく。

浅田は見つからないようにクレーンの下に潜り込んだ。しばらくクレーンの下に横になったまま、今の話を思い返して胸の高まりを抑えられなかった。

「確かに「金印」と言った。あの言葉に反応して反射的に身を隠したが、一体どういうことだ。金印の話が沖縄でしかも金城建設で出るとは思いもよらない。

「あの声は誰だか思い出せないが聞き覚えがある気がする。ということとは沖縄に来てから会った人たちだ。

「とすると、ひょっとして自分が台湾から運んできたトランクケースに金印が入っていたということか。

—いずれにしてもこの会社の人を信用しないほうがいい。

浅田は一〇分ほどクレーンの下にいて、ゆっくりと這い出す。あたりを見回しながら、人に会わないように広場を遠回りしてプロジェクトルームに戻った。

午後の打ち合わせが始まり、午前につけて浅田が設計のポイントについて話をして他の人がそれに対してどう対応するかという議論で進行していくが、この中に先ほどの声の主がいるかと思うと、どうにも身が入らない。一時間ほど議論をしたところで、

「では、これでどう進めていくかほぼ決まったので、各自の分担についてそれぞれ始めてくれ。浅田さんには変更設計の構造解析からかかってもらおうと同時に、ここのメンバーの相談に乗っ

てください」と新垣が言って打ち合わせが終わった。打ち合わせが終わると、新垣、島袋、前田、与那嶺は部屋を出ていった。

浅田は席に戻ると、隣の席の凜に向って尋ねた。

「皆さん、このプロジェクトの他にも仕事があるようですね」

「すみません、何か全部浅田さんを頼りにしているみたいで。でもみんな優秀な人たちですので期限までに問題なくできると思っていますわ」

「分かりますよ、今日の議論を聞いていたらみなさんよく分かっておられると感心しました」

「ところで、僕らが台湾から持ってきたトランクケースの中はご覧になりましたか？　最新の測量機器ならどんなものかと思えます」

「いえ、あれはあのまま迎えに来た新垣さんに渡しました。訊い

てみましようか？」

「ああ、いえ、時間があるときに自分で訊いてみます」

そう応えたが、心臓の鼓動が高鳴るのを抑えることができなかった。あの時の二人の内のひとりは新垣信二だったのでないか。

その後、解析モデルを作る準備に没頭していたが、どうにも昼休みの会話が気になる。二時間くらいが過ぎたころ、隣の凜と上原はずっとCAD図の製作に没頭している。二人に、「すこし、休憩してきます」と言って部屋を出た。

そのまま午後の太陽に照らされながら重機置場を倉庫に向って歩いて行く。倉庫の扉は大きく開かれており、中には数人の人がいてフォークリフトで棚に並べられた物を取り出したりしていた。浅田はかまわず中に入っていく、人目につかないように棚に

並んだ機器や材料を急ぎ足で見て行く。長さが六、七〇メートルはあり、何列もの棚が並んでいるため目的の物を探すのは容易ではない。おそらく人目に着かない奥の方にあるのではないかと見当をつけて倉庫の奥に向って進んでいくが、棚には見当たらない。すでに一〇分以上経っている。とその時、奥の隅にコンテナハウスが置かれているのが目に留まる。急いで歩み寄り、コンテナハウスのドアを開けて中に入る。部品の倉庫になっているが、誰もいないのに照明が点いているのを見ると、今まで誰かがいたのではないかと思われる。しかも中ほどを見ると、あのトランクケースのうちのひとつが机の上で開かれており、中には一〇センチほどの木箱がいくつも無造作に積まれているではないか。さっそく汗が滲んだ手で木箱を開ける。あの見覚えのある金色の輝きが目飛び込んできた。すると、その時、「カツ、

カツ、カツ、・・・」と足音が近づいて来るのが聞こえた。隠れるところがない。素早く中を見回すと、ドアの反対側にある窓が目に飛び込んでくる。ゆっくりとドアが開いた。一瞬の差で見つからずにコンテナーハウスの裏に飛び出した。浅田はそのまま急いでプロジェクトルームに戻った。凜も上原も変わらずCADの画面を睨んでいた。仕事に戻るが胸の鼓動はおさまらない。

その夜、浅田は八時過ぎにタクシーを拾って喜屋武公園に向かった。昼の「会話」に出てきた「喜屋武公園」というのをGoogle Mapで調べると、浅田のホテルから東へ六、七キロ行ったところにある公園で、琉球王国の喜屋武城のあったところだと分かった。タクシーは市街地を抜けて、街灯以外に所々に町灯りが見える道路をゆっくり走り行って行く。二十分ほどして丘の道を上がつ

て行き、駐車場らしき広場で停まった。

「お客さん、これ以上は、その階段で歩いていくことになりま
す」と運転手が言う。

そこは木立に覆われた森になっており、駐車場だけがいくつか
の街灯で明るく照らされていた。駐車場には七、八台ほどの車が
停まっていた。連中がここに来るとしたら、この駐車場に停める
はずだと考えて、石積の一〇段くらいある階段の上で隠れて待
つことにした。待ちながらコンテナーハウスのことを思い返し
てみた。

―それにしても金印の木箱は二〇個くらいはあったように思え
る。もう一つのトランクケースにも同じくらい入っていたとす
れば、全部で四〇個くらいになる。

―いずれにしても本物の金印であるはずがない。とすればこれ

はどういうことだ。金の密輸か？ だとしたら、一個一キログラムとしても四〇個で四〇キログラムにもなり、少なくとも三億円以上になるな。

などと計算していると黒色の車がやってきて、少し離れたところで駐車した。そのまま誰も降りてこない。そして五分くらいが過ぎたころ、バンタイプの四輪駆動車が入ってきて、「プツ、プツ」と小さくクラクションを鳴らした。それに呼応するように黒色の車から二人が降りてきて、その内の一人が手を上げた。バンからも背の高い二人の男が降りてきて、それぞれトランクケースを持った四人が階段に向かって歩いて来る。浅田は仕方なく階段をさらに上に登る。すると階段を登ったところは広い広場になっており、小さな屋根の下にベンチと四角いテーブルのある休憩所がいくつも配置されていた。薄暗い広場では小さな屋

根の下に入れば、人がいるかどうかも判別できない。浅田は広場の隅のほうのひとつのベンチに座って身をかがめた。しかし、四人は浅田の方に歩いてくるのではないか。まずい！と思い、四人に背を向けるように座りなおして様子を窺う。四人は浅田から四〇メートルくらいのところの小屋根の下に入り、向かい合って話を始めた。浅田は横眼で目を凝らして推移を見つめる。すると、微かな光ではあるが片方の二人が、トランクケースをテーブルにおいて開けるように見えた。

浅田は、もう少し近くで見ようと、隠れていた小屋根を出て連中のいる休憩所に遠回りしながら、そおっと近づこうとした。連中のいるところまで十五メートルくらいのところにある小屋根に入ろうとした、そのとき、転がっていた空き缶を蹴ってしまった。「カラン」と音がした途端、四人がこちらを振り向くと同

時に連中の持っているライトが浅田の顔を照らした。浅田は方向感覚が分からないまま広場の隅に向って無我夢中で走った。四人の足音が追いかけてくるのが聞こえる。広場を出て小道に入る。照明がなく、月明りが小道を照らしている。周りは木々で覆われ、公園の外は見えない。とその時、小道は急に行き止まりになり、城跡の石垣の端の上に立っているのが分かった。暗くはつきりわからないが相当な高さだと想像がつく。どうするかと思っっている間もなく、四つのライトが一斉に浅田の全身を照らしながら寄ってくる。

「浅田さん、なんであんたがここにいる」と言った声の後に、
「Wat, s a hell. Who is this guy? (何だ、 ーじ(は?)」
英語が飛んできた。

「Mike, That, s a guy came for our company business (マイ

ク、こいつは、うちの会社の用で来た奴だ」

「Why your guy is over here? What, s he doing here? (お前のところの奴が何でこっにいるんだ？ 何をしているのだ?)」

「Wait a moment. Let me check it (確かめるから、ちょっと待ってくれ)」

その声の後に、ライトが消えて四人の姿が現れた。

「長嶺専務！ 前田さん！」 浅田が叫んだ。

あとの二人は明らかにアメリカ人である。石垣を背にして四人に囲まれて逃げ場がない。長嶺が浅田を睨みつけて近づいてくる。

「なんであんたがここにいるのかと訊いている」

「お前らが金印を持っていることは分かっている」

「何！ どうしてそれを知っている」

「こいつに見られるはずがないがな、くそっ、」

長嶺と一緒に浅田の前に寄ってきた前田が浅田を睨みつける。

「おまえら、金の密輸をしているんだろ」

「えっ」と驚いてから、長嶺と前田が顔を見合わせる。

「どうなっているんだ？ お前ら、一体、何に驚いているんだ？」

二人のアメリカ人が、長嶺らが何に驚いているのか問い詰める。

「こいつが、俺たちのことに何か気づいたようだ」

長嶺が英語で、そう応えるとアメリカ人が明らかに動揺しているのが見て取れる。

「なにっ、お前たち、絶対に部外者に知られてはいかんとやってきただろう。こいつを殺してしまおうか？」

マイクと呼ばれたアメリカ人がそう言いながら拳銃を出した。

浅田はびっくりして恐怖に体が縮む。未だかつて拳銃を向けら

れたことなどあろうはずがない。

「マイク、もう一度確かめるから、ちょっと待て」

「浅田さん、どうしてあんたが気付いたか知らんが、このことを誰かに話したか？」

「僕は昨日、沖縄に来たばかりで誰に話すと言うんだ」

そう言った途端、前田がぐっと近づいてきた。と思った瞬間、浅田の腹に蹴りが入った。「ぐっ」と呻いて前のめりになり膝をつく。

「もう一度訊くぞ、誰かにこのことを話したか？」

今度は、前田がドスの利いた声で訊いてくる。

「話すわけがないだろ、昨日台湾から来たばかりだ」

「そうかもしらんな、だが警察に駆け込むようなことはするな。

そんなことをしたらお前の可愛い林美玲がどうなっても知らん

ぞ」

と云うではないか。

「何だ！ どういうことだ、なんでお前が美玲のことを知っているのだ」と立ち上がりながら叫んだ。

「どういうことでもない。お前が何かしたら、お前の女が死ぬことになると言っているのだ。それにお前はすでに密輸の片棒を担いで、台湾からブツを運んで来た。いわば俺たちの仲間だ」

「美玲に手を出してみろ、お前らを殺す」

そう言った途端、また前田の蹴りが脇腹に刺さった。「うっ」と唸ってよろけながら脇腹を押さえる。

「威勢のいいことを言わず、黙ってエンジニアの仕事をしろ。そうしたら何もせんわい」

「くそっ、」と言って睨むが、後の言葉が続かない。

「このことは誰にも話すな。また逃げ出そうなんて考えるな、台湾には俺たちの仲間が何人もいる。お前の女は常に見張られていることを忘れるな。分かったな！」

拳を握りながら前田を睨みつける。

「分かったかと訊いているだろ！」

再度、前田が言った途端、前田のパンチが鳩尾にめり込み激痛とともに息もできず、前のめりに倒れた。

「分かったらおとなしく帰してやってもいい。だが、警察に駆け込んだらお前自身がやばいのだぞ。分かったか！」

長嶺が前田を手で押さえながら大声で恫喝する。浅田は、長嶺を見据えつつ、よろけながら立ち上がる。

「わかったから、絶対に美玲に手を出すな」

「Just a sec. Will you release this goddamn guy?」

不審そうに聞いていたマイクがなんで解放するんだと言っつ。

「こいつの台湾の女を俺たちの仲間が人質に取っているから何にもできない。ここで殺すことはない」

長嶺がマイクに応える。

「お前、人のいいやつだな、人質が逃げ出したらどうするつもりだ？」

「こいつとこいつの女を台湾でもずっと仲間が見張るようにする。それに、こいつはすでに俺たちの仕事をして台湾からこのブツを運んできた。こいつが警察に行ったら、こいつ自身がやばいはずだ」

というようなことを長嶺が何度かマイクに言った。これに納得したのか分からないが、

「Weii, 」と呟いてから、浅田に向って、

「Hey, you, don't try to escape. If you try, I'll surely kill you. Got it! (逃げようとするな、逃げようとしたら絶対に殺すぞ、分かったか!)」

マイクが拳銃を向けながら大声で脅してくる。

「Understood (分かった)」と小さく震えながら応えた。

アメリカ人もここで人殺しをしたくなかったのか、結局、そのまま解放されて暗い夜道を、腹を押さえながら歩いて喜屋武公園の下まで来た。ああ、よく殺されずに済んだと若干でも心の中が緩むと同時に、なんと無謀なことをしてしまったかと後悔の念が全身に回る。また密輸グループの仲間だと脅され、この先どうしたらいいのかとの不安も広がる。道路に出るも、通行している車は少なく、街に向かって街灯の少ない道路を歩きながら、美玲

に「line」から電話した。すぐに出て、

「你好、玄、今日はどうだった？」と明るい声が返ってきた。

「美玲、よかった！ 元気でいるんだね」

「どうしたのよ、元気そのものよ。何かあった？」

そう言われて、頼まれて台湾から持ってきたトランクケースには浅田たちが拾った金印と同じような金印がいくつも入っていたこと、その金印を今夜、取引するらしいと聞いて喜屋武公園まで来たなら、連中に捕まってしまったこと、そしてその連中というのが金城建設の専務と今回のプロジェクトの担当者のひとりだったこと、その取引相手がアメリカ人だったことを話した。

「まあ、一体全体どういうことよ。それで玄は今大丈夫なの？」

「ああ、蹴られたり殴られたりしたけど大丈夫、解放されて街に向って歩いている。解放されたのは、もし僕が警察に駆け込んだ

り、誰かに話したら美玲を殺すと言われて連中の言うことを承諾したからだよ」

「ええっ、どうして私のことを知っているのよ。まったくどういうことよ」

「台湾から僕にトランクケースを持っていくように頼んだのは万建設の黄天佑部長だよ、美玲も彼を知っているだろ？この話は僕たちの身近な人たちが犯罪にかかわっているのは間違いない」

「ということとは、万建設と金城建設がグルで悪いことをしていると言うの？万建設は普通の建設会社よ、そんなことをやるとは考えられないわよ」

「僕も会社ぐるみでやっているとは思っていない。ほんの一部の人がかかわっているのだと思う。いずれにしても美玲が心配

だからこれ以上は僕も何もしないようにするから、美玲も僕が戻るまで普段通りにして、このことは誰にも話さないようにしてほしい」

「分かったわ、玄も気を付けて、本当に心配だわ」

「美玲も誰かに見張られているから、絶対にこの話にはかかわらないようにして」と念を押した。

浅田はすぐにも台湾に逃げて戻りたいと思うものの美玲の身に何かが起こることは絶対に避けなければならず、次の日も金城建設に出向いた。前田は部屋にいなかったが、入って行くと凜が中央のテーブルに座っていた二人を紹介した。テーブルに座っていた二人が立ち上がると、

「こちらは、中国の厦門貿易会社の王強部長と唐林杏さんよ、今

回の入札では中国製のケーブルを使う予定なので打ち合わせに来ていただいたのよ」

「你好、浅田です」北京語で言っただけで名刺を二人に差し出した。

「你好、王強（ワン・チン）です」

「你好、唐林杏（タン・リンシン）です」

それぞれが笑顔で名刺をくれた。

王強は頭を短く刈った恰幅のいい男で五十代かと思った。唐林杏は浅田と同年代の女性で頭の高さそうな美人だった。

「浅田さんがよければ今から打ち合わせしますがいかがかしら」そう言う前から前田を呼び出すのが聞こえ、浅田はどうしたらいいか分からない。しばらくすると、前田がいかつい体で現れた。浅田はドキッとしたが、前田は一瞬、浅田を睨みつけたが何も言わずに席に着いた。浅田はこの凶暴な犯罪者と同じテーブル

ルに思うだけで胸の鼓動が高まり、凜の話に身が入らない。しかし、そんなことに誰も気がつくはずはなく、「では浅田さんから今回のケーブルについて中国語で説明していただけるかしら」と凜が日本語で言っ、打ち合わせが始まった。

身が入らないまま、打ち合わせは、浅田が大型モニターを使って説明し、それに対して参加者が質問するかたちで進んだ。前田は、中国語がある程度分かるようで、何食わぬ顔で中国語で質問したり、答えたりしていた。打ち合わせは一時間ほどで終わり、前田が中国人の二人を連れて出て行った。出ていくときに三人は何かを笑いながら話していたのを見て、あの三人は以前からの知り合いなのだろうと思った。もう浅田の頭の中では誰がまともな人たちで、誰が悪事を働いている連中なのか見当もつか

ず混乱の極みであった。

その日の夕方、凜を夕食に誘った。いくらなんでも凜が悪党の仲間だとは思えなかったからである。凜は快諾して、二人で事務所を出てサンサン通りを横切り、基地方向の飲み屋街に歩いていった。

二人が事務所を出ていくのを前田と二人の中国人が怪訝そうに事務所の二階から見ていたのは知る由もない。

浅田と凜は大通りを横切ってからしばらく歩いて「Areko」という小さいイタリアンレストランに入った。料理を頼んでレッドワインで乾杯した後、凜が今回のプロジェクトに対する熱い思いを語り始めた。

「こういう特殊なプロジェクトは技術的にハードルが高くて沖

縄の建設会社ではなかなか受注できないのですが、今回浅田さんが加わっていただいて私もそのひとりとして参加できました。本当に感謝しています」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます。ところで、一昨夜、金城社長が金城建設は戦後、米軍基地の仕事をする事で成長してきたというようなことを言われました。先代の社長はたいへん苦勞されたのでしょうね?」

昨夜の話を話題に出すと、凜もワインを一口飲んでから話に乗ってきた。

「ええ、そうらしいわ、おじいさまに訊いた話では基地の仕事はたくさんあったけど、お金が安くて社員に給料を払うので精いっぱいだったとか」

「そうですね、そのころは米軍の統治下で沖縄の人はアメリカ

人に従うしかなかったのでしょうね。僕には想像もできませんが。でも今の金城建設のように大きくできたのは先代の社長の力が大きかったのでしょうね」

「おじいさまにはお金持ちのお姉さまがいて随分助けていただいたそうよ。金城春子と言っているいろいろな事業をやっていた方らしいわ」とグラスを持ちながら言った。それを聞いて浅田は「ぬっ」と頭を上げて記憶をたどった。その名前を台湾で聞いたことがあったのだ。たしか戦後、沖縄と台湾、さらに東南アジアを舞台に密貿易で多大な富を築き、様々な企業を立ち上げた密貿易の女王と言われた女性ではなかったか。

「金城春子という名前は台湾で聞いたことがあります。ただ密貿易で莫大な財産を築いた沖縄の女王ということでしたが、」

「ああ、おばあさまのことを聞かれましたか、その頃の沖縄

には物資が何もなく、おばあさまのおかげで米軍も助かっていて、何も言わなかったそうよ。その頃はおばあさまにとって東シナ海も南シナ海も国境があるようではなかったようなものだったらしいわ」とすんなりと言った。

「それで金城建設は今のよう成長できたのですね。ところで金城建設は今も貿易の仕事をしているのですか？」

「いやだわ、密貿易でもしているかのような話だわ。台湾や中国と取引はあるけど密貿易などしていませんわ」

「そうですよね、失礼しました」

料理と沖縄の話を楽しんだ後、レストランを出て凜はタクシーを拾って帰って行った。浅田はネオン街をゆっくりとホテルに向かって歩いて行く。

—金城建設が今のようになくなったのは、密貿易をしていた金城春子からの大きなバックアップがあったのだ。そしてそのころから米軍とも単なる仕事上の付き合いだけではなかったのではないか。

—凜は、今は密貿易などしていないと言ったが、現に長嶺と前田は密輸のようなことをしており、凜が知らないだけであろう。

—会社ぐるみではないにしろ依然として誰が悪事に加担しているか分からず、どういう顔をして事務所にてたらいいか、などと考えながら歩いてサンサン通りを渡り、ホテルの路地へ入って行く。通りのこちら側は住宅やオフィスがあり、人通りがほとんどない。ホテルの角を曲がった、とその時、三人の暗い人影が浅田の行く手を遮った。

前田とあの二人の中国人だった。やはりこの中国人も仲間だ

ったのだと思う。

「浅田、お嬢さんと会って何を話したんだ。お前、自分がどんな状況にあるか分かっていないようだな。昨日あれだけ誰にもしやべるなと言っただらう」

前田が前に進み出てきて睨みつける。浅田はやはり見られていたのかと思うと同時にまた殴られるかと青ざめながらも、

「仕事の話をしただけですよ」とドキドキしながら応える。

「ちよつとそこまで顔を貸してくれ」

前田が浅田の背中を押して、そばに停めてあった車へいざなつた。車は浅田を後部座席に座らせるとすぐさま出発する。前田が運転して、浅田の横には王強と名乗った中国人が太った腹を突き出し、黙って前を向いて座っている。車は一〇分ほど走って、ビルの工事現場に入って行った。入り口の照明以外に照明は消

えており、薄暗い中に建設機材が置かれている。

「ここは、うちがやっている現場だ。呼んでも誰も来ないぜ」
車を出るとすぐに前田が脅しをかけてくる。

「もう一回言うぜ、お前、自分の置かれた状況が分かっているのか。お前の女は四六時中見張られているし、お前はすでに俺たちの仕事に加担しているのだぞ」

前田の大きな声の脅しに、震えるような小さな声で応える。

「分かっていますよ、これからは気を付けるようにします」

「本当だな、本当に分かっているなら、王さんたちと上海に行ってもらう」

「えっ、今なんと言った？」

「明日、上海に行ってもらおうと言ったのだ。いやとは言わせないぜ」

「また何かを運ばせようと言うのか？ そんなことは無理に決まっているだろう」

「分かったと言ったばかりじゃあねえか」

そう言った途端、浅田の左顎にパンチが飛んできて、体が後ろにすっ飛んだ。痛みをこらえて顎を押さえながらゆっくり立ち上がる。

「まあ、前田さん、あまり手荒なことはやめましょう。浅田さん、今度はちよつとした書類を持って行ってもらいたいだけなんです。やつてもらえますよね」

王強が前田の前に出てきて、この場をとりなすようなことを言う。

「そんな書類ならあなたたちが持っていったらいいじゃないか」
「いえ、日本人の浅田さんに届けてほしいのです。簡単なことで

す」

「僕にはプロジェクトの仕事で忙しい。そんな暇はありません」

「いえ、大丈夫です。他の人が立派にカバーしてくれるそうです。そうですよね、前田さん」

前田は、薄ら笑いを浮かべて、

「ああ、大丈夫だ」

「そんなこと言われてもできないものはできません」

「それでは、仕方ありません。あなたの台北の彼女にはつらい目に会うか、最悪の場合、死んでもらうしかありません」と低い声で脅す。

「待て、くそ、なんて奴らだ。分かったから美玲には絶対に手を出すな」

「頭のいい人だ、では決まりですね」

微笑みながら王強が浅田の肩を軽くたたいた。男たちの後ろで腕組みしながら見ていた唐林杏が、浅田の顔に向かってほほ笑んだ。

「じゃあ、明日の朝お迎えに行きますわ」

上海で

深い闇にさらに巻き込まれていく予感があるが、美玲さえ無事できてくればと思い、明日、中国人と一緒に上海に行くことを美玲に電話で伝えた。当然であるが、美玲は、どうしても中国に行く必要があるのかと聞いてくる。しかし、脅されて仕方なく行くことになったとは言えない。今回の仕事で、どうしても行く必要

がある」と説明して、

「大丈夫、心配しなくても、すぐに帰るから、」と心配する美玲を説得するのが精いっぱいであった。感の鋭い美玲の心配が分かるので、心が締め付けられるようであった。

次の日の朝、前田と二人の中国人がホテルに現れ、そのまま前田の運転で那覇空港に直行した。車の中で、王強から三〇センチ角くらいのコンパクトケースを渡された。厚さは三センチほどである。

「これを持って行ってください。カギがかかっていますので中は開けないようにしてください」

強い視線を向け、有無を言わさないぞと脅しているのが分かる。

中国東方航空には那覇―上海の直行便があり、飛行時間は約

二時間半である。本土と比べると、いかに沖縄と中国の距離が近いかわかる。昨夜の凜の話ではないが、国境がない時代では、沖縄、中国、台湾は、もつと密接で、よりコンパクトな経済圏だったのだろうと思う。浅田は用意されたボーディングパスでパスポートコントロールを通過する。

エアバス330の一番後ろの三列席に二人に挟まれるように座らされて身動きもままならないまま上海浦東空港に着いた。中国と日本には一時間の時差があるため午後一時半に出発したが三時過ぎには到着した。浅田は台湾で中国語を覚えたが、中国に来るのは初めてであった。

渡されたコンパクトケースを持ったままパスポートコントロールを通過して手荷物カウンターに出ると、すでに王強と唐林杏が待っており、

「一緒に行くわよ」と唐林杏が言い、そのまま「无声明（no declaration）」と書かれた通関ラインに従ってスーツケースを引きながら通った。日本の通関のように一人一人に検査官が行うような手荷物検査はなかった。到着ロビーに出ると、若い男が唐林杏に向かって手を振っている。出迎えである。

出迎えに来た男が運転する黒塗りの車は空港を出て、片側四車線の広い高速道路を、スピードを上げて走って行く。右側には緑に囲まれた富裕層の住宅と思われる低層の大きな住宅がずっと続いている。さらに進むと、高層ビルが点在する上海市街へと入って行く。ああ、この先どうなってしまうのかと思っていたのを見透かしたように、

「浅田さんは、中国は初めてですか？何も心配することはないですよ」

王強が口元だけに微笑み浮かべながら言う。心の中を見透かしたように言う王強をますますどんなやつなのかと恐ろしくなってくる。

車は塔の上に南浦大橋と書かれた吊橋を通り、黄浦江を渡って上海の中心街へと入って行く。橋を渡るときに右側に赤色の丸い展望台の付いた有名な電視塔や先端部分に四角い穴の開いたビルなどが立ち並ぶ超高層ビル群が見えた。車は人民広場と書かれたインターチェンジで高速道路を下り、しばらく走って高層の大きなホテルのエントランスで止まった。

「さあ着きましたよ、上海の老舗のホテルです」

王強が言って運転手以外の三人が降りる。新錦江大酒店とエントランスの上に書かれていた。中に入るときらびやかな大空間が広がっており、多くの人が行きかい、何台も置かれたソファ―

で楽しそうに会話をする人もいた。何人もの西欧人の姿も見え
る。唐林杏が三人分のチェクインをしている間、王強と二人で
ソファ―に座って待っている。

「疲れましたか？ 夕食は八時からですからそれまでゆっくり
休んでください」

「僕に何をしろと言うのだ」

「夕食の時に、私たちのお客さんと会いますので、私から浅田さ
んを紹介しますので、持ってきたものを差し上げてください。そ
れだけのことです」

「何を企んでいるのだ。そんなことだけのために僕を上海まで
連れてきたとは到底考えられない」

「心配しなくても大丈夫ですよ、それだけのことです」

部屋は三八階にあり、カーテンを開けると遠くに先ほど橋を通るときに見えた電視塔や超高層ビル群が見える。連中が何を企んでいるのか想像もできないが、とりあえず美玲に連絡することにする。ところが「Line」には接続できない。ただこれは台湾ではよく知られていることで、台湾でも「Line」と同じ機能を持つ中国のWeChatというのを入れている人がたくさんいるが分かっていた。政治的には対立しているように見えるがビジネスなどでは台湾と中国は非常に深い交流があることを示すひとつの証しでもある。浅田も美玲もWeChatを入れており、WeChatから音声通話のボタンを押す。「ルルルルル……」と着信音が聞こえ繋がっていることは分かるが出ない。とりあえず、「今、上海の新錦江大酒店というホテルに着いた。美玲は大丈夫？」とメッセージを送信した。すぐに返信があるだろうと思い、外灘

(ワイタン)の向かい側に広がる高層ビル群の遠景を見ながら待つが、ビル群が夕日に染まり、そしてそれが夜景に変わっても返信がない。不安になって再び音声通話のボタンを押すが出ない。不安が増幅して、どこか身動きできないところに連れられて行ったのではないかなどと悪い想像で頭がいつぱいになる。

待ち合わせの七時半まで待っても美玲からの返事はなく、不安を抱えたままロビーに下りる。すでに王強と唐林杏が待っていて手をあげる。

「荷物は持ってきましたか？」

そう言われたが、黙ったまま手提げ鞆を上げて見せる。

「では行きましょう、場所は隣のホテルなので歩いて行きます」
王強が先行して、唐林杏と並んでエントランスに向かって進んで

行き、後は連れられるように黙って二人の後について行く。ホテルの前の大通りを三ブロックほど歩き、横道に入り、しばらく行くと木立に囲まれた公園のような庭の付いたホテルがあった。広い庭を横切って、ローマ建築のような円柱で囲まれたエントランスに着く。かなりの歴史を感じさせる雰囲気のあるロビーに入ると、ホテルの制服を着た男の案内ですぐに地下に下りていく。赤い絨毯が敷かれた廊下にはチャイナドレスを着た女性たちが、てきぱきと料理を運んだりしている。両側にいくつも部屋があり、すべてが個室のレストランドと分かる。そのうちのひとつの部屋に案内されて中に入って行く。広い部屋の中央に七、八人が座れそうな大きな円卓が置いてあり、部屋の壁際には椅子が並べられている。

「まだ来られていないようだ、少し待ちましょう」

王強に勧められて、否応なく壁際の椅子に座る。

「浅田さん、持ってきたものを浅田さんからお客さんに差し上げてください。これがケースのカギです」と言って小さいキーをくれた。

「一体これは何なのだ」

「たいしたものではありません、ただのお土産です」

「そんなこと信じられん」

そう言いつつも、コンパクトケースに鍵を差し込む。

「ちよつと待って、」

王強が手を差し伸べて止めようとしたがかまわず鍵を回した。

すると中にはポータブルハードディスクドライブ（HDD）が、ケースの中の窪みにはまるように入っていた。十センチほどの大容量記憶装置である。

「何だ、これは！」

驚きの声を上げたその時、ドアが開き、ひとりの男が案内されて入ってきた。

「やあ、沈（シン）さん、」

王強と唐林杏が笑顔を作って立ち上がる。浅田はしかたなくケースを閉じた。

「你好、王さん、お待たせしましたね」

「你好、你好、沈さん、いえ、今来たばかりです」

「你好、唐さん」

「你好、沈さん、お久しぶりです」

互いに握手しながら挨拶を交わし、ひととき挨拶をしてから王強が、浅田を紹介する。

「こちらは、お話ししました浅田さんです」

「やあ、浅田さん、よく来てくれました。沈世国です」

沈（シン）と言われた男が手を差し出して来る。小太りの五十代くらいの男である。浅田は拒否するわけにもいかず、

「你好、」とだけ言っただけで握手した。

「ささあ、どうぞ、皆さん、」

沈がいざなうのに従って、全員が円卓を囲んで座り、白酒（パイチュウ）の五糧液を注文して会話が始まった。最初に、沈が浅田を見ながら礼を言う。

「浅田さん、今回はよく協力していただきました。感謝します」

「僕は何も協力などしていません」

これを見て、王強が持ってきたEDDのケースを渡すように勧める。

「ああ、まず浅田さんからお土産をお渡ししてください」

しかたなく立ち上がった沈のところ、ケースを持って行く。沈はケースを開いて慎重に確認していく。その間に前菜が運ばれ、沈が注文した白酒がそれぞれの前に置かれた小さいグラスに注がれていく。沈がケースを閉じてテーブルの脇に置いた後、満足そうな笑顔になって浅田に向かってグラスを上げた。

「では、浅田さんが協力してくれたことに感謝して、乾杯！」

「乾杯！」

王強と唐林杏も一気に杯を空けた。

とその時である。「ガタン」と大きな音がしてドアが大きく開き、六、七人の男が一齐に部屋になだれ込んできた。

「公安だ！おとなしくしろ！」

ひとりが大声で言っ、てテーブルの四人を取り囲む。全員が拳銃を手にしている。浅田は頭の中が真っ白になり、何も考えられない

い。

「何だ、何事だ！ わしは国家安全部の沈世国だ。公安が何をしているのだ」沈が大声を出す。

「スパイ容疑でお前らを逮捕する！」

公安の男は、沈の恫喝には反応せず、きつぱりと言い放った。

「何！ わしは国家安全部の沈世国と言っただろう。何でわしが公安に逮捕されねばならないのだ！」再び大声を出す。

「かまわん、おとなしくしろ！」

男が合図したと同時に全員がテーブルに頭を押さえつけられて、後ろ手に手錠をかけられた。浅田は恐怖で言葉も出ない。公安とこののは中国の警察である。

浅田は何も抗弁する暇もなく、二人がかりでパトカーに押し

込まれた。他の三人もそれぞれ一人ずつ乗せられた模様であった。心臓が飛び出しそうなほどの鼓動で口もきけない。浅田を乗せたパトカーは、全員が押し黙ったまま長い時間走って古びたビルに横づけした。ここが警察署なのかどうかも分からない。玄関を入ってから薄暗い廊下を連れられて鉄格子の付いた留置場に入れられた。他の三人を乗せたパトカーとは一緒ではなく、彼らがどこへ連れていかれたのかは分からない。留置場は薄暗い廊下に沿って三畳ほどの広さの檻が三つか四つ並んでおり、鉄格子の下側には目隠し用の板が張られている。檻の中は木の床になっており、穴が開いただけの便器がむき出しで隅に置かれているのみで窓もない。浅田は与えられた薄い布団にくるまって震えていた。

—美玲を人質にとられ、仕方なく王強と唐林杏に連れられて、朝

早く沖縄を出発して上海に来た途端にスパイ容疑で逮捕された。先ほど会った沈という男はたしか国家安全全部の人間だと言った。国家安全全部と言えば、おそらく諜報機関のようなところではないか。中国ではスパイと分かればすぐに死刑になると聞いたことがある。あああ、何も分からないまま死刑になるのか……

—あのEDDの中には何が入っていたのか。分かるはずがない……

—しかし、スパイ容疑と言ったが、あの三人とも中国を裏切るようなスパイだったのか……

—あああ、何も分からない……

すると、「カツカツカツ」と何人かの足音が近づいてきた。布団にくるまっている浅田に、上の方から「出る！」と言って、檻のドアを開けた。檻を出たところで手錠と腰ひもをかけられ、腰ひもを引かれながら薄暗い廊下を引っ張られるように連れられて

いく。

廊下をひとつ曲がったところで、窓のない部屋に入れられた。取調室なのであろうと思う。中央部にテーブルが置かれ椅子が四脚置かれており、ドアの横には二つのソファアが並んで置かれていた。ソファアに座っていた男二人が立ち上がり、テーブルの椅子に座るように促した。浅田を連れてきた二人は手錠を外すと出て行き、ソファアにいた二人が浅田と向かい合って座り、取り調べが始まった。二人の男は、制服ではなく青い縞のシャツと薄茶色のシャツを着ている。縞シャツの男が、浅田の顔を覗き込むようにして薄笑いを浮かべる。

「まあ、そう怯えるな。長くなると思うからゆっくりしてくれ」

「まず名前を言って貰おう」

「日本人の浅田玄」震える声で応える。

「そうだ、お前のパスポートの通りだな。ところで日本人のお前がなぜ沈世国と取引をしていたのだ」

「ちよつと待ってくれ、僕は沈とかいう男とはあのレストランで初めて会ったばかりで、どうということかも分からないし何も知らない。一緒にいた王強と唐林杏に訊いてくれ。僕は今日あの二人に無理やり上海に連れてこられたばかりだ。他のことは何も知らない」

叫ぶように一気にしゃべった。

「まあ、そうむきになるな。お前、沈に何かを渡しただろう。何を渡したのだ」

「だから、あれは王強と唐林杏に持たされてきただけで中身は何なのか知らない」

「わざわざ沖縄から持ってきて中身を知らないということはない」

いだろう。そんな話はどこに行っても通用しないぞ」

「だから、あの二人に持たされたケースには鍵がかかっている中身が何なのか分からなかったのだ。渡す前に開けたらハードディスクが入っていたが中身は見当もつかない」必死で訴える。「ほらみる、中身がハードディスクだと分かっていたのだろう。あのハードディスクをどこで手にいれたのだ」

「だから、渡す直前に王強が鍵をくれて、開けたらハードディスクが入っていたのだ。中身が何なのか分かるはずがないだろう。王強に訊いてくれ」

「そんな誰に話しても嘘と分かるような話をするな。そんな話はどこに行っても通用しないと知っているだろう。正直に話した方がまだお前の身のためになると思うがな」

「だから、それが本当の話だと言っているだろう」

「どうにも厄介なやつだな。お前が本当のことを話すまでいつまでも続くんだぜ」

・
・
・
・
・
・

堂々巡りのやりとりが何度も続いた後、縞シャツが、

「まあ、ハードディスクは調べればすぐわかることだ。問題はお前が沈とどういう関係かということだ。今日はもう遅くなった、明日また聞かせてもらおう」と言っ、この取り調べはひとまず終わり留置場に戻された。

灯りのない暗い檻の中で、浅田は疲れ果てて何も考えられず薄い布団にただ横たわっている。疲れ果てているが頭がさえて眠れない。眠れないが、ただこれからどうなってしまふのかという不安だけが頭を一杯にしている。目を閉じると美玲のことが

思い出される。美玲は無事でいるのだろうか。ああ、もう美玲には会えないかもしれないと思うと涙が自然と流れ出す。不安でいっぱいになりながら長い時間、目を閉じて横になっていると、そのうち現実の感覚が失われ、自分が漆黒の闇に包まれて闇の中に浮いていると思った瞬間、その闇の中をどこまでも落ちていく自分がいた。どこまで落ちて行っても止まることはない。どのようにもがいてもどんどん落ちていく。ああ、これが死ぬと言うことかと思ったとき、「はっ」と目覚めた。あの悪夢を見ていたのだと気づく。

窓のない薄暗い檻の中では時間の感覚が失われ、今が昼なのか夜なのかもわからない。ぼんやりした感覚の中で空腹感とともにのどが渇き、明らかに体が水分を欲しているのが感じられる。

さらに長い時間が過ぎ去っていくが誰も来る気配がない。脱水症状で体を動かすのも面倒になりそのうちに空腹感さえなくなっていくように感じる。

「嘿嘿（おおいっ）」

何度も外に向って呼びかけるが誰も来ない。

さらに時間が過ぎ、再度力を振り絞って、できる限りの声で叫んだ。

「おおい、水をくれ！」

それが聞こえたのか、看守の「カツ、カツ、カツ、」という足音が聞こえた。

「頼む、水をくれ」

ずがるように言うが、一瞥しただけで、

「いちいち騒ぐな！」と怒鳴って、また同じ足音が遠ざかって行

ってしまった。ああ、もうどうにもならないかと思うと、落胆で声を出す気力も力もなくなりその場に倒れ込んでしまった。

だが、しばらくすると、また同じ足音が近づいて来るのが聞こえた。と思ったその時、

「ほれっ、」と言って、鉄格子の間からペットボトルが投げ込まれた。浅田は素早く栓を開けて水をのどに流し込んだ。あつと言う間になくなる。

「謝謝、謝謝、」と言うのが看守の姿はすでになくなっていった。ペットボトル一本でも薄れかけていた意識が少し鮮明になった。しかし同時に空腹感と不安感があらわになり、またも暗い檻の中に横たわっている自分が現実のものかどうかも分からなくなっていく。

そんな状態でさらに長い時間が過ぎ、このまま脱水症状で餓死

するのかと思ったその時、「ガタッ」と檻の扉が開き、「出ろっ」と頭の上で声ができるのが聞こえた。

あの取調室のテーブルに縞シャツと茶シャツの二人の前に座らされている浅田がいた。暗い檻に長い時間いたせいかわ、取調室の小さな電灯が眩しい。浅田の前にはペットボトル一本とご飯の上に回鍋肉を乗せた茶碗が置かれている。縞シャツが薄笑いを浮かべて、語りかける。

「もう三日も経つからさすがに脱水症状で頭が朦朧とまっているだろう。体重の四パーセントの水分がなくなると意識が飛ぶそうだからな。まず水をゆっくり飲め。あまり一度に飲むな」

浅田は意識が揺らいでいる中で前に置かれたペットボトルをゆっくりと時間をかけて飲んだ。しばらくすると、実際に脳が本来

の働きに戻ったように感じてくる。すると縞シャツが、

「どうだ、少しは意識がはっきりして空腹感が出てきただろう。前の料理を食べてもいいぜ、ただし正直に話す気になったらだ
がな」と言った。

茶シャツも横で薄ら笑いをしている。

「僕は何も隠していない。本当のことを話している。信じてくれ」

か細い声で応える。

「正直に話す気がないならこれはお預けだ」

縞シャツが片付けるように合図し、茶シャツが茶碗を片付けようとする。

「待て、分かった。本当のことを言う」

「そうか、やっと物分かりがよくなったようだな。じゃあ、料理

を味わってもいいぜ」

縞シャツが笑いながら言ったと同時に、浅田の手が箸をつかみ茶碗のご飯をほおばり始めた。

「お前、本当に腹が減っていたんだな。よく味わって食べたほうがいいぞ」

浅田が茶碗を掻き込むように食べ終わるが、空腹を満たすには程遠い。しかし、そんな浅田の感覚を無視して、早速取り調べが始まる。

「じゃあ、正直に話してもらおう。あのハードディスクはどうやって手に入れたのだ」

「実際に僕が手に入れたんじゃない。王強からもらったものだ。すでに中身を見たんだろう。中身は何だったんだ」

「おい、おい、訊いているのはこちらだぞ。正直に言うと言った

ばかりだぞ」

「中身が何か分かったら、僕にもどういふことか分かるはずだ。教えてくれ、頼む」

「よし、じゃあどうせ知っていることだろうから教えてやろう。中身は全部英語で、おそらくアメリカ軍の情報だということだ。ただし、本物かどうかはわからないがな。どうだ、分かったら正直に話せ」

「ええっ、ちよつと待ってくれ」と言ってから、浅田は考え込んだ。

「あれがアメリカ軍の情報ということとは、あの喜屋武公園でマイクと呼ばれたアメリカ人が長嶺と前田に渡したものだっただけではないのか。」

「だとすると、長嶺も前田も中国のスパイなのか。金印をアメリカ

カ人に渡してアメリカ軍の情報を買っていたというのか。

―長嶺と前田から情報を手に入れた王強が沈という国家安全局の人間に渡そうとした。全員が中国のスパイでアメリカ軍の情報を手に入れたのなら、なぜ沈も王強も唐林杏もスパイ容疑で逮捕されたのだ。

ここまで考えて、どういうことか分からなくなった。

そこで、今考えたことを話した。そして最後に、

「沈は国家安全局の人間だと言った。首尾よくアメリカ軍の情報を手に入れたのならなぜ彼を逮捕したのだ」と言った。

「お前、沈の仲間だろう。沈は中国の情報を敵側に流していた可能性が高い。お前は、アメリカ軍の情報と引き換えに沈の情報を流していたんだろう。正直に言え」

「僕は、沈とはあのレストランで初めて会ったばかりだ。王強と

も唐林杏とも上海に来る前に沖縄で会ったばかりだ。どうして中国の情報を手に入れて、それをアメリカ軍に流せるというのだ」

「沖縄で会ったばかりの人間と何で上海に一緒に来たのだ。そんな作り話を誰が信用するといふのだ。もう一度、檻の中で考えるんだな」

茶シャツに、「看守を呼んで来い」と言った。浅田の脳裏に、あの暗闇の檻の中で脱水症状と飢えで死んでいくのかと思つたことが蘇る。

「待ってくれ、これは本当のことだ。上海まで連れてこられたのは、台湾にいる僕の恋人が人質に取られているからだ。僕は訳の分からない事件に巻き込まれた被害者なのだ。頼む、信じてくれ」

すぎるように必死で声を出した。

「またまた、訳の分からんことを言い出したな。突然そんなこと言われても信用できるわけがないだろう。沈との関係をきちんと話す気になるまで、もう一度檻の中で考えろ」

結局、また窓のない薄暗い檻の中に戻された。薄い布団に丸まって横になり、「ああ、もう何を言っても信用してくれない」と思うと同時に深い絶望感が全身を包んでいく。止めどもなく涙が溢れてくる。外の見えない暗い檻の中は人間の心を確実に蝕んで悪い方にしか考えられなくする。

暗闇の中の長い時間がさらに過ぎて、水も与えられずのどが渇き空腹感が襲ってくる。すでに三日間が過ぎたと言っていたが、それが本当だとしたら三日間でペットボトル二本の水と取

調室で食べたわずかに茶碗一杯のご飯しか取っていないことになる。そう思うと余計にのどの渇きと空腹感が増し、飢餓感に変わっていく。

そしてさらに長い時間が過ぎて、またも意識が薄れていった。

「おいっ、」と言う声が耳のそばで聞こえて目を開けたが、薄暗い檻の中で誰だとも判然としない。

「お前に会いたいと言っている人がいる。目を覚ませ」

浅田は縞シャツだなと思い、腰を横にして起き上がろうとするが力が入らず立ち上がれない。

看守に担がれるようにして運ばれ、取調室に連れられていく。意識がはっきりしないままテーブルの椅子に座らされ、ぼーっと前を見る。すると、ドアの横のソファーに座っていたハイヒール

の女がテーブルに向って歩いてきて浅田の前に座った。

「唐林杏（タン・リンシン）！」

浅田はびっくりして干からびた声を絞り出すようにあげる。ダークスーツに身を包んだ唐林杏が自分の前にいるではないか。縞シャツと茶シャツは黙って後ろのソファアームに座っている。

「少し驚かせたようね。だいぶ疲れているわね、大丈夫？まず水を飲みなさい。そうしたら意識がはっきりしてくるわ」と言っ
てペットボトルを二本差し出す。

「どっ、どっということだ。お前も逮捕されたはずだろう。なんでお前がここにいるんだ」

そう言うのが精いっぱい脱水症状で体が揺れている。差し出されたペットボトルの水をゆっくり飲む。浅田が水を飲むのを見ながら、

「あなた、ここがどこかご存知ないようね。ここは共産党中央戦
略部の分室よ。公安みたいなものはないのよ。私たちは中央
委員会の方針に沿ってあらゆる戦略を実施しているのよ」
水を飲み終わると、徐々に意識がはつきりしてくる。

「何のことかわからんが、王強も沈とかいう男も逮捕されたの
に何もなかったのか？」

「彼らは裏切り者よ、」と浅田を睨むようにして言うてから、
「自分たちの職務をいいことに、情報売って私腹を肥やして
いたのよ。おそらく厳罰が下るわ」

「お前ならどうして僕が上海まで連れてこられたか分かっ
てい
るはずだ。きちんとあの連中に話してくれ、頼む」

縞シャツと茶シャツを指さしながら必死になって言った。

「あなた、なぜここに連れてこられたかご存知ないようね」

「なにつ、そんなこと分かるはずがないだろう」

「ここまで話したのだから、もう少し頭を使いなさい。中国ではすべてのメールは監視されているわ。メールを使って秘密情報を交換するなんてありえないわ。だからわざわざ渡航して情報を持ち出すことがあるけど、少しでも目をつけられたら徹底的に監視されるのよ。そのため王強は万一の場合に備えて台湾人ではなく日本人であるあなたを利用しようとしたのよ。私が中央戦略部の人間だと知らないでね。もし捕まったらあなたと沈世国の陰謀だと言い逃れするつもりだったのよ。現にまだ自分は裏切り者ではない、情報を売っていたのは浅田と沈世国だと言っているわ」

「だったら最初から僕を巻き込まないで、すぐに捕まえればよかっただろう」

「あなた、頭が悪いわね。そんなことしたら彼らの仲間や沈世国一味のことが分からなくなるわよ」

「いずれにしても僕は利用されただけで何の罪も犯していない。すぐに解放してくれ」

「それはだめよ。あなたにはこのまま王強の代わりをやってもらうわ。ただし、私の言う通りにね。あなたはすでにいろいろなことを知りすぎているわ。私たちの言う通りに働くしかないのよ」

「僕に中国のスパイになれと言うのか。そんなことできるはずがないだろう。何もしゃべらないから解放してくれ」

「それは無理よ。それくらいあなたでも分かるでしょう。私たちはすでに日本の金沢に住んでいるあなたのご両親のことも調べたわ。ご両親に危害が加わらないように私たちの言う通り働く

しかないのよ。それに台湾の彼女にもね」

「くっそう、なんて卑劣な奴らだ」

「それに、裏切ったらどういふことになるか、この五日間の檻の中の仕置きくらいでは済まないわ、分かったわね。それに台湾のためにも沖縄は大切なパートナーでいていただく必要があるからね。そのためにもあなたが必要なのよ」

あの後、さらに散々脅されたりすかさされたりして仕方なくスパイになることを承諾させられた。そして、金城建設の長嶺たちや万建建設の黄天佑らの連中とどういふ手筈でやっていくかを教えられてから、前に泊まっていた新錦江大酒店に戻された。ただ今になって、唐林杏の話をよくよく思い起こしてみると、唐林杏は台湾に住んで、個人で仕事をしていて沖縄、中国、台湾を容

易に往復できそうな自分を、王強をそそのかして、ハナから取り込もうとしていたと考えた方が辻褃が合うのではないかと強く思った。そう思うと、のこのこ上海まで来て意識がなくなるまで監禁されたくやしきで涙が湧いてくる。

水とわずかばかりのスナックを食べてから倒れるように長いことベッドで休んだ。すでに何時間かが過ぎ深夜近くになって、目を覚ますと異常な空腹感に襲われた。深夜であるがルームサービスに電話して空腹を満たす。我に返って高層階の部屋の窓から上海の夜景を見ていると底知れぬ恐怖が沸き起こってくる。恐怖を少しでも和らげようと深夜であるがWeChatで美玲に電話をする。中国のスパイになったことなど言えるはずもないがとりあえず自分が無事であることを伝えようと思った。「ルルルルル・・」と短い着信音がした後、

「你好、玄？ 元気なの？」と美玲の声が耳に届いた途端、涙がこぼれてくる。

「ああ、元気だよ。美玲は大丈夫かい？」涙声で応える。

「ええ、大丈夫よ。泣いているの？大丈夫なの？いつ帰って来られるの？」

「僕は大丈夫だよ。明日のフライトで沖縄に戻って数日してから台北に帰る。もうすぐ入札があるからね」涙を拭きながら応える。

「もうすぐ会えるのね。待ち遠しいわ。ところでこの間、呉先生からメッセージが入っていて『金印について面白いことがわかったわ』と言ってこられたのよ。金印は許会長に返したはずなんだけど、『どういふことですか』と送ったんだけど返事がないのよ」

「それはどうということなんだろう。ひよっとしてまだ金印を持っているということかな」

「ええ、そうかもしれない。明日もう一度研究室に行ってみるわ。何か分かるかもしれない」

「ああ、だけど深入りしては絶対だめだよ。いつも誰かに監視されていることを忘れないで」

その後も二人は時間が過ぎていくのを忘れ、互いの無事を確かめるように話を続けた。

再び沖縄へ

上海浦東国際空港まで唐林杏がピタリと寄り添いながら付い

てきた。

「途中で僕が逃げたら、お前らどうにもならんだろう」と言ってみる。

「大丈夫、飛行機の中でもあなたは監視されているわ。変な気を起こさない方が身のためよ」

はったりかとも思ったが、そうでないかもしれない。

当初沖縄から持ってきたハードディスクのケースと同じようなケースとアタッシューケースを渡され、それを持って午後の便で那覇空港に降り立った。唐林杏の話では小さいケースには王強が持って行ったのと同じように中国の機密情報の入ったUSBがいくつか入っているとのことであった。ただし、今回は本物の情報ではない可能性が非常に高いと浅田は思っている。

空港には前田と凜が迎えに来ていた。通関を通過して出口を出ると、凜が手を振っている。前田には唐林杏から連絡が来ているのだろう。

「長いご出張ご苦労様でした。あら、一週間でえらく痩せましたわね。大丈夫ですか？」

凜は浅田に上海で何があったか知る由もない。

「ええ、大丈夫です。それより仕事の方は進んでいますか？」

「浅田さんに言われたように必要な図面を描いてみました。それに沿って私たちなりに強度計算もしました。明日、浅田さんにチェックしていただいで大丈夫でしたら、入札のためのプレゼン資料にかかりたいと思っています」

「そうですか、よかったです。お手伝いできなくてすみませんでした」などと言っていると、前田が二人に寄ってきた。

「荷物を持ちましょう」

何食わぬ顔で浅田のスーツケースを手にとって並んで歩いて行く。

「ああ、すみません」

前田の顔を見ると、前田がにこりと笑って、

「唐さんから聞きましたよ。ケーブル工場がえらく遠くの貴州にあったそうで行くだけでも大変だったと。貴州と言えば少数民族の自治州が点在する山奥ですからね」

「ああ、そうですね」

曖昧に応えながら、なるほどそういう筋書きにしようとしているのだなと思った。すると、凜が驚いた様子で訊いてくる。

「まあ、そんな中国の山奥の会社に作らせて大丈夫なんですか？」

それに応える前に、前田が浅田の顔を覗き込むようにしながら
応える。

「今回のような高強度ケーブルを作れる会社はそこしかないの
だそうですね。そうですね」

「ええ、貴州は昆明に近いところですが州都の貴陽は古い都
たしか数百万人の人口をかかえる都市です。工場もしっかりし
ていると思いました」

やむを得ず頭にあった知識をもとに話を合わせた。

「そうでしたか、社長も浅田さんに感謝しています。久しぶりに
夕食を一緒にしようと待っていますわ」

前田の運転する車は、那覇空港を出てすぐにE58の高速道路
に入った。二時間ほどで前と同じ「Okinawa City Hotel」に着い

た。すでに夕方六時半を回っている。ホテルの前に停めた車から降りて、浅田と並んで前田がスーツケースを運びながら受付に向う。歩いている途中に前田が、囁くように言う。

「取引は明日の夜にこの前と同じ場所で同じ時間だ。預かったものを持ってきてもらう。唐さんからいろいろ話を聞いてきたはずだ。分かったな、お前の分け前もあるからな」

もう完全に仲間だと思われているのかとくやしさが溢れてくるが、凜の手前、黙って頷くしかなかった。

上海へ行くときにチェックアウトせずに出たのでホテルの部屋は前と同じで、持って行かなかった衣類、書類、パソコンなどはそのまま残されていた。スーツケースや持たされたアタッシュケースなどを部屋に置き、ホテルを出て凜と前田と一緒に歩いて夕食の場所に向う。場所はこの前と同じ「和琉ダイニング東

や」であった。

店に入ると、すでに金城社長と長嶺専務が前菜に箸をつけながらビールを飲んでいた。社長が浅田の顔を見ると、すぐに手を上げた。

「おや、浅田さんえらく痩せたのではないですか。えらい長い出張になり大変でしたな」

「出張が長くなりご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」
「大丈夫ですよ、この連中が浅田さんの言われたようにやっていますから」

凜と前田を指しながら言った後、この前と同じ泡盛といくつもの料理を頼んだ。すぐに泡盛がきて、浅田に「ご苦労様！」と皆で言っけて乾杯した。浅田は複雑な顔をしながら杯を空けた。

「今日は、日本の料理をたくさん食べて疲れをとってください。

日本に帰ると落ち着くでしょう」と社長が言うと、長嶺が、

「浅田さんは中国語が流暢に話せるから中国の仕事も楽にできたんじゃないですか。うちにもこういう人が必要ですな」と言
って浅田を見てにこりと笑う。浅田は心の中で、「くそっ、この
悪党が、」と思うと同時にこの連中の仲間の王強や沈世国は捕ま
って今も拷問を受けているだろうことを知らないのだと思うと、
変な優越感のようなものを感じて黙って泡盛の杯をすすった。

「そうだな、浅田さん、いっそのことうちで働かんかね。これか
らは沖縄と中国は交流を深くしてウインウインの関係をつくら
ないといかんですからな。昔の琉球は中国の明と盛んに貿易を
して隆盛を極めた。清の時代も中国との交易はずっと続きまし
た」と白々しく言ってから泡盛の杯を空けた。

「社長、疲れて帰ってきたばかりの浅田さんにそういう話は今

度にしてあげて」

凜が割って入ったが、金城社長はかまわずに続ける。

「浅田さん、琉球は昔、薩摩に襲われてから日本の領土のように扱われてきたがもともと独立した国で中国とも関係が深かった。沖縄は日本から独立すべきだという話があるのを知っていますか。そんなことができるわけがないと思われるでしょうが、実際にそういう運動があるんですよ」

浅田は突然、社長が沖縄独立運動の話をし出して「えっ」という顔をしていると、長嶺がいかにも知った顔で、それを後押しする。

「最近の日本政府は、政府の言うことを聞かない沖縄を邪魔者ように思っているがほとんどのアメリカ軍が沖縄にいますということで、基地イコール自国の安全ということだけの価値で沖縄

を見ている。基地を県外に移すという約束は破られ、犠牲を沖縄に押し付けている。わしらはそんな日本政府のやり方に我慢がならないのだ」

それを引き取って、金城社長がさらに続ける。

「わしも長嶺も、独立運動に賛同している。ただし、実際に独立できるかといえればそれは難しい。わしらの思いは大幅な自治を確保して日本政府と対等に話ができるようにしたいと思っている。そうしたらアメリカも中国も台湾も今と違った付き合い方ができるんじゃないかと思っているわけだ」と言って一気に泡盛の杯を空けた。

「そうしたら、それこそ台湾のように中国から狙われませんか？ 例えばもともと琉球は中国の領土だったとか言ってくるじゃないですか？」

浅田は唐林杏の顔を思い浮かべながら言った。

「いや、琉球は昔から大国を相手にうまくやってきた。わしらはそういうやり方を昔から知っているのだよ」

社長がそう言った後、長嶺が続ける。

「中国とうまく付き合ったほうがわしらのビジネスも、もっともっと大きくなる。わしらから見るとそれを日本政府が邪魔しているとした見えないわけだ」

二人とも話に熱が入るとともに泡盛のせいもあり顔を赤らませている。ここにきて浅田は思った。

―なるほど、会社として中国とのビジネスに期待しているために、王強や唐林杏のような怪しげな連中が会社の中をうろろうろしていても会社の人も好意的にみていたのだ。

―こういう日本政府に不満を持っている人たちの沖縄独立運動

は唐林杏のような中国スパイ（工作員）には恰好の餌食なのではないか。

―中国ビジネスをいいことに長嶺が密輸をしたり、情報の売買をしていることを金城社長は本当に知らないのか。

浅田が黙っていると、社長が前田に向かって盃を上げながら、

「前田君のように本土の人でも基地反対運動に加わって、わしらのことを理解している人もいる。浅田さんもわしらの仲間なわけだから一度考えてみてください」

「社長、さつきから何を言っているのよ。浅田さん、こんな人らの絵空事の話など聞かなくていいわよ。お疲れのようだからゆっくりして中国の話でも聞かしてください」

凜が気を利かして言うが、上海の監獄で飢え死にしそうになっただけで帰ってきた浅田にはどうにも助け船にはならない。浅

田はさらに続く独立運動の話聞きながら黙って泡盛の杯をすすった。

帰り際に長嶺が、寄って来て耳元で囁いた。

「持ってきたアタツシケースともうひとつのケースは明日の朝わしのところに持ってきてくれ。中を見ようとしても無駄だぜ」

浅田はホテルに帰った後、先ほどの話を思い返していた。

—実際に沖縄独立運動のような運動はある意味で反日本政府運動であり中国としては、これを煽るのは都合がいい。長嶺のような人間を密輸にからんで儲けさせて煽り、さらに金城建設のアメリカ軍とのコネクションからアメリカ軍の情報も手に入るところが王強や沈世国のように中国の情報を売るような連中が

現れた。しかし、この連中は始末した。

―そして唐林杏は今まで通り廈門貿易会社の社員の肩書を使って密輸と情報売買を続けると長嶺には言っているが、実は浅田を使って中国の沖縄工作をしようとしている。つまり、持たされた情報は、この工作の一環ということになる。

ここまで考えて、この偽情報をアメリカ軍に渡すということは、ひよっとして大変なことになるのではないかという予感のようなもの湧いてきた。

持たされたあの小さいケースを机の上において開けようとするが、ケースには三桁のナンバーキーが付いている。適当にナンバーを回してみるが開く気配がない。当然である。またもう一つのアタッシュケースにも同じナンバーキーが付いている。ということとは長嶺には何らかの方法でナンバーを前もって伝えられ

ているということか。そう考えるとどうしようもないかと諦めかけた時、アタッシユケースの持ち手にフックの付いた革のカバーが付いているのが目に留まる。ひよっとすると何かが隠されているのではないかと思うと同時に、フックの付いたカバーを剥していた。

案の定である。革のカバーの内側には二つのナンバーが書かれた紙が貼りつけられていた。小さいケースのナンバーキーにひとつのナンバーを合わせるとケースを開けることができた。中には唐林杏が言っていたように赤、黒、白の三個のUSBメモリがはめ込まれるように入っていた。唐林杏は、赤色のUSBをアメリカ軍に渡し、黒と白のUSBは台湾に帰って黄天佑に渡すようにと言った。

コンピューターを立ち上げて、まず赤色のUSBを挿入して中

を開く。七個のファイルがあり、A1、A2、A3、B1、B2、B3、Cと名前がついている。まずAをクリックするが、やはりパスワードを訊いてくる。A2からB3まで開こうとするがパスワードがないと開けられない。続いてCをクリックすると何かのプログラムが出てきて最後に何かをインプットするようになっていた。

これはおそらく他のファイルを開いたときに使用する起動プログラムのようなものだなと思った。ファイルを開けられないまま七個のファイルをコンピューターにコピーした。この後、黒と白のUSBも中にはいくつものファイルがあったが開けられず、それぞれファイルをコンピューターにコピーした。つまり、パスワードが分からないとこれ以上どうにもならない。

仕方なくアタッシュケースのナンバーキーにもうひとつのナンバーを合わせるとアタッシュケースが開いた。開いたアタッ

シユケースを見て首をかしげる。中には二、三十枚の中国商工銀行のキャッシュカードが束ねられて大きな封筒に入っていた。これはつまり、このキャッシュカードを使って日本で現金を下ろせということかと思う。しかし、小口の現金を何日にも渡って引き出さなければならぬ。まあ、それでも数千万円にはなるかと思った。さらに見覚えのある木箱が二つ隅に詰め込まれている。木箱を開けるとやはり、またもあの金印である。これらはおそらく自分が中国に持って行ったアメリカ軍の情報に対する見返りではないかと想像した。疲れた体に鞭打つようになんとか中を探ろうとしたがこれ以上の情報らしきものは見つからない。ここにきて疲れが押し寄せるように出てきて美玲に沖繩に着いたことを知らせるメッセージを打った後、倒れるようにベッドに横になった。

翌朝、部屋の電話が鳴る音で目が覚めた。凜からの電話ですでに昼近くになっているが大丈夫かと言う。目覚めたばかりで朦朧となっているが、沖縄のホテルのベッドで目覚めることができたという事実が確認できると、上海での出来事を思い返してよく無事に帰って来られたものだと思う。

携帯電話をとると、美玲からメッセージが入っていた。

「昨日、呉先生に会いに行きましたが不在でした。研究室の女性の話では、まだ金印を持っていてずっと調べていらしたらしい」とあり、

「もう金印について関わらない方がいい。また事件に巻き込まれたら取り返しがつかない」と返信した。歴史学の教授である呉教授はどうしても金印の謎から離れられないらしい。

浅田は昼過ぎに事務所に出勤し、アタッシュケースとUSBの入ったケースを長嶺に渡し、赤色のUSBをアメリカ軍に渡すように言われたことを伝えた。

「えらく遅いじゃないか、どこかへ逃げたかと思ったぞ」
そうさ、台湾に逃げて帰りたいところだと心の底から思う。

プロジェクト室に入って行くと、プロジェクトメンバーの全員がそろっていて、プロマネの新垣から今までの成果を見せるので直すところがあれば言ってほしいと言う。中央のテーブルに全員が集まって大きなモニターを使って説明を始めた。設計の話と上原健人がし、工事の話と島袋と与那嶺がした。計算書やCAD図をモニターに映して詳細な説明があった。説明を聞きながら浅田は正直に言う「とまだまだ道半ばだな」と思ったが、入札までの時間も限られていることから大筋では問題

ないでしょうと言い、入札審査のプレゼンに賭けることにして、最も重要な景観とともに耐風性・耐震性についてもどのよう
に審査員にアピールするかについて話をしながらメンバーと議論
をした。また特殊なケーブルネットの工事をいかに分かりやす
く簡潔にプレゼンするかについても議論した。最後に新垣から
現時点での工事費について説明があり、続いて、

「浅田さん、長い出張でお疲れのところ説明を聞いてくれてあ
りがとう。浅田さんが概ね了解してくれて私らも一安心ですよ。
プレゼンの資料もかなりできていますので明日にでも見てくれま
すか。入札まであと一週間ですので、明後日には全員で台湾に行
って万建建設とすり合わせをして最後の仕上げを行います。中
国から戻られたばかりですが一緒に台湾に行っていたたくこと
になります」と言った。それを聞いて凜が、

「浅田さんにとっては台湾に戻っていただくということよ」と笑いながら言い、他の人らも、

「やっと帰れますね、彼女がお待ちかねでしょう」などと言ってくれた。

夜になって、長嶺と前田とともに、この前アメリカ人と取引のあった喜屋武公園に向った。公園の駐車場には数台の車が停まっているが人影はない。わずかばかりの照明に照らされながら駐車場で待っていると黒色のバンタイプの四輪駆動車が入ってきた。長嶺と前田がアタッシュケースを持って車が停まったところに向って歩いて行く。浅田もそれにつられるように後からついていく。車のドアが開き、前と同じ大柄なアメリカ人二人が顔を見せる。

「やあ、Mike、How are you?」

長嶺がそう言った途端、浅田を指さしてマイクが大声で叫んだ。

「What, s a hell! Why is this guy here! (なんだ! なんだ!)」
「いつがここにいるんだ!」

「Let me explain, Mike (マイク、説明させてくれ)」

長嶺がなだめるように冷静に応じて、この前の取引の後でどう
いうことになったか、どうして浅田がここに一緒に来ているのか、
王強がこられないので中国まで行って情報を持ってきたのは浅
田であること、今後も中国側との連絡は浅田が行うなどを話し
た。さらに、次のように継ぎ足した。

「He is one of us now (今や俺たちの仲間だ)」

マイクは、それを聞いて納得したように浅田の前に来て、手を差
し出す。

「OK, I, m Mike Nader. He, s George Brown (OK、マイク・ネーダーだ。こちらはジョージ・ブラウンだ)」

浅田は、仕方なく黙ったまま二人と握手した。

「彼らは海兵隊の中佐と少佐だ」

階段を上がって、広場へと向かう途中に長嶺が教えてくれる。

「なんで海兵隊の幹部がこんなマネをしているんだ」

「これは彼らの特殊任務さ」としか言わなかった。

広場に着くと、前と同じく上に小屋根の付いたテーブルを囲むようにベンチに座る。夜の薄暗い公園に五人もの男がかたまつて話をしているのを見たら、誰しも怪しむだろうと思うが廻りには人の気配がない。まず前田が持ってきたアタッシュケースをテーブルに置いて開ける。中には、浅田が中国から持ってきた小さいケースとあの金印の箱がひとつ入っていた。小さいケ

ースを開けて、赤色のUSBメモリを取り出す。

「これでいいのだな」と浅田の顔を見て言う。

「ああ、」とだけ返事をした。

マイクはケースごとUSBメモリを受け取り、さらに金印の箱も受け取った。すると、ジョージがノートパソコンを取り出して起動し、USBを差し込む。つまり情報がまともなものかどうかチェックしようとしているのだなと思う。

昨夜と同じ七つのファイルが出てくるはずである。さあ、どうやってファイルを開けるつもりなのかとジョージの指先を見つめる。とその時である。マイクが金印の箱を開けて金印を取り出したかと思うと、大きな拡大鏡を取り出した。そしてスマホのライトを当てながら拡大鏡で丹念に見つめる。見つめながら、

「xxsino0639HTGB」とゆっくりと声に出して言った。それを聞き

ながらジョージがパソコンに打ち込む。浅田はそれを必死で記憶しようとして声に出さずに何度も復唱した。

つまり、金印にはパスワードが刻まれていたのだ。

ジョージはすごいスピードでキーボード叩いては考え込み、また叩いては考え込むことを繰り返す。他の連中は黙ってそれを見ている。二十分くらい過ぎたであろうか、マイクを見ながら早口の英語で言った。

「OK, It's fine. This is similar format to the last one, and supposed to be from reliable source」

提供情報には何か決まったフォーマットがあってこれはそれに従って作られているので確かな筋からの情報だと思おうと思ったのであろう。

「OK、長嶺さん、お前さんへのお土産だ」

彼らが持ってきたアタツシユケースを長嶺に差し出した。長嶺はさつと開けて確かめるとすぐに閉めて礼を言った。

「マイク、ジョージ、ありがとう、今度もいいビジネスだったよ」前田は嬉しそうに握手したが、浅田は握手せず彼らのそばから離れて二人が先に歩いて行くのを見送った。

帰りの車内で運転席に前田が座り、後部座席に長嶺と浅田が座った。

「浅田さん、」苦勞さん、今回は王強が来ないので怪しまれるのではないかと思ったがスムーズにいった。これからもよろしくな」

長嶺がそう言いながら、もらったアタツシユケースを開いて三東の札束を差し出した。三万ドルであろうか。

「今回の分け前だ。少ないが取っておいてくれ」。

「そんなものを貰えるわけがないだろう」

「それは困った。我々の仲間として貰ってくれないといかんだよ」

強い口調で言って浅田の膝の上に置いた。

「いらんと言っているだろう」

「いや、これはすでにお前のものだ。要らないのなら捨ててもいいがお前はすでに分け前をもらったのだ」

突き返そうとするが、受け取ろうとはしない。どうしても仲間から抜け出させないということであろう。仕方なく、札束を自分のポーチに入れた。ああ、どんどんと悪の仲間に落ちていくと思うとポーチを持っている手が震え、頭がしびれるような感覚になる。

ホテルに帰ってまず先ほど記憶したパスワードを紙に書き留める。これで何とかパソコンにコピーしたファイルは開けるだろう。先ほどのことを美玲に話そうとスマホを開けると、美玲からメッセージが届いていた。曰く、

「先ほど呉先生からメッセージがあつたのに気付いた。メッセージには『普通に見ただけだと分からないけど拡大鏡で見ると金印の文字と文字の間に非常に小さな文字が刻まれているのが分かりました。朱肉が付かないようになってるので、印を押しても写らない。これは何かの暗号のようなものに見える。例の事件に関係があるかもしれないので調べてみます』とあつた。ひよっとして許会長に会いに行ったのかどうか私も調べてみます」

何という危ないことをするのかと「110」電話をする。呼び出し音が聞こえるが出ない。しばらくして呼び出し音が切れてしまっ

た。もう一度電話するが同じで一、二分すると呼び出し音が切れて繋がらない。しかたなく、メッセージを送った。

「僕が行くまで絶対に動かないで。美玲は悪党グループに見張られていることを忘れないで」

どうも呉麗華教授が金印に刻まれたパスワードの文字に気が付いた。それを許会長に確認するために台南に行ったかもしれないと美玲は推測した。呉教授の行方を捜しに美玲は台南に向ったのであろうか、今電話が繋がらない。美玲は見張られているとあれだけ言ったのにどうしようもない人だと不安ともどかしさが一気に押し寄せてくる。美玲に対する不安が募って、どうにもアメリカ人に渡した情報ファイルを開く気力がなくなり、ずっと美玲の行方について想像してはため息をつく、そんな状態で夜は更けていった。

次の日も美玲の電話は繋がらないが、美玲は大学の助理教授なので授業や会議があれば電話が繋がらないこともあるだろうとも思ってみた。

事務所に行くとメンバーからプレゼンの資料を見せられたがどうにも身が入らない。そんな浅田の横からプロマネの新垣に、

「うちの分担のプレゼンは中身の全体像が分かり、中国語で行う必要がありますので浅田さんをお願いします。よく見ておいてくださいよ」と言われ、「はっ」となって、新垣の顔を見る。

「えっ、ああ、分かりました。頑張ります」

上の空のようないい加減な返事をした後に、我に返り大役を任されたのだという自覚が急に湧いてくる。

「今回の入札の成否はプレゼンにかかっていますからな、頑張

ってくださいよ」と念を押される。

「ええ、十分にわかっていきますので頑張ります」

夕方になって、美玲からメッセージが入っていた。

「今日、呉先生の研究室に行ったけどまた不在。研究室の女性の話では、明日からお休みを取られているとのこと。心配しないで」

美玲から連絡があったことで少し気持ちが和らいだが、いつも行動が先行する美玲に釘を刺す意味でメッセージを返した。

「ただのお休みだろうから、呉先生を探しに行ったりしてはいけない。悪党がどこかで見ていることを絶対に忘れないで」

美玲についての心配が少しだけ和らぎ、明日にはやっと台湾に帰って美玲に会えるなと思うと気持ちが悪くなったのが

分かる。

ホテルに帰って荷物の詰め込みが終わると、あの情報ファイルを開いてみようという気持ちが出てきて、パソコンを起動する。コピーした情報ファイルを開いて、まず「」ファイルをクリックする。昨日メモしたパスワードを入れると膨大な意味不明な記号や数字やアルファベットが延々と出てくる。つまりこれはデータファイルで、これを何かのプログラムにインポートするとアウトプットファイルが作られるという仕組みだろうと推測する。そこで昨日と同じく「」ファイルをクリックするとプログラムが出てきて、最後にバーが点滅する。この点滅するバーに「」と入れるがプログラムは動かない。そこで、もう一度「」ファイルをよく見るとファイルの頭にコマンド名のような英数字の羅列がある。これをコピーして点滅するバーに張り付ける。すると

プログラムが起動してすごいスピードでプログラムの文字が流れていく。一分くらいしてプログラムが消えて同じファイルの中に「OUTPUT」と書かれたNoteファイルが出現した。これをクリックすると、そこには膨大な英語の文章があった。これを全部読むにはかなりの時間がかかると考え、読みやすくするためにNoteファイルをPDFに印刷した。このNoteファイルは、次のファイルを開くと上書きされるようにできており別々に保存しておく必要があった。この作業を33ファイルまでやって一息つく。一息つくとすぐに中身が気になり21ファイルから読み始める。読んでいくうちにこれは中国海軍が所有する兵器の性能や使用方法のようなものと推察できる。素人が読んでも何のことかわからないが敵対する相手からすれば戦略上貴重な情報なのだろう。ただしこれが本物の情報ならばである。途中まで読んで

ファイルに移る。これも似たようなファイルでこれも最初の数ページをよんでBファイルに移る。最初のページを見ただけで同じようなことが書かれていると分かる。これも飛ばしてBファイルを開ける。しばらく読むと、これは中国海軍の行動計画のようなものだと推察する。こちらの方に興味がわくが、上海で監禁されたことなどの疲れが出てきて読んでも頭に入らず瞼が重くなってきた。ここまですて明日の台湾へのフライトの中にも読もうとパソコンの電源を落とした。

そして台北へ

那覇空港を飛び立つ飛行機の窓から午後の太陽に照らされた

真っ青なサンゴ礁の海が見える。あと一時間半くらいで台湾に戻れると思うと着陸するのが待ち遠しい。今回は新垣、凜、島袋と前田の四人が金城建設から派遣された。あとで金城社長と長嶺専務が合流するのであろう。

隣に座っている凜は離陸してしばらくすると目を閉じてうとうとし始めた。浅田はパソコンを開いて昨夜の続きを読み始める。訓練内容や場所の概要などが各艦艇や船隊ごとに書いてあり、これを素人が見てもたいした情報には思えないが、アメリカ軍からみたら重要な情報なのだろう。B2ファイル、B3ファイルへと読み飛ばしていく。いわゆる訓練計画であったり警戒業務のようなものであったりで素人からみるとあまり興味を惹かれない点がない。おおよそどんなことが書いてあるかは分かったが、中身についてはよくわからないなとB3ファイルを途中で閉じよ

うかと思った時、「Diaoyu Islands」という名前に目が留まった。Diaoyu Islands というのは中国語で魚釣島であり、日本語では尖閣諸島である。これを読もうとしたその時、

「もうすぐ着陸よ、何かの文献ですか？ さっきから一生懸命読んでいたわね」と言っていて凜がパソコンをのぞき込む。

「ああ、たいしたものじゃありません。アメリカの建築の文献です」

慌ててファイルを閉じたが、先ほどから凜が不思議そうに見ていたと思うと、顔が赤くなったのが自分でも分かるような気がする。

「あら、何か良からぬものでも読んでいたんじゃないありません」
顔を窺うようにして、さらにからかうようなことを言う。

「いえ、いえ、ただの文献ですよ」

これ以上見られまいとすぐにパソコンを閉じた。

「慌てて閉じるところを見るとますます怪しいわね」

「いえ、本当にまじめなものです」

「まあ、そんなにむきになって。見せてとは言わないから心配しないで」

凜にはかなわないなと思っているとシートベルト着用のサインが出て着陸のアナウンスが流れた。

桃園国際空港の縦に長いターミナルを出ると繁体の中国語のサインや看板があふれており、これらを目にすると、やっと台湾に戻ってきたという実感が湧いてくる。二週間弱の出張であったがあまりにもいろいろなことがあって台北に着いたと思うと何とも言えない安堵感に包まれる。

さっそく美玲に電話をする。ところが、「おかけになった電話は電波の届かない場所にいるか電源が入っていないためかかりません」というアナウンスが流れてくる。今感じたばかりの安堵感
は吹っ飛び、どうしてしまったのかという不安でいっぱいになる。とにかく家に帰ってよく考えてみようと思う。

桃園国際空港から金城建設の人たちと一緒に地下鉄で台北駅まで行き、他の人たちと別れてタクシーで龍山寺の近くのアパートに戻ることにする。

「明日、きちんと来いよ。また分け前を渡すからな」

別れ際に前田が近寄ってきて、薄笑いを浮かべて耳元で囁いたが、浅田はそれには反応せず、

「ではまた明日、」とみんなに向かって笑顔で言って別れた。

アパートに戻り、部屋の窓を開けてからソファに座って缶ビールを一口飲むと疲れがどっと出てきて頭が揺れるような感じに襲われる。美玲に電話するが、着信音はするものの出ない。

「先ほど家に帰った。連絡ください。愛しています」
そうメッセージを送った後、今まで美玲から送られてきたメッセージを思い出してみる。

—密輸や機密情報の売り買いをしている連中が情報の入ったファイルを開けるために金印にパスワードを入れて交換していた。おそらく金の密輸と兼ねていて一石二鳥を企んだのだろう。いずれにしても呉教授はそのパスワードの刻印に気づいた。

—とすると呉教授は金印が偽物だとわかり、それを許会長に問いただすために休みを取って許会長に会いに行ったのではないか。

—しかし、呉教授はその刻印がパスワードだとは知らない。だ
もし許会長がこの密輸事件に関与していたら呉教授の命が危な
い可能性がある。考えてみると美玲は呉教授とずっと連絡が取
れていない。

—だがちよつと待てよ、新華実業の陳部長が必死である金印を
取り戻そうとしたということは金印に刻まれたパスワードは生
きているということではない。としたら、ひよつとして今回、浅
田が上海から持ってきた情報ファイルを開ける鍵なのではない
か。いやそんなことはない、持ってきたアタッシュケースにはも
う一つ金印が入っていた。もうひとつ別の取引があるというこ
とだろう。

—それにしても美玲が呉教授を探したりしなければいいのだが。
ああ、美玲に会いたい。

ここで美玲のことを思って思考が中断する。

しばらくぼっーと美玲のことを思い浮かべた後、二本目の缶ビールを開ける。そしてまた金印について思いをめぐらす。

もし浅田と美玲が拾ったあの金印と今回の取引との関係も、やはり否定できないのではないかとの思いが出てきて、飛行機の中で中断した㊗️ファイルを読んでみようと思った。

パソコンを起動して㊗️ファイルを開き、先ほどの続きを目で追って行く。読んでいくうちに、これは何ということを書いているのだと頭の中が高揚していくのがわかる。つまり、魚釣群島、日本でいう尖閣諸島への上陸訓練について書いているのであるが、場所は中国国内にある別の場所ではなく実際の尖閣諸島で行うと書いているのだ。尖閣諸島は魚釣島、北小島、南小島、久場島、大正島、沖の北岩、沖の南岩、飛瀬などの島と岩礁からな

っており、このうち久場島、大正島はアメリカ軍の射爆撃場があるが実際には使われていない。訓練の要旨はこうだ。十一月一日、まず中国海軍の艦艇を沖縄と宮古島の間を通過して太平洋に向かわせる。それと同時に中国海軍が尖閣諸島から五〇〇キロ以上離れた北側で演習を行う。これで日本の海上自衛隊や海上保安庁の監視を太平洋と演習場所に向けさせる。この間に四艘の漁船に乗った海軍兵士が日本の監視をすり抜けてまず南小島と北小島に上陸する。この漁船には駐留のための十分な資材・食料を載せる。これが探知されても尖閣諸島は沖縄本島から四四〇キロも離れているのですぐには偵察機が来ない。先のふたつの島に監視を向けさせておいて尖閣諸島最大の島である魚釣島に上陸する。アメリカ軍の射爆撃場のある久場島と大正島には手を出さない。こうすることでアメリカ軍の迅速な行動を抑制

する。上陸した後、中華人民共和国の国旗を魚釣島の山頂に掲げると同時に北京政府が魚釣島群島は有史以来、中国固有の領土であることを世界中に宣言する。

これはもう訓練ではなく、尖閣諸島の占領計画そのものである。何ということか。しかも十一月一日といえれば後一週間後ではないか。しかし、こんな情報をアメリカ軍に流してまともに信用するのであろうか。唐林杏がどんな意図をもってこんな情報を流したのであろうか。いくら推測しても実際の意図を知るすべはない。

そうしていると、美玲からメッセージが入った。

「連絡が遅くなりごめんない。どうしても呉先生のこと心配で調べていたのよ。明日また連絡します」

どうもまだ美玲が危ないことに足を入れようとしている気がする

る。早速、電話するがつながらない。一体、何をしようとしているのか。一旦「こうしようと思うと、どうにも止まらない人だと分かっている」ので余計に心配でたまらない。

次の日、まだ美玲には会えないまま、台北の眩しい朝日を浴びながら久しぶりに万建建設に出向く。受付で案内された会議室に入っていくと何志偉部長、呉家豪設計課長設計の趙俊宏らがいて、

「你好、你好、浅田さん、よく帰ってきました。待っていました」と言って笑顔で出迎えてくれた。新垣、凜、島袋、前田の四人はすでにテーブルについていて、浅田がテーブルにつくとすぐに会議が始まった。中国語での会議で新垣や島袋は凜と前田から通訳してもらっている。何部長が最初に口火を切る。

「最初に今後の予定ですが、明日の午後には高雄市でプレゼンがあります。今日はこの後プレゼンの練習を行います。全体のプレゼンは私がやりますので屋根部分のプレゼンは浅田さんをお願いします」と浅田を見る。

「ええっ、明日ですか、それはえらく急な話ですね」

「新垣さんには伝えてあったと思いますが、聞かれてなかったですか。でもプレゼンの資料も浅田さんがチェックされたと聞いていますので大丈夫でしょう」

新垣は凜から通訳してもらって、「えっ、」という顔をした。さらに何部長が続けて、

「ということで朝九時三十分発の高鐵（高速鉄道）で高雄に移動します。今回は三グループによる入札になります。午前中に一グループ、午後には二グループがプレゼンをします。我々は最後の

プレゼンで、午後三時から一時間半行います」

他の人たちはメモをとりながら聞いている。

「それで、入札は翌日の朝九時に行われます。おそらくその日の夕方には結果がわかると思います。うまくいったら高雄市政府に挨拶をし、手続きをする必要があります。ですから皆さん、高雄に二泊する予定で行っていただきませう。二日目は時間があるので建設予定地を見に行きましょう。明日、明後日の予定ですが何か質問がありますか」

皆を見回して訊くが手を挙げる人はいない。

「もしうまく落札できたらすぐに現地に事務所を設営しなければなりません。市役所からは早急に工事を始めてくれと言われている」

「ということは、私たちのメンバーもすぐに事務所の設営から

とりかからなければならぬということですか？」と凜が質問する。

「金城建設の方らは、もしすぐに着工式をやるとなったらまず着工式だけに参加してください。後のことは我々でやります」

何部長の話の後、入札価格の最終打合せのため万建建設の営業と新垣、前田は別室に移動していった。技術部隊が会議室に残ってプレゼンの練習をする。大きなモニターにプレゼン資料を映し出して、まず何部長が建物の概要から説明し、金城建設で作ってきた資料になったところで、浅田が替わって説明する。浅田の話が終わったところで再び何部長に代わって建物の内部の説明に変わっていくという流れである。プレゼン資料は事前に審査委員に渡してあるということで、審査委員は事前に吟味していることになるので、彼らからの質問に十分に答えられるよう

にしなければならぬ。一回練習したところで昼近くになり、昼食の後、さらに練習をすることになった。

会議室を出ると前田が待っており、「話がある」と言われて全員が出て行き、空になった会議室に二人で戻った。

「長嶺さんにマイク・ネーダーから電話があり、今回の情報は本当に沈世国からのものかと言ってきた。どうも信頼性のない情報が混ざっていると思われると思うのだ。長嶺さんが唐林杏に電話で確かめたが、確かに沈世国から出た情報だと言っているそうだ。お前、あのUSBは沈世国からもらったものかわかるか」沈世国も王強もすでに捕まって今頃は拷問でも受けているだろう。さすがにアメリカ人もあの情報はおかしいと思ったのだ。しかし、本当のことを言う訳にもいかない。

「そうだ、上海で沈世国という人に王強と唐林杏と一緒に会っ

た。USBの出どころはその沈世国だと思うがね」

「王強に電話しても電話が通じないようだが、お前、何か知らんか？」

「えっ、そうかね、それはたまたま携帯の電波が届かなかったのじやあないのか。王強も一緒に沈世国といたのは間違いない」

「そうか、そうだな」と納得したようで、

「これから黄天佑さんに会いに行く。お前も一緒に来い」と言っ
てアメリカ人に渡したのと同じアタッシュケースを持って会議
室を出ようとする。浅田もそれに続いて行く。

万建建設からタクシーで十五分くらい南に行ったところにあ
る「楽埔町」という表札の出た家に着いた。一般の住宅のように
見える古びた門を入ると昔の日本家屋のような建物があった。

古い板廊下を歩いて、ひとつの部屋に案内されて中に入ると丸いテーブルがあり、すでに黄天佑ともうひとりの男がついていた。浅田は黄天佑の顔を見ると、

「お前のために飛んだことに巻き込まれてしまった。あれからどんな目に……」と文句を言おうとしたが、それを無視して笑顔で立ち上がり、

「おお、浅田さん、前田さん、ようこそ、こちらは陳建志さんです」ともうひとりの男を紹介しようとする。黄天佑の顔をぐっと睨みつけるが、それも無視したまま、

「陳さんは我々の仲間のリーダーのお一人です」

陳と言われた男は黒いシャツを着た目の鋭い男である。さらに、浅田が睨んでいることなど知らぬ風で、

「ここは変わったレストランでしょう。昔の古い住宅のように

見えますが、これは日本時代に建てられた公務員宿舎だった建物
物をレストランに変身させたのですよ」

などとレストランの説明までする。この男は何という悪党だと思
っている」と、

「では早速、中国から持ってきたものをいただきましょか」と
取引の話に入る。黄天佑から言われたのに応えて、前田がアタツ
シユケースをテーブルの上にのせる。中から金印の箱と白と黒
の USB メモリを取り出して黄天佑に渡す。すると、陳建志がノ
ートパソコンを取り出して白の USB メモリを差し込む。そして
あのアメリカ人と同じように金印に拡大鏡を近づけてパスワー
ドを読み取ろうとする。しばらくして見つかったようでもメモ
紙を取り出して、観察しては一字を書き、観察しては一字を書い
ていく。浅田は目をこらして書かれたパスワードを無言で復唱

しながら記憶する。陳建志はそれに気づいていたのかもしれないが何も言わず、メモを見ながらパスワードをコンピュータに打ち込む。するとどうしたのか、怪訝な顔をして中を読まずにUSBを抜き取り、今度は黒のUSBを差し込む。同様にパスワードを入力する。すると今度は中身を読み出し、黄天佑にも画面を見せて一緒に確認しようとしているように見える。十五分くらい二人で読んだ後、

「ではこちらはあんだのだ。でこちらは我々のものようだから確認して連絡する」

陳建志が、黒のUSBを黄天佑に渡し、白のUSBは自分の鞆にノートパソコンと一緒にしまった。

「これで半分は確認できたので今日のところは半分の謝礼だ」
黄天佑が言って持って持ってきたアタッシュケースを前田に渡した。

前田は中を確認してから、

「で、後の半分はいつももらえるのですか？」と訊く。

「陳さんから連絡があったら連絡する」

「えっ、俺らは入札が終わったら一旦沖縄に帰る。それまでにも
らわないといけない」

「まっ、大丈夫だろう。それまでには渡すから少し待っていてく
れ」

「分かったが、ごまかしたら承知しないぞ」とすごんで見せた。

取引が終わって、すぐに「楽埔町」を出てタクシーで万建建設
に向かった。浅田はタクシーの中でパスワードを無言で復唱す
るとともに、先ほどのことを思い返してみた。

―つまり、黄天佑と陳建志は別のグループなのか、あるいはひと

つのグループにふたつの組織があるのか。

―いずれにしても黄天佑の持って行ったUSBのファイルは一緒に渡した金印のパスワードで開けられるが、陳建志の持って行ったUSBのファイルは同じパスワードでは開けられなかった。ということは、陳建志は別の金印かあるいは同類のものを持っているということか。これで白のUSBの中身を見る手段はなくなつた。

昼食を取って早めに午前中と同じ会議室に入って行くと、万建建設の劉旭鎮社長と黄天佑が隅の方で話をしていた。入ってきた浅田を見ると話すのをやめて、

「やあ、浅田さん、久しぶりですな。沖縄の出張はどうでしたか」と黄天佑が先ほど会ったことなどおくびにも出さずに言う。

「いろいろあって死にそうでした」

黄天佑を睨みつけながら皮肉をこめて応える。すると劉社長が「それは大変でしたな、ご苦労様でした。中国にも行かれたようですな、ビジネスでは中国との関係も重要すからな。今後ともうまくやってください」と微笑みをうかべながら言った。なんだか今度のことを知っているような言い方だなと思う。

「それに、明日のプレゼンは浅田さんをお願いするようですな。これは今回の入札の成否がかかっていますからよく練習してやってください」と鋭い顔に戻って付け加えた。

「はい、頑張ります」

午後のプレゼンの練習は朝と同じメンバーで行われ、聞いていた人たちのOKが出たのは三回目であった。浅田は台湾では

このようなプレゼンの練習を徹底してやるということを知った。よほど明日のプレゼンが重要なのだということを知ると同時に責任感を感じずにはいられなかった。帰り際に凜が寄ってきて激励してくれる。

「台湾のプレゼンで、大変なのね。明日は頑張ってくださいよ。みんなで応援しますから」

「僕もこんなにプレゼンの練習をさせられると思ってみませんでした。細かいことでわからなかったら助言してくださいよ」

「もちろんですわ、そのために沖縄から来たんですから」

「ありがとう、では明日の朝、駅で」

凜と分かれてバイクに跨りエンジンをかける前に、美玲にもう一度電話してみようと携帯電話をとる。とそこに「line」のメッセージが入っていて美玲からだった。そこには、

「今、台南」とだけあった。

すかさず「この電話をかけるが呼び出し音が鳴り続けるだけで出ない。何度もかけるが出る気配がない。「今、台南」とはどういうことだ。台南にいるらしいことは分かったが無事なのかどうか。美鈴の顔が思い浮かぶがどうにもならない。一気に不安が全身を覆う。とにかく明日は高雄に行くので台南はすぐ近くである。もう一度、新華実業に連絡して、この事件の中心人物の一人である許会長に会うことはできないかなどと考えるが、いずれにしてもなんとか台南に行って手がかりを探そうと思いつながらバイクを発進させた。

少しでも手がかりがあればと思い、家に帰って記憶してきたパスワードで黒の USB メモリのファイルを見てみようかとパソコン

ンを起動した。全体のファイルをクリックすると、アメリカ人に渡したのと同じA1' A2' A3' B1' B2' B3' C1と七つのファイルが出てきた。前と同じようにC1プログラムを起動して、A1ファイルの頭のコマンドを入れるとすごいスピードでプログラムが流れ、しばらくすると「OUTPUT」というNoteファイルが形成された。前回と同じである。ざっと読むと内容はアメリカ人に渡したものと似たようなものようだ。これをPDFに印刷した後、肝心のB3ファイルを起動させる。しばらくして形成されたアウトプットを読んでいく。尖閣諸島の上陸作戦が書いてあった辺りを丹念に読むが出てこない。とりあえずPDFに印刷する。そして他のファイルを起動させてはPDFに印刷する作業を繰り返した。最初の五個のファイルをもう一度ざっと読み、B3ファイルを最初から丹念に読んだ。しかし、尖閣諸島の件はどこにも見

つけられなかった。つまり、あの黒の USB メモリに入っていたファイルの中身はアメリカ人に渡したものとほぼ同じと思われるが、肝心の尖閣諸島上陸作戦については書かれていない。あの黒の USB は台湾政府の機密部隊に流れるのだとしたら当然そんな物騒な話は書かないかもしれないかと思った。

プレゼン

次の日の朝、他の人らと台北駅で待ち合わせて高雄へ向かった。台湾の高鐵は日本の新幹線車両と同じで二人掛けの席と三人掛けの席が横並びになっている。二人掛けの席に凜と一緒に座る。列車が台北駅を出るとすぐに席を立ってデッキに出て、新

華実業の陳金福部長にもらった名刺の電話番号で新華実業の総務部に電話をした。陳部長は浅田と美玲を監禁した後、金印の在りかを聞き出して取り返そうと台北に向かう途中で浅田が運転中の運転手を蹴倒して車が横転して重傷を負ったとニュースに出ていた。

「你好、私は台湾大学の呉麗華教授の知り合いで浅田玄といいます。陳金福部長をお願いします」

「你好、陳は会社を辞めました。どんな御用ですか？」

「えっ、そうでしたか、お辞めになったのですか。実は新華実業で持っておられる美術品について重要なお話がありました、できましたら許会長にお話ししたいのです」

「えっ、会長にお会いしたいと言われるのですか？」

「ええ、会長は台湾大学の呉教授とお知り合いのはずです。呉教

授の生命にもかかわる重要なことです。どうか会長にお話しただけませんか」

「具体的にどうということですか？」

「申し訳ありません、具体的なことはお会いした時にしか話せませんが、呉教授がすでに会長にお話しした美術品の件で浅田玄という男がぜひお会いしたいと言ってきていると話していただけませんか。お願いします、非常に重要なことです」

「よくわからない話ですね。では連絡はしますが確約はできませんよ」

「ありがとうございます。お願いします」

陳部長が会社を辞めたと言うが、何とか許会長に繋いでくれそうである。

席に戻ると、凜が浅田の顔を見ながら、

「なんか深刻そうな顔をしているわね、何かあったのですか？」と訊いてくる。すぐに返事が来るといいがということとで頭がいっぱいで、

「ああ、なんでもありません」とそっけなく応える。

「あら、何か変だわね。今日のプレゼンは大丈夫でしょうね。入札の成否はプレゼンにかかっているのよ」

「大丈夫です。任せてください」

悪いと思いながらも、凜の話についていく気が出ず、そのまま腕を組んで目を閉じた。

「やはり緊張しているのかもね」

話をするのを諦めて独り言を言って窓の外を見ているようであった。

その後一時間くらいして携帯電話が鳴った。

「你好、浅田です」

さつと緊張して立ち上がり、話をしながらデッキに出る。

「你好、こちらは先ほどお電話をいただいた新華実業の周淑恵です」

「どんなご返事でしたか」

「許会長がお会いになるそうです。あなたのご要望通り今日の夜に自宅に来てくれとのことですよ」

「ありがとうございます。場所はどこでしょうか」

「場所は後でメッセージに入れておきます」

「ありがとうございます」

なんとか許会長に会えそうである。会ったら何か分かるだろうという期待で少し心が和らぐ。その後、宿泊予定のホテルに電話してレンタカーを予約した。

十二時過ぎに左營駅に着いた。高速鉄道には高雄駅というのはなく、高雄の中心から北側に十キロ以上離れたところに左營駅があり、中心部まで行くには地下鉄に乗り換える。中心部にある三多商圈駅で降りて、それぞれ別れてタクシーでホテルに向かった。高雄は台北と比べると熱帯に属することもあり気温が高く、十月後半でも日中は三十度近くになるとともに日差しが強さを感じる。大きな並木が立ち並ぶ四維三路を行くとひとときわ高い建物があり、これが今日宿泊する寒軒国際大飯店である。雑多な低層の建物が続く街並みの中ではひとときわモダンな作りのホテルであった。

昼食を取った後、全員で高雄市政府文化局に向かった。文化局は本来の市政府の建物の近くの高雄市文化センターの中にある。

その文化センターは広大な公園の中にあり、フラットな屋根と大きな柱が周囲に配置された台湾モダンな壮大な建物である。

中に入ると広いロビーの中央にエスカレーターがあり、これを見上げて廊下の奥にある会議室に入った。入口に「高雄超級競技場出價」と書かれていた。出價とは入札のことである。入ったところは待合室になっていて、内扉の中でやっている前のグループのプレゼンが終わるのを待つ。十五分ほどすると前のグループが出てきてそのまま浅田らの顔を見ながら会議室を出て行った。しばらくすると、係の人が中から出てきて、

「次のグループ、どうぞ」と招き入れてくれる。

中に入ると、審査委員が並ぶテーブルと説明者が座るテーブルが向かい合って置いてあり、

「どうぞお座りください」と審査委員席の中央の人物が言って

浅田ら全員が席に着こうとする。

浅田はその中央の人物を見てびっくりした。テーブルの上に審査委員長と名札が出ているのは、あの台湾大学の王猛波教授ではないか。そもそも浅田がこのプロジェクトに入るきっかけを作ってくれた人である。

「你好、」と言って会釈をしたが、教授はにこりとしたただけでも言葉を出さなかった。

二列に向かい合って置いてあるテーブルの奥に大きなモニターがあり、まず万建建設の何志偉部長がモニター画面を操作しながらプレゼンを始める。

「你好、万建建設の何志偉です。まず我々の設計の概要からご説明します。設計のコンセプトですが、高雄が台湾の南の玄関であり、特にこのスーパーアリーナが台湾最大の高雄港を望む位置

に建設されることから、あらゆる人・物を台湾に迎え、そして送り出すゲートを象徴した大きなメモリアルアーチを最大の特徴としています。このメモリアルアーチの高さをこのように高くすることで遠くからでも見ることができ、高雄を象徴する建物になると言えます。．．．．．」

王教授も他の審査委員も黙って熱心に聞いている。十分ほど概要について話した後、

「ではこのアーチを含む屋根構造について日本人の浅田さんから説明してもらいます。浅田さんは、台北のイベントホールの設計もされた吊構造の専門家です」と浅田を紹介する。浅田が席を立ち緊張した面持ちで話始める。

「ご紹介いただきました浅田です。屋根構造はケーブルネットと屋根材でできた膜構造で、膜の主構造であるケーブルは屋根

の背骨にあたるパイプアーチに固定され、周辺に延びていきます。このスパイプアーチをこの大アーチで吊り下げるようにして支えています。．．．．」

モニター画面を指し示しながら説明していく。浅田のプレゼンは二十分ほどで終わり、代わって何部長が内部構造について説明を続ける。このプレゼンが三、四十分ほどかかった。その後、質疑応答に入り、最初に王教授が浅田を見ながら質問する。

「台湾のような大型台風が襲来するようになるところにケーブルを使った膜構造が適当な構造なのかどうか、耐風安定性に関してどのように配慮をされたか聞かせてください」

「はい、要点は風荷重に抵抗できる張力をケーブルにプレストレスとして最初から導入しておくことによって風による変位を最小限に抑えることです。今回の設計では風速七十メートルに

対しても十分に変位を抑制できるようにしています」

「それほど大きなプレストレスを与えたら大きなケーブルが必要になり、それに伴って見た目以上に大きなアーチやアンカーが必要になるということにならないかね」

「風荷重の大きさに比例してプレストレスの量が決まりますので、スパインアーチの高さを低くしてなるべく平坦な屋根にすることで風荷重の大きさを抑えるようにしています」

「しかし、あまり平坦な屋根では逆に振動を引き起こす可能性があるのではないかね」

「現在、動的解析をして振動が起こらないことを確認していますが、さらに確実にするために詳細設計段階で風洞試験をするように計画しています」

「分かりました。では他の質問をお願いします」

王教授がそう言って浅田への質問は終わり、他の審査委員の顔を見た。王教授の隣の審査委員が内部構造についていくつかの質問をし、さらに施工方法についての質問などがあり十分ほどで質疑応答が終わった。浅田にとっては予想していた質問だったのであれでよかったのではないかと思った。会議室を出たところで何部長も、

「浅田さん、」苦勞さん、プレゼンも質疑もうまくいきました。全体の印象としてはよかったと思いますよ」と言ったが自画自賛のようにも聞こえた。

また、凜もそばに寄ってきて、

「浅田さん、よかったと思うわ。私の出番がなかったけどね」と、にこりとして言った。とはいえ、あれだけ万建建設の人たちと仲良くしていた王教授が審査委員長とはどういうことかと思わず

にはいられなかった。

許会長

プレゼンが終わって全員で街に出て食事をしようという誘いを断ろうとしているところに美玲からメッセージが入った。

「助けて」と一言だけであった。

一瞬にして身が凍るような戦慄が走る。これはもう誰かに捕まったか、命の危機にさらされていると思う以外にない。一刻の猶予もない。予約していたレンタカーでさっそく台南に向かった。新華実業の女性からのメッセージによると許会長の自宅は、あの新華博物館から海岸のほうに行ったところにあるようである。

ホテルを出て高雄関帝廟の近くのインターチェンジから国道一
号線の高速道路に入る。台南までは一〇〇キロ近くある。小高い
丘と農地の風景が徐々に夕暮れに染まっていく。台湾海峡に夕
日が沈んだころ台南の関廟区のインターチェンジから関廟線に
入って西の方角に向かって走る。いたるところに関羽を祭った
関廟があるのだと思う。一〇キロほど行ったところで高速道路
は途切れ海岸線に沿った一般道に出る。この辺りを黄金海岸と
いうらしい。新華実業の女性の話では許会長の自宅はこのあた
りにあるということだ。送ってきた住所をGoogle Mapに入れる
と、近くの丘の上あたりを示す。これに沿って丘を登っていく。
すると白色の天然石を精巧に積み上げ、その上に小さい瓦屋根
を付けた高い塀が見え、さらに進むと塀がひとときわ高くなっ
たところ、四角くくり貫かれたような門があった。表札は出てい

ない。車を止めてインターホンを鳴らす。インターホンの向こうから、

「どちら様でしょうか？」と女性の声が聞こえる。

「許会長のお宅でしょうか？」

「そうです」

「今夜、許会長にお約束をいただいている浅田玄です」と言う土木製の門扉が開いた。中に入ると舗装された道が続いており、それを両側の街灯が照らしている。道の両側は広い庭が広がっており、ところどころにある街灯が緑の芝生を映し出している。曲がりくねった道を二〇〇メートルほど行くと台湾の昔風の屋根瓦の白い邸宅が見えた。駐車スペースに車を止めて玄関の呼び鈴を押すとすぐに扉が開いて、四〇代くらいかと思われる背の高い女性が出て、

「どうぞ、お入りください」と招き入れてくれる。

玄関でスリッパに履き替えて広い応接室に通された。壁にはたくさんの西欧絵画が掛けられており、大きな棚にはいろいろな美術品が飾られている。部屋の中央に重厚かつクラシックなソファが置かれており、その長いソファの片隅に座って待っている、先ほどの女性と一緒に小柄な老人が入ってきた。浅田は立ち上がって老人の前に進み出る。すでに九〇歳を優に超えているはずであるが、矍鑠（かくしゃく）とした物腰で口を開いた。

「あなたが日本人の浅田さんかな。私はたくさんの日本人の友人がいます。あなたは台湾で何をされていますか」

「浅田です。お目にかかれて光栄です。私は台北で建築の仕事をしています。今日は会っていただきありがとうございます」

「まあどうぞ、お座りください」

ソファーに向かい合って座ると、女性が、

「何を飲まれますか？」と訊く。

「ああ、では烏龍茶をください」

一般的な台湾茶は烏龍茶である。それを聞いて女性が出ていくと、すぐに本題について訊かれた。

「それでどんな御用でしたかな」

ひよっとして許会長が今回の拉致事件に関与しているかもしれないと考え、とりあえず呉教授と美玲の行方が分からなくなっていることを話す。

「はい、実は会長もご存じの台湾大学の呉麗華教授が行方不明なのです。それに僕の友人の女性も行方がわからないのです。：」
と言うと、次の言葉を遮るように、前に身を乗り出してきた。

「なにっ、呉さんがいなくなった？ 実はあんたのこともあんたの友人の林さんのことも呉さんから聞いていたよ。どういふことか話してください」

本当に驚いている様子を見ると、拉致事件には関与していないようだとの思いが強くなり、金印を拾ったことから話そうとすると、

「その話は呉さんから聞いている。それでいつから呉さんがいなくなったのですか？」
本当に知らないようである。

「おそらく一週間くらい前からではないかと思えます。僕は沖繩に行っていましたして林さんが代わって探していたようなのですが、その林さんも誰かに拉致され、今、命の危機が迫っている可能性があります」
と、

「なにつ、それはどういうことだ」

浅田は、呉教授から美玲にあった最後の話をすると、許会長は、「わしのところには来ておらんがな」と言って腕を組んで考え始めた。しばらく考えた後に、驚くことを言った。

「実はな、実際にわしが買った金印は、わしのところにあるんだよ。ここから少し南に行ったところにある鄭成功の安平城跡から出土したと言われる物だが実際にはどうかわからん。そこでそのコピーを作って展示用に博物館の倉庫に置いてあったのが一時なくなったことがあったが今は元に戻っている。ただそれ以来そのコピーのことは郭館長しか知らん」

なんと本物の金印は許会長自身が持っていると言うのだ。

「では僕たちが拾った金印はどういう物なんでしょうか」

「それはおそらくコピーのコピーではないかと思う。呉さんが

二週間くらい前に持ってきたのだが、」と言うのを聞いて、

「えっ、呉先生は二週間前にここに来られたのですか？」と訊き返す。

「そうだ、ここにその金印を持ってきたので、本物がここにあることを話して、ここにあるものと比較してみた。するとかなり精巧にできたコピーだということが分かった。ただ呉さんがわしの金印を貸してほしいと言う。年代を調べるなどしてどうしても深く調査したいと言うので、呉さんはわしの金印と持ってきた金印の両方を持って帰ったのだが、今の話だとそのコピーと思われるものが何やらいわくつきのもだったということだな」

「えっ、呉先生は金印を二つ持って行かれたのですか」

「そうだ、何とか呉さんとあんたの彼女を見つけないといかな」

なんと呉教授は本物の金印とコピーの金印のふたつを持っているのだと言う。

「話は変わりますが、陳金福部長はどうなったんでしょうか？重症だったとニュースで見ましたが、」

「最近退院したとは聞いたが、あんたやあんたの彼女にひどいことをしたと呉さんから聞いた後、すぐに首にしたから今どうしているか分からん。すまん事をしましたな、申し訳ない」
許会長が深く頭を下げた。

「あの時、命に別状ないと聞いて安堵してはいましたが、」

「新華博物館や新華実業の美術品の調達を一手にやっていたのが陳金福で、わしが調べたところでは、特に海外調達をすることが多かったのだからいろんな手を使って私服を肥やしていたようだ。密輸に手を染めていた可能性もある。ただわしとしては警察沙

汰にすると膨大な美術品に捜査が及ぶ可能性があるもので、即座に首にしたが警察には言っていない」

ここまで話をして、会長は陳金福が情報の売買に関与していたことは知らないようだと考え、

「しかし、これは国家の安全に関する情報の売買に関係しているかもしれませんが。ひよっとすると周辺の国の安全が脅かされるようとしているのかもしれませんが。陳金福の行方について何かご存じありませんか」

と言うと、驚いた様子で、

「なにっ、それはどういうことだ。台湾の安全に関係するということか」

「いえ、これは可能性の話で詳しくはわかりません。ただ先ほど申し上げた呉教授のメッセージに『金印に何か暗号のようなも

のが刻まれていた』とありました。この暗号が密輸以外に使われた可能性があるので」と言うのと、また腕を組んで考え始める。そして、

「あんたの話の根拠は知らんが、台湾には中国共産党と通じている連中がいる。陳金福がそいつらに利用されたという可能性がないこともないな。とにかく陳を見つける必要があるのだな」

「はい、何か心当たりはありませんか。呉さんにも、林さんにも危機が迫っています」

「わしには思い当たる所がないが、あんたらが陳に監禁されたというところはどうなんだ。陳は警察に追われているわけではないので、まだ同じところを使っているのではないか」

そう言われると、陳金福は新華実業を首になっただけで警察の追及を受けているわけではなさそうである。確かにあの丘の上

の別荘のような建物は周りに家屋もなく林に囲まれており、密輸グループの恰好の隠れ家として使っている可能性がある。

「そうですね、早速行ってみます」と言って立ち上がる。

「まあ、少し待ちなさい。あんたがひとりで乗り込んでもたちまち捕まってしまう。本当は警察に頼むところだが新華実業の内部のことで收拾したい。わしの警護員を連れて行きなさい。今回のことはわしの責任でもある。少し待ちなさい」

そう言って先ほどの女性を呼んで指図した。しばらくすると、濃い青色の半袖シャツ姿の男が入ってきた。がっしりした体躯の男である。

「楊、今からここにいる浅田さんに協力して拉致されている二人の女性を救出してもらおう。詳細は今から浅田さんと相談してくれ」

「浅田さん、彼は以前、台北で要人警護をしていた男で腕が立つ。きつと役に立つ」

「ありがとうございます。実は、僕一人では心細くてどうするべきか迷っていました。本当に助かります」

楊と呼ばれた男がどのくらい頼りになるかは分からないが、気持ちとしては心細さと恐怖心がぐっと小さくなった。

「楊品希です。話を聞かせてください」

「浅田です。今日は力を貸しいただき、本当にありがとうございます」

許会長が出て行った後、どういう状況が想定されるかを浅田が説明し二人で手筈を話し合った。

楊品希が浅田の車の助手席に座り、浅田が運転してあの丘の

上の別荘を目指した。あの時は若い男に乗せられて成功路にあったホテルを出てすぐに南横公路という道路をまっすぐに東に向かつて行ったはずである。浅田はすぐに関廟線高速道路に入り、一号線高速道路で北上して二つ目の出口で南横公路に降りた。

三、四十分も走ると道路の照明灯が少なくなると同時に周辺の住宅の明かりも少なくなっていく。さらに四、五十分ほど行ったところでヘッドライトが右側に見覚えのある登山産業道路の標識を見つけた。産業道路とは名ばかりで車一台が通れるほどの山道である。照明もなく木々に囲まれた山道を三、四十分ほど登ったところで、丘の上に長い生垣の先に石柱でできた門が見えた。完全に記憶がよみがえった。

門を過ぎたところの道路際の木々の間に車を停めて、二人で

門に忍び寄る。石柱の門の扉は閉められており、入ることができない。すると楊品希が石柱と生垣の間を利用して生垣の小枝に足をかけ、手で石柱を掴みながらあつという間に生垣の内側に転がり込んだ。

扉が開かれて浅田が中に入り、庭に植えられた木々の間の暗闇を縫うように通って一〇〇メートルほど先の建物に忍び寄る。建物には明かりがついており、中に人がいることが分かる。大きな家であるが、もし二人が監禁されているとしたら以前自分が監禁された物置のような部屋だろうと見当をつける。二人は護身用の警棒を持って部屋の明かりに照らされないよう中腰になり忍び足で家の周囲を回る。木々が迫っている家の裏側に出たところで出入口があるのが見えた。楊品希がドアノブを回してみるのがロックされている。すると折りたたみ式の十徳ナイフの

ようなものを取り出し、いくつかの機能の中から細い棒状で先が曲がったものを出して鍵穴に突っ込んで開錠しようとする。ものの一、二分でドアが開いて、用心しながら照明の点いていない薄暗い廊下を進む。

とその時、二人の右側の部屋のドアが開き、人が出てきた。二人と目が合って「あつ、」と男が叫ぶ前に楊品希の警棒が男の頭を強打していた。気を失った男を二人で男が出てきた部屋に引きずり込んで部屋のドアを閉めた。男に見覚えはなかった。さらに廊下を進んで見当をつけていた部屋の前が出る。ドアノブを回すが開かない。先ほどと同じように楊品希が十徳ナイフの棒状のもので開錠する。中に入ると窓から月明りが差し込み、ベッドと小さいソファが置かれているのが分かるが誰もいない。さらに隣の部屋を開けてみるが誰もいなかった。ひよっとして監

禁場所はここではなかったのかという不安が湧いてくる。仕方なくその部屋を出ようとしたときである。外で話し声が聞こえた。二人はさっとドアの内側に身をおいて話声に耳を澄ます。

「この人質は何回見てもいい女だぜ、可愛がってやろうぜ」

「今日はボスも陳さんもいなしな」

「宇翔はどうしたんだろうな。さっき部屋に酒を取りに行った
ままだが、」

「ひとりで酒を飲んでいるんじゃないのか。こんな面白いことをしようとしているのにな」などと言いながら話声が遠のいていった。

外の男らは先ほどの男の部屋に向かって行ったのであろう。そして話していた女とはひよっとして美玲のことではないか。だとすると早く見つけなければと焦る。部屋を出ると廊下の照明

が点いている。隣の部屋を開けるがここも空であった。時間が切迫している。さらに隣の部屋を開けようとするがドアのロックが掛かっている。楊品希が十徳ナイフで開錠して照明を点ける。中にはソファーや椅子が雑多に置かれ、ソファーの上に女性が縛られて横になっている。

「美玲！」叫ぶように声をかけた。

「ああっ、玄」

声を上げて美玲が起き上がろうとする。

「ああ、美玲、無事だったかい。ああ、よかった」

縛られた縄をすぐにほどいて抱きしめた。美玲の体が震えているのが分かり、さらに抱きしめる。

「おい、ずらかるぜ」

抱き合って離れない二人を見て楊品希が言ったのを聞いて、美

玲から離れる。

「呉先生は？」

「先生はここにはいないわ。他のところに連れていかれたわ。．．．」

「話はあとで聞くから、まず逃げよう」

そう言った時、バタバタという足音がしたと思った途端、ドアが開いて三人の男が入ってきた。

「あっ、てめえ、この前の、くっそう、よくもやってくれたな」と言ったのは、この前の時に運転手をしていた若い男であった。もうひとりもこの前一緒にいた男で、後の男は先ほど楊品希に殴られて昏倒した男であった。三人とも長いナイフを持っている。

「お前ら、無事でよかったな」

浅田が言った途端、運転手の男が浅田の体をめがけてナイフを突っ込んできた

「なにを、この野郎！ よくもやってくれたな」

突っ込んできたナイフを一瞬でかわして、伸縮式の警棒を振り伸ばして横一線に振ると男の顔に当たって血が吹き飛んだ。と
その時、楊品希が椅子を持ち上げて、他の二人をけん制しながら高窓になっているガラス窓に向けてその椅子をぶつけた。「ガシヤーン」と大きな音がして窓全体が壊れた。

「早く！」

楊品希が美玲に向かって大声で叫ぶ。美玲が窓のそばのテーブルから窓を乗り越えようとする。

「くそ、逃がすな！」

男たちが、美玲に掴みかかろうとする。これを楊品希が足で蹴倒

すが、もう一人がナイフで突っ込んでくる。突っ込んできた男の腕に楊品希の警棒が当たってナイフが床を転がっていく。その間に美玲が窓を乗り越えて外に飛び降りた。

運転手の男は、頬から血を流しながら執拗にナイフを振って浅田を追い詰めてくる。警棒で対抗するも、このままではやられると思った途端、楊品希の警棒がナイフを叩き落した。

「行け！」

楊品希が叫んだのと同時に窓を飛び越える。それに続いて楊品希も暗い庭に飛び出してきた。

「走れ！」

浅田がすでに前を行く美玲に向かって叫び、三人で門に向かって全力で走る。後ろから男たちが追いかけてくる。暗い庭の古株につまづいて美玲が大きく前に飛ばされるように転んだ。

「大丈夫か？」

すぐに男たちが近づいてくる。

「ああ、だめだ」と思った瞬間、

「バーン、バーン、」と乾いた音が二回響いた。後ろを見ると、楊品希が拳銃を構えている。これを見て男たちも走るのをやめ、家に向かって逃げる。このすきに美玲を抱えるようにして門に急いだ。美玲が車にたどり着くための時間を稼ぐためなのか、楊品希は門を出るときに、さらに五発の銃弾を少しづつ間を置いて放った。

美玲を乗せた車は速度を上げて山道を下っていく。バックミラーに追手の車のヘッドライトは映らない。

「楊さん、本当にありがとう、助かりました。無事に美玲を助け

出せました。ところであんた、拳銃で男たちを撃ち殺すつもりだったんですか？」

浅田が正面を見ながら訊く。

「いや、万一のことを考えて拳銃を持ってきた。あいつらを狙って撃ったんじゃない。威嚇のために、当たらないようにはるか上を狙って撃った」と応えた後、

「それで今からどうするんだ」

今のところ、まだ追手の車は見えないが安心はできない。

「まずこの山道を下ります。話を聞いていたら運転に集中できません。南横公路に出てから美玲にどういうことか聞きます」

南横公路に出て、美玲が話したところによると、

呉教授が「妙な暗号のような文字が金印に刻まれている」とメッセージを残して音信が途絶えた。美玲は浅田からこの件に首を

突っ込むなど言われていたが、今回のことは自分の責任でもあ
るとの思いが強くなるとともに居ても立っても居られなくなり、
呉教授を探そうと台南に来た。手がかりは許会長だろうと考え
て、まず新華博物館に行つて郭玲玲館長に会つた。事情を話して
どうしても許会長に会いたいと言つた。すると郭館長は、誰かと
電話で話をした後に、「分かりました。では連絡をして会長の自
宅までお送りします」と言つて車の手配をしてくれた。車に乗り
込むと運転手ともう一人、目の鋭い男が乗っていた。車は新華博
物から北に向けて走り出し、途中でこの前逃げ出してきた南横
公路に入り、どんどんと東に向けて走つていく。不安になり、
「どこへ連れていくつもりよ」と声を上げると、

目の鋭い男が睨んで、「黙っているろ！」と脅し、拳銃を出した。
もう体が震えてそれ以上何も言えなかつた。結局、この前監禁さ

れた丘の上の館に連れ込まれた。

中に入ると、そこに呉教授がとらえられていた。

そして呉教授によると、

本物の金印とコピーの金印を許会長のところから持ちかえった後、比較のために精巧な拡大鏡で調べてみるとコピーの方に何か数字とアルファベットの暗号のようなものが刻まれているのに気付いた。美玲から聞いていた話から何か悪事に関係している可能性があると考え、これについて許会長に心当たりがないか確認しよう思いながら大学から家路に着いた。その途中で男らに車の中に連れ込まれて、

「金印を出せ」と脅された。

「そんなものは持っていない」と言つと、

「隠しても無駄だ。お前が林美玲と日本人から預かっているの

は分かっている」

そう言つて、拳銃を突き付けられた。もう恐ろしくて、恐ろしくて、

「分かつたわ、金印は大学の中よ」と正直に応えた。夜中で誰もいない研究室まで連れられて行かれ、

「早く出せ」と脅されたが、暗号のことが頭に浮かび、咄嗟に本物の金印を渡した。しかし、

「これが本物かどうか分かるまで一緒に来てもらうぜ」とあの館まで連れていかれた。ところが一日ほど何も起こらないまま過ぎたが、二日目になつて美玲が連れてこられ、一緒に監禁された。

そして今日になつて新たな男たちが加わり、入つて来た途端に、えらい剣幕で詰め寄つてきた。

「おばさん、これは俺たちが探しているものじゃない。お前、他にまだ金印を持っているんじゃないのか」

「私は、渡したもののしか持っていないわ」

「じゃあ、お前がもう一つ持っているのか」

今度は美玲に向かって訊いた。

「私があれば以上持っているわけないでしょ」

女二人にからかわれているように感じた男が怒り始める。

「俺たちをなめているのか！ よしまず若いほうから痛い目に合わせてやれ」と美玲に掴みかかった。呉教授は、それを見て恐怖が蘇る。

「やめて！ 分かったわ。私がもうひとつ持っているわ。その人には手を出さないで」

「くっそう、嘘ばかりつきやがって、でどこにあるんだ！」

「私の研究室よ」

「本当だろうな、もしなかったらこのお嬢さんに死んでもらうぜ、分かったか」

そして呉教授を何人も男たちが連れて行った。それで館の中が手薄になった隙に「助けて」と自分の携帯電話から浅田にメッセージを送ったのだと言う。

「ということは呉先生が連れていかれてからそんなに時間がたっていないな。いつごろ出ていったんだい」

「あなたたちが来るかなり前よ。夕方近くだったかしら」

「じゃあもうしばらくすると台北に着いているかもしれない。もし呉先生が金印を渡してあいつらが探しているものだったら先生の命が危ない」

「よし、このまま台北に直行しよう。俺も付き合っぜ、急げ！」
楊品希がそう言ってくれた。

浅田の運転する車は、真夜中の高速道路を猛スピードで台北に向かって疾走していく。

呉教授の研究室

美玲が疲れて後部座席で眠りに落ちそうになった頃、車は台北市内に入って行った。やっと夜が明けて人々が動き出そうとしている早朝である。すでに呉教授が殺されているのではないかという思いが三人の頭をかすめては消えて、そうでないことを祈りながら呉教授の研究室へ急いだ。

早朝で誰もいない静かな大学構内は、しばらくして行き交う

多くの学生たちの話声や足音で溢れる前の束の間の休息を静かに過ごしているように見える。車は誰もいない構内をゆっくりと呉教授の研究室に近づいていく。まだ密輸グループの一味が残っているかもしれない。

朝日が当たらず、ひんやりとした古い建物の階段を用心しながらゆっくりと上がっていく。人影はない。

廊下の先に研究室が見えた。研究室のドアが開け放たれているではないか。近づいても人の気配はない。ゆっくりと研究室に入って、さらに内側の教授の部屋に入る。誰もいない。

「何ということよ！」

部屋の中を見て美玲が叫ぶ。

部屋の中は泥棒が入ったように本棚がひっくり返し、本や資料が散乱している。ここで何があったのだろうと三人とも呆然と

立ちすくむ。しばらくして、楊品希が、

「少なくともここで探していたものがすぐには見つからなかったということだ」と口を開いた。

「ということはあの人が金印を手に入れていないということよね。つまり呉先生は生きているわ」美玲が拙速に言う。

「しかし、金印が見つかったとしたら、どこかに連れていかれて殺されているかもしれん」

楊品希が美玲の期待とは逆に無慈悲なことを言う。

「そんな、．．．」

美玲の目には涙が浮かんでくる。浅田はそんな美玲の肩を抱いて、

「まだそうと決まったわけじゃない。生きているとしたらどこに連れていかれたかを考えよう」と言ってから、

「この部屋に何か心当たりがあるかもしれないから、この散乱している資料を片付けながら探してみよう」と提案した。

「そうだな、他には案がなさそうだな」

楊品希も美玲が涙を浮かべているのを見て同意した。

三人は散乱している資料や本を丁寧に見ながら空になっている本棚に戻していく。教授の机も引き出しが開けられ、中のものが周りに散乱している。これも引き出しの中をよく見た後に、散乱しているものを丁寧に調べては、元あったであろうところに納めていった。きちんとした目標物があるわけではなく、漠然と金印と関係のありそうなものというだけでは容易に見つかるわけはない。一時間ほどかけて探したが、それらしきものは見当たらない。

「ここまで探しても見つからないなら無理そうね」

美玲はあきらめ顔で別のことを言った。

「もうすぐに学生たちが出てくるから彼らに訊いたら何か分かるかもしれないわ」

三人は学生たちが出てくるまでその部屋で待つことにしたが、疲れがピークに達していたせいでテーブルにもたれかかると、すぐに寝入ってしまった。

数時間経った頃であろうか、

「あなたたち何よ！」と叫ぶ声で目を覚ます。数人の女子学生がこちらを見ている。

美玲が目をこすりながら、

「ごめんなさい、驚かせてしまったわね。私は「建築構造科」の助理教授の林美玲です。あなたたちとはここで一、二回会ったことがあるはずね」と言うと、

「ああ、林先生、おはようございます。朝早くからどうされたのですか」と女子学生の一人が美玲のことを覚えていた。

「私たちは呉先生と連絡が取れなくてこの研究室に来てみたのよ。あなたたち何かご存じない？」

「先生は一昨日までお休みの予定でしたが、昨日も出てこられませんでした。おそらく、今日は出てこられると思います」

「そう、でお休みされている間にどこに行くかとか、何か話されていなかったかしら？」

「どこに行くかとは言われませんが、昨日までに帰ってこなかったら小包を送ってほしいと頼まれましたので、昨日の夕方送っておきました」

「えっ、それはどんなもので、どこに送ったの？」

「十センチくらいの小さなもので許建良さん宛てでした」と言

うではないか。

つまり、密輸グループがここに来た時にはすでに金印は許會長宛てに発送されていたのだ。ということは、連中はまた台南に急いで引き返し、許会長の自宅に押し掛けたと思われる。これを聞いて、楊品希がすぐに會長宅に電話をする。呼び出し音がしばらくした後、留守電に繋がってしまう。しばらくして再度かけると留守電になってしまう。

これはすでに一味が會長宅に押し入っている可能性がある。

「すぐに台南に戻るぜ。車を貸してくれ」

楊品希がキーを渡してほしいと手を差し出す。

「分かりました。僕も行きます」

すると、美玲も声を上げる。

「私も行くわ」

「だめだ、これ以上美玲を危ない目に合わせられない」

「玄が長いこと沖縄に行ってしまったってどれだけ不安だったか。もう一瞬も離れたくない」と言っけて目を涙でいっばいにする。

「無理を言わないでくれ。分かってくれないか」

「いやよ、呉先生のごことは私が原因だったのよ。それに、コンピューターは私の方が得意よ。絶対に役に立つわ」

台北に来る間に、呉教授の言っていた金印に刻まれた暗号のよなものは実は機密情報のファイルを開くためのパスワードだったと伝えていたのだった。

「何か難しい話が絡んでるようだ。その役に立つのだったら連れていけ。俺が守ってやる」と楊品希が先に歩きながら言う。

これに応えるように、どんどん歩いていく楊品希に美玲が小走りですんでついて行ってしまふ。後ろから浅田が追いかけるが、

先に二人が車に乗り込んでしまった。この勇ましい女性は言い出したら止められないかと思いつながら、

「絶対に自分から危ないことをしないでくれ」と言うのが精いっぱいであった。

再び許会長の邸宅で

今度は楊品希が運転したのだが、夜中と違い交通量が増えてスピードを上げられず、台南市内に入ったのはすでに午後三時近くになっていた。さらに南に向かって車を飛ばしていると電話がなった。金城凜からであった。

「浅田さん、どうしているのよ。昨日から電話も通じないし、」

「ああ、すみません。どうしてもはずせない用があつて失礼しました」

「そう、でもグッドニュースよ。私たちが入札に勝つたと、もうお昼過ぎに連絡があつたのよ。今夜はお祝いパーティーよ。早くホテルに帰ってきてくださいね」

「そうですか、それはよかつた。おめでとうございます。ただ、まだ僕の方の用事が終わっていませんので終わったら連絡します」

「そう、仕方ないわね。でも早くいらしてくださいね。それとすぐに着工式をするそうよ。社長や専務も来るので私たちはこのままその準備をするつもりよ」

「それはまた急な話ですね。いつ行われるのですか？」

「十一月一日よ。あまり時間がないから忙しいわよ」

「分かりました。僕もできる限りお手伝いします」

車は関廟線高速道路を通過って黄金海岸に出た。海岸道路から丘の上の許会長の邸宅を目指して上がっていく。すると、楊品希は邸宅まで数百メートルくらい手前でスピードを落とし、道路際の木々の中に車を突っ込んで停めた。

「すでに家の中に敵がいる可能性がある。屋敷の裏側に地下通路があるからそこから侵入する。林さん、あんたは連絡係としてここで待っていてくれ。携帯の電源を入れておいてくれ。もし何かあれば連絡する」

楊品希と浅田が雑木林の中に入って行った。美玲は強い口調で言われ、仕方なくそれに従って車の中で身を潜めた。

林の中をしばらく行くと瓦屋根を載せた白い塀が見え、塀沿いに屋敷の裏側へ向かう。すると塀のすぐそばに小さい小屋が

見え、これにゆっくりと近づいて行く。

「この小屋の中に地下通路の入口がある。これは万ーのための避難通路なんだ」

木製の扉を開くと中には古くなった家具などが雑多に置かれてある。その中の大きな古いソファアールをずらすと、床に木製の蓋があつた。蓋を開けると階段が下の方に延びており、階段を下りたところにあつたスイッチを入れると所々にある小さい照明が点き、薄暗いが中の方が見えるようになった。通路は、幅が六、七十センチほどで高さも浅田がかがまないと通れないほどの小さいものであつたが、コンクリート製で頑丈そうに見える。楊品希はどんどん進んで行き、行き止まりから上に上がる階段に来たところ浅田を振り返った。

「この上は食料倉庫になっている。上がったら俺が会長を探す

から倉庫の中で隠れていてくれ。見つけたらとりあえず会長をここから逃がす」

倉庫の床蓋をゆっくりと上側に押し開ける。中は電灯が点いておらず真っ暗であったが、地下通路からのわずかな光を頼りに出口の扉の横にあったスイッチを押すと照明が点き、倉庫の中がパツと明るくなり、食料品だけでなく調度品などが雑多に置かれたスペースであることが分かった。

楊品希は食料倉庫の扉を開いて一人で外に出て行った。浅田は呉教授のことが心配であるが不慣れな邸宅の中でもあり、言われた通り倉庫の中で待機することにした。

楊品希は倉庫を出ると、厨房、大食堂を抜けてメインリビングルームへ通じる廊下を慎重に進んで行く。廊下の端からメインリビングルームを覗くと、五、六人の男がソファーに座って何か

深刻そうに話をしている。リビングルームの端に二階へ上がる階段があるがそこに行きつくまでに見つかってしまふ。もう一度厨房まで引き返して、大食堂と反対側にある家族用の食堂に入り、その横にある家族用のリビングルームを覗く。そこにも数人の男がいて話をしている。仕方なく厨房に戻り、外に出て外階段から二階に上がることにする。外階段を上がって扉を開けようとしますが鍵がかかっている。台南の山の中の建物に忍び込んだ時と同じく十徳ナイフの棒状のものを取り出して鍵を開けた。そつと中を覗くと長い廊下があり、両側に客室が並び、その奥に客用の応接室がある。応接室の横の部屋の前に二人の男が立って見張りをしているようである。楊品希は足音がしないように走って二人の男に近づく。

「なんだ！」

男たちが気づいたと同時に楊品希の体が飛んでいた。そのまま楊品希の両腕が二人の首に巻き付き、二人を床に押し倒す。倒れた瞬間に一人の男の顎に右拳があたり、もう一人が立ち上がるうとした瞬間、男の側頭部に左の回し蹴りがヒットする。一瞬間に、二人が気絶して床に転がった。

二人の男がガードしていた部屋の扉を開く。中には三人の女が椅子やベッドに腰を下ろしていた。

「あっ、楊さん、・・・」

楊品希の顔を見た途端、二人の女が大声で話そうとするのを押しとどめて、小声で訊く。

「許会長は無事か？ 会長はどこにいるか分かるか？」

二人の女はこの邸宅の家政婦である。年齢は二人とも三十代か四十代前半であろうか。涙を浮かべながら小声で話す。

「会長さんは下のリビングか書斎ではないかと思いましたが、男たちが突然家に入ってきてこの人を連れてきたのよ。しばらく下のリビングで、大声で何かを問い詰めていたけど、会長さんをそのまま残して、私たちはここに連れてこられて閉じ込められていたのよ」

「分かった、では、あんたが呉先生ですか」

椅子に座っているもう一人の女に向かって訊いた。

「ああ、はい、そうです。あなたは？」

「俺はここで会長の警護をしている楊です。林さんと浅田さんも近くに来ています。必ず助けに来ますからしばらく待っていてください」

そう言って部屋を出たのだが、そこに、先ほどの格闘の時の物音を不信に思った男たちがリビングの階段を音を立てながら上が

つてきた。すぐに目が合った。

「なんだ、お前！」

男たちが駆け寄ってくる。と一瞬、間をおいて「バーン」と銃声が響いた。

楊品希が威嚇のために拳銃を発射したのだ。男たちはびっくりして立ち止まり、ゆっくりと後ずさりして階段を下りていく。楊品希も拳銃をかまえながら男たちを追うように階段を下りていく。拳銃の音を聞きつけた他の部屋にいた男たちも集まってくる。「バーン」と楊品希の拳銃が再び発射され、集まってきた男たちはどっと身を伏せてソファアの陰などに隠れる。

「会長はどこだ！」

大声を上げる。とその時、「バーン」と再び拳銃の音が響いて楊品希の体が階段から転げ落ちる。転げ落ちた楊品希はそのまま

銃声のした方に向けて拳銃を発射し、隣の家族用リビングに走り込む。それを阻止しようとしてさらに弾丸が何発も飛んでくる。かろうじて隣のリビングに逃げ込み、ドアの横の壁に隠れて応戦するが、敵の弾丸の数がどんどん増えて壁にも弾丸が貫通し出す。発砲しながら、何か盾になるものはないか部屋の中を見回すが見つからない。とその時、遠くの方から大声が響いてきた。

「もう無駄だ、助けてやるから出てこい！ 許会長はここにいろぜ」開け放たれたドアの横から覗くと男が許会長を片手で掴みながら頭に拳銃を向けている。

「分かったら、まず拳銃をこちらに投げろ！」

楊品希は許会長が無事であることが分かり、ここは一旦、投降してチャンスをうかがうことにしようと考えて、言われた通りに拳銃を投げ出した。投げ出した右腕から血が滴り落ちている。二

の腕を弾丸が貫通したようだ。拳銃を投げ出すと同時に男たちが掴みかかり、広いリビングに引きずり出される。と同時にパンチが顎に炸裂して後ろ向きに倒れる。床には撃ちあいで壊れた棚のガラスなどが散乱している。

「お前、会長のガードマンだろう。どうやって入ってきた？」
浅黒い顔をした黒シャツの男が鋭い眼光で睨みつけながら訊く。

「会長から手を放せ」

「お前、自分の立場が分かっていないな。分かせてやれ！」
それが合図になったように、数人の男が倒れている楊品希の腹や頭を狙って蹴り込んできた。しばらくして気が遠くなっている。

浅田は食料倉庫に身を潜めていたが、しばらくして「バーン、

バーン」という拳銃の音が何度も聞こえてきた。咄嗟にスイッチを押して電灯を消し、音がしないようにして外を窺っていた。拳銃の音が聞こえている間は楊品希が撃ち合いをしているのだと想像して身が震えるのが分かると同時に、居ても立っても居られないような長い時間であった。そして、拳銃の音がやんだ。楊品希が殺されてしまったのかと思ってしまう。としたら、これからどうしたものかと思案するが、邸宅の間取りや様子が分からない現状で、一人で呉教授を助け出せるとは到底思えない。とは言え、もし楊品希が生きていたら必ず戻ってくるだろう。しばらくこのまま身を潜めているかと思っていると、真っ暗な部屋に少し明かりが漏れた。床にある地下通路の蓋が開いたのだ。ぎよっとして見ると、美玲が穴の中から顔を見せた。

「美玲、なんで来たんだ」

顔をしかめて小声で叱るように言った。

「だって、私を一人にしておいて、もし私だけが捕まったらと思うと不安で仕方なかったのよ。だからあの後、あなたたちの後をつけたら裏の小屋に入って行くのが見えたわ」

「もう仕方のない人だ。楊さんが先に一人で出て行って、どうなってしまったか分からないんだよ」

先ほど拳銃の撃ち合いがあり楊品希が無事なのかどうかも分からないことを話した。

「では私たちが呉先生を助けるしかないわね」

思ってもみないことを言うが、どういう目算があるのか分からない。

「いや、まだ楊さんが死んだと決まったわけではない。もう少し様子を見よう」

「こういう大邸宅にはいくつものゲストルームがあるものよ。そのうちのひとつに閉じ込められているはずよ。見つからないようにゲストルームを探しましょう」

「けどどこにどれだけのゲストルームがあるかも分からない」「ここはパントリーらしいから調理場に繋がっていて、さらにダイニングホールに繋がっているはずよ。もうすぐ夕方だから料理番が入ってくるわ。そしたらその料理番に言って料理番の衣服を持ってきてもらうのよ。そして料理番のふりをして家中を探すのよ」

なんとという大胆なアイデアか、しかしここまで来てしまった以上、そのくらいの冒険をするしかないかと思う。

すると、案の定である。しばらくして、一人のコック服を着た男が調理場に入って来て、二人のいる食品倉庫のドアを開けた。

「わあっ」と叫ぼうとするコック服の男の声を浅田の手が押さえ込み、そのまま壁に押さえつけた。美玲がスイッチを押して照明が点く。

「大丈夫、僕たちはあなたたちの見方だ。声を出さないでくれ、分かりましたか」

うなずくのを確認してから口にあてがった手を放す。そして美玲と二人でどういう事情で忍び込んだか丁寧に説明し、手助けしてほしいと頼んだ。これを聞いて頷いた料理番の男は、調理場に掛けてあったコックの服を二着持ってきた。

コックの服に着替えた二人は慎重に調理場から大食堂に入って行った。まだ誰も来ていない。そこから廊下に出て、人の話し声がする方にゆっくりと進んでいく。すると浅田には見覚えのある広いリビングが見えた。

「おい、お前たち何しているんだ。調理場は向こうだろう」

突然後ろから声をかけられた。ドキツとして振り向くと、背が高くがっしりした男が近づいてくる。

「あっ、いえ、夕食の準備のために旦那様の様子を見てこようと
思いました」

咄嗟に美玲が応える。

「向こうの書斎の中だ。怯えていて食い物も喉を通らないと思
うがな」

薄ら笑いでそう言った男が、リビングの方を指したのを見てリ
ビングに向かって進んでいく。中に入ると五、六人の男がいて、
何人かの男が銃撃で散乱したガラスの破片などを片付けている。
壁の西洋絵画にも銃弾が当たったようである。顔を見られない
ように顔を背けながらリビングを進んでいくと片隅に男が縛ら

れて倒れているのが見えた。二人とも楊品希だと咄嗟に思った。美玲が近づこうとする。

「おい、そいつに近づくな」と先ほどの男が声をかけてきた。

「でもこの人、怪我をしているわ」

美玲が言った声を聞いて全員が二人の方を見る。

「おい、お前、なんでここにいるんだ」

浅田に向かって言った男がいた。さらに続けて、

「日本人の浅田だろ、なぜお前がここにいるのだ。しかも、なんだその恰好は、」

あの鋭い目をした黒シャツの男である。台北の「楽埔町」という古い料亭で黄天佑と一緒にいた陳建志で、白のUSBを渡した男である。

「あっ、分かりましたか。まだ礼金の半分をもらっていないので

いただきに来ました。あなたがここにいると聞きまして先ほど訪ねてきたところです」

「何を言っているのだ。あれが本物だと分かったらすぐにやると言っただろう。大体どうやってここに入ってきたのだ」

「先ほど玄関から入ろうとしたら、なにやら銃声が聞こえまして家の裏側から入ってきました」

「ちょっと待て、お前が女ずれでここにいるということは、その女は監禁していたはずの林美玲だな。一緒になって台湾大のばあを連れ出しに来たんだろう。おい、こいつらを捕まえろ！」
他の連中にそう言った途端、男たちが二人を取り囲もうと寄ってくる。

「待ってくれ、僕はお前たちの仲間だ。中国から機密品を運んできたのは僕なんだぞ。今日のところは引き下がってやるが、また

来るからな」

びくびくしながら、美玲の手を引いて玄関ロビーに向かおうとした。

するとその時、玄関のドアが開いてロビーに三人の男が入ってきた。ひとりには松葉杖をつけて足を引きづっている。浅田らと目が合うと、

「あつ、」

浅田も含めてその場の五人全員が大声を上げた。

新華実業の陳金福とあの手下であった。

「やあ、陳さん、無事でよかった。あんた首になったのによく會長のところへ来られたもんですな」

堂々としたふりをして、ロビーの中ですれ違おうとした。

「貴様、よくもこの前はやってくれたな！」

陳金福が叫ぶよりも早く、運転手ともうひとりの手下が殴りかかってきた。美玲の体を押しやってから男たちの突進をかわそうとしたが、それより早く運転手の男の拳が浅田の顎をとらえ、その勢いで浅田の体はロビーの端まで転がった。

「やめて！ なにするのよ」

美玲が浅田に向かって駆け寄る。

「かまうな、やってしまえ！」

松葉杖の陳金福が大声を立て、手下が美玲を押しやってから二人がかりで転がっている浅田の体を蹴り始める。

とその時、

「金福、何をしに来た！ 出ていけ、悪党」と大音声が響いた。

全員がその方向を見ると、許会長がロビーのもう一つの入口に立っていた。

「黙れ、じじい。もうお前の時代は終わりだ。散々俺に使い走りをさせておいて、少し都合が悪くなったら追い出しやがって。もうすぐ新華実業は俺のものだ」

「お前はとことん腐れはてた奴だな。新華実業をお前の好きにはさせん」と毅然とと言う。

とその時、

「金福、何をみみっちいことを言っているのだ。我々は今、大義のために動こうとしているのだぞ」

陳建志が陳金福をたしなめるような言い方をしてから、許会長に向かつて言い放った。

「じいさん、この家は当分俺たちのアジトとして使わせてもらう。丘の上の要塞のようなこの屋敷は俺たちにとって都合がいい。静かにしていれば殺したりはしない」

「そいつらと一緒に二階に閉じ込めておけ」
広いロビーにはすでにいくつもの木箱が運び込まれており、家の中では男たちが忙しそうに動き回っている。何かの企みが動こうとしていると思わざるを得ない。

そして結局、何のことはなく楊品希ともども捕まってしまう、許会長も一緒に二階の応接室に閉じ込められた。そして先に閉じ込められていた呉教授もこの応接室に連れてこられた。この応接室は客用であるが七〇〜八〇㎡くらいの広さがあり、許会長が集めた西洋絵画が壁を覆っている。連れてこられた呉教授は一人で長く拘束されていたため、目がくぼみ誰の目にもやつれているように見えた。美玲の顔を見ると、

「ああ、林さん、もうこのまま誰にも会えずに、ここで死ぬのか

と思っていたわ」

美玲に駆け寄って抱き着きながら涙が溢れてくる。また一緒に連れてこられた家政婦は楊品希が腕から血を流しているのを見て駆け寄った。

「呉先生、」無事で本当によかったわ、私のせいでこんなことになってごめんなさい、」

「大丈夫よ、あの人たちは本物の金印じゃなく、どこかで作ったコピーの方がほしかったのよ」

涙をふきながら、呉教授が気丈に金印のことを口にする。すると、

「呉さん、あんたをとんだ事に巻き込んでしまって申し訳ないと許会長が口を開いた。

「楊もよく助けに来てくれた。浅田さんもとにかく無事でよか

った」と言ってから、

「金福のやつは、美術品の調達を一手にやっていて私服を肥やしているうちに何やらとんでもない連中の仲間になってしまったようだ。呉さんが、わし宛てに送ったコピーが届いたのと時を同じくして、見知らぬ奴らが呉さんを連れてこの家に乗り込んできた。あのコピーを丹念に調べてから黒シャツの男が持ってきたコンピューターを操作した。すると目的のものが見つかったようだ。何がどうなっているのかわしには分らんが何かの陰謀が進んでいるように感じる」と言った。それを聞いた美玲が、

「そういえば、玄、あなた先ほど『僕はお前たちの仲間だ、中国から僕が機密品を運んできた』と言ったわね。あれはどういうことよ。ひよっとしてあなたもあの連中に取り込まれたんじゃないな

いわよね」

浅田に向かつてきつと鋭い目を向けて訊いてきた。

「いや、あれはでまかせを言ったまでで、・・」と言いよどむ。
「おかしいわ、あなたはそんな思ってもみない出まかせが言える人じゃないわ。何かを隠しているわね」

顔を探るように見られて、何か心の中を読まれていると感じる。
仕方なく、沖縄で密輸グループに巻き込まれた後、上海に連れていかれて逮捕され、意識がなくなるような拷問を受けて、仕方なく機密情報の入ったものを運んできたことを話した。

「君を人質に取られていると思うとどうしようもなかったんだよ」

最後にそう付け加えて美玲を見つめた。

「ああ、玄、ごめんなさい。大変な目にあっただのね、何も知らず

に勝手ことを言っつて本当にごめんなさい」

そう言っつて浅田の首に腕をからめてきた。これに應えるように美玲の体を抱きしめる。それを見つっつ許会長が、皆に向かつて言っつた。

「ということとはじゃ、これには中国共産党が絡んでいて、それに呼応している連中がいるということじゃな。その呼応しているのがあの黒シャツの男の一味とみて間違いなさそうだな」

それを聞いて浅田が美玲から離れて、

「実はいくつかの機密情報を運んできたのですが、僕は運んで来る途中でいくつかの情報の中身を見たのです。それらは日本やアメリカ軍にとって日本の国防上、非常事態に相当する情報でしたが、成り行きからして中国側が本当の情報を流したかどうかについての信びよう性は疑問です。アメリカ側も疑念を持

って調べているようです」

そう言うってから尖閣諸島の上陸作戦の話をした。

「それはまた突拍子もない話だな。その情報は台湾にも届いているのじゃな」

「いえ、別の密輸団に渡したUSBには尖閣諸島の上陸作戦の話は入っていませんでした。黒シャツとは別の密輸団がいてそれを国防部に売っている連中がいるのです」

万建設の黄天佑や金城建設の長嶺を思い浮かべながら話した。「何という怪しからん奴らばかりだ、そんな情報売り買いととは。しかし、だとしたら台湾国防部に大急ぎでその情報を知らせねばならん。じゃが、一方で下の連中は何を企んでいるのか分からんな。どんどん荷物を運んできていようだが、」

「最後の情報の入ったUSBを黒シャツの陳建志が持っていて、

それを開くカギが、僕たちが拾ったコピーの金印だったのです。運んできた情報とは別に直接、陳金福・陳建志グループを通して、前もつてもたらされていたのだと思います」

「それで陳金福が必死で私たちや呉先生を追いかけてきたのね」美玲が納得の表情をつくる。

「何とかしてその情報を見ることができんのかのう」そう言って許会長が浅田の方を見る。

「情報は僕が僕のパソコンにコピーしたのですが、金印は下の連中に押さえられています」

すると、静かに聞いていた呉教授が、思わぬことを口にした。

「その暗号だったら私が覚えているわ」

「じゃあ、玄のパソコンを持ってくれば分かるわけね」

「しかし、パソコンは車の中だ。どうしようもない」

「何とかあのトンネルを使って逃げ出す方法はないものかしらね」

美玲は黙って考え出す。美玲は常にポジティブである。

とは言っても、拳銃を持った連中が何人もいてはここから自力で逃げ出す方法はないと言っている。携帯電話も取り上げられて外部に電話することもできない。許会長によれば一つだけ下のリビングの固定電話が外線に接続されているようだとのことだが、この閉じ込められている応接室を抜け出して電話することはできそうにない。楊品希の腕の銃創は家政婦が自分のスカートの一部を破って包帯の代わりにして止血をしたが消毒をする必要がある。

皆が眠れないまま一夜が明け、老体の許会長は体を動かすの

もきつそうである。さらに昼近くになり楊品希がソファーに横たわったまま大粒の汗を滴らせて苦しそうにするようになった。家政婦が、

「傷口から細菌が侵入したんじゃないかしら。このままじゃ感染症で死んじゃうわ」と言う。

それを聞いて浅田が入口のドアを叩きながら、

「開けてくれ、人が死にそうだ！」と叫んだ。

カギを開けて二人の見張りが拳銃を持って入ってきた。

「撃たれた傷口から細菌が入って苦しんでいる。医者に連れて行ってくれ」

「こいつは、昨日俺たちを殴った奴だ。そのまま死んでしまえ」これを聞いた許会長がソファーから立ち上がって怒鳴った。

「お前たち、それでも人間か！ 楊はわしが一番たよりにして

いる男だ。早く医者を呼べ！」

「おい、じいさん、お前、自分の立場が分かっていないな。なんでお前が俺たちに指図するんだ」

この騒ぎを聞きつけて一階から何人もの男たちが上がってきた。「なんだ、どうしたんだ」と陳金福が見張りに訊く。

「このガードマンが苦しんでいるので医者を呼べと、このじじいが怒鳴るんです」

「おい、金福、楊がお前らに撃たれて苦しんでいる。なんとかしろ！」

許会長が陳金福に詰め寄る。会長の迫力に押されて後ずさりした陳金福は松葉杖が床の絨毯の端にひっかかり後ろ向きにひっくり返った。

「くそっ、何しやがるんだ！」

松葉杖にしがみつきながら立ち上がると、許会長の胸を力いっぱい押した。会長は押された勢いで後ろに吹っ飛び、ソファーのひじ掛けにぶつかかった。「うううっ」と言った後、腰を押さえたまま立ち上がれなくなった。

「あんた、なんてことするのよ」

家政婦が会長に駆け寄って陳金福を睨みつける。とその時、

「一体、何をやっているんだ」

一階から駆け上がってきた陳建志が皆を見渡しして言った。

「会長がこいつに吹っ飛ばされて腰を打って動けなくなった。

また楊は銃創から細菌が入って感染症になるかもしれない。会長を寝室に寝かせてほしい。楊には最低限、傷口の消毒と抗生物質を飲ませてほしい」

浅田が陳建志に向かって頼むと、陳建志は陳金福を睨みつける

ようにする。

「この大事な時に、騒ぎを起こすなと言っただろう」

「よし、お前、じじいを寝室に連れていけ。それから、家政婦、救急箱かなんかを持ってきてこいつの手当てをしろ」

二階の階段から下のリビングを見ると、何人もの男たちが忙しそうに荷物の仕分けなどをしながらも浅田の方を振り向く。連中が見ている前を、許会長を両腕で抱えて一階へ降りていく。二人の家政婦がそれに従うようについてくる。広いリビングをゆっくりと横切って大食堂とは反対側の出口から廊下に出て書斎の横の寝室へと歩いて行った。

寝室には大きなベッドが中央に置かれ、書棚のついた机とソファが置かれていた。痛そうにしている会長をなんとかベッドに寝かせてから家政婦に尋ねる。

「君たちの名前は？」

「春美です」

「淑貞です」

「春美、あなたはここで会長の世話をされていてください。淑貞、あなたは僕と一緒に救急箱と治療薬を取りに行きます。春美、しばらくしたら戻ってきます」

淑貞に案内されてリビングに戻り、リビングを出て大食堂に入っていくと隅に棚で区切られたスペースがあり、その中に入ってしまった。リビングでは男たちがずっと二人が歩いて行くのを目で追っていた。棚に救急箱と薬箱が置かれているのがすぐに分かった。

救急箱と薬箱をそれぞれ大きな手提げ袋に入れて会長の寝室に戻った。打撲用の湿布薬を会長の腰に張り付けて救急措置をし、

安静にするように会長に言った後、淑貞と二人でリビングを通って二階に向かう。リビングの中央に差し掛かった時、浅田が大きくつまずいてテーブルに激しくぶつかり、テーブルの上にあったコーヒーカーップなどが周りに飛び散った。

「バカ野郎、どこ向いて歩いてるんだ」

「自分で片付けろ」などと浅田に向かって男たちが散々文句を言う。

「すみません、ごめんなさい」と言いながら飛び散ったものを片付ける。淑貞も手伝って割れたものを片付け、掃除をした。

見張りのいる二階の応接室に戻ってさっそく淑貞が楊品希の傷の手当をする。楊品希は相変わらず苦しそうである。

淑貞が手当をしている片隅で、浅田が手提げ袋からパソコン

を取り出した。

「どうしたのよ、それ、」

美玲が不審そうに訊く。

「下のリビングに下りたときに飾り棚の上にパソコンが置いてあるのを目にした。先ほど僕が少し騒ぎを起こしている間に淑貞がこっそりと袋に入れたんだよ」

「それをどうするつもりよ」

「これはおそらく陳建志のものだと思う。台北で会った時に持っていたものと同じだからね。この中に渡したUSBの中身がダウンロードされている可能性がある」

そう言って早速パソコンを起動する。すると、すぐにパスワードを訊いてきた。

「ああ、ダメだな。パソコンを開くこともできない」と呟くと、

「情けないわね、ちよつと貸してみても、簡単よ、パスワードをリセットすればいいのよ」

美玲が操作し始めると、ほんの数分でWindowsが開いた。

「で、どんなファイルなの？」

「別のUSBには単純にA1、A2などの名前になっていた。それはデータファイルでそれらとは別にデータファイルを開くためのプログラムファイルがあった」

「分かったわ、ダウンロードしたとしたら何かのフォルダーに入れているわね」

次々とフォルダーを開いていく。しばらくして、

「これかしらね、フォルダーは『sino-taiwan』となっていて、
とこの二つのファイルしかないわ。呉先生、パスワードを教えてください」

呉教授が記憶していたパスワードを入れると、二つのファイルとも開いた。これがあのUSBに入っていたファイルであろう。×がデータファイルで、△がプログラムファイルのようである。浅田が前にやったように×ファイルのコマンドを△ファイルに張り付けると、プログラムがスピードを上げて動き出す。しばらくしてプログラムが止まり、「OUTPUT」ファイルが作られた。

美玲がこれを開く。英語の文章が長々と続いており、呉教授、美玲、浅田と三人が顔を寄せ合ってゆっくりと読んでいく。初めの数ページは何のことかよくわからない。とりあえず文章をたどっていく。さらに数ページ行ったところで、

「これは、よくわからないけど中国軍が台湾に上陸するための方法を書いているのかしらね」

英語の得意な美玲が最初に声を上げた。

「そのようね、でもこれは実際の話なのかしら」
呉教授が疑わしそうな顔をして首をかしげる。

「とにかく、もう少し先まで読んでみましよう」

浅田が二人を促して一通り読むことにし、最後まで読んで美玲が要約をした。

「おおよその話としては、日本が自分の領土であると言っている魚釣島を攻めると見せかけて台湾に侵攻する計画ね。そうすればアメリカ軍も日本軍もそちらを警戒していて台湾は手薄になる。そして、侵攻作戦としてまず台湾内部でクーデターを起す。これで台湾内部がガタガタになったところに、高雄、台南から一気に上陸して占領する」

「たしかに具体的に細かく書いているけど、やはり私は何か小説のようで本当の機密情報なのかしらと思うわ」

やはり、呉教授は半信半疑である。

「しかし、昨日言ったように確かにアメリカ軍には中国軍による尖閣諸島の上陸作戦があるという情報がすでに流されています。これが本当に中国の謀略だとしたら辻褃が合っていませんか？」

浅田は自分にも問いかけるように言った。

「これによるとクーデターを起こして、まず大統領府を攻撃して大統領を暗殺すると言っているわ。そんなことが下にいる連中でできるのかしら？」

美玲もこれが本当の情報だとは信じられないと首をかしげる。

「それにはいつ作戦が行われるとは書いてないわ」

浅田はこれについてじっと考えた後、自分の考えを呟いた。

「アメリカ軍に渡した USB には尖閣諸島の上陸作戦は十一月一

日に行われると書かれていましたが、アメリカ軍も半信半疑で台湾軍には届いていない可能性があります。いずれにしても可能性としては十一月一日ではないかと思う」

「えっ、十一月一日って言ったなら三日後よ。彼らがこの情報を見たのは昨日よ。いくらなんでも三日後までに準備はできないでしょう」

「この情報は、中国軍の行動については非常に具体的に書かれているが、クーデター計画については具体的ではなくむしろ中国軍の動きに合わせて行動しろと言っているように思える。つまり、クーデター計画はすでに台湾側で練られていたとも考えられる」

「だとしても、もっと強力な勢力がいないとクーデターを起すには十分じゃないわ」

確かに下にいるごろつきのような連中でクーデターが起こせるとは考えにくい。では彼らは何をしようとしているのか。

「いずれにしても、一刻も早くこの話を国防部に連絡する必要がある」

「でも、もしここから逃げ出すことができたら国防部に話しても一般人の私たちの話など信用されるかしら」

浅田も確かにそうだなと思うが、ではどうしたらいいか分からない。第一ここから逃げ出すことができない。

クーデター計画や台湾占領計画の可能性があることは捨てきれないにもかかわらず、何もできないでいることへの無力感で二階の応接室は重苦しい沈黙が流れていた。

その沈黙を破るように廊下で足音がしたと思った瞬間、「ガチャ、

ガチャ」と乱暴にドアが開いて陳建志が二人の男を連れて入ってきた。そしてテーブルの上に置いたままになっているパソコンを見て、浅田に詰め寄ってきた。

「くそっ、やっぱりお前だったか」

目の前に寄ってきたと思った瞬間、強烈な一撃が浅田の顎をとらえた。その勢いで仰向けに床に倒れる。意識が揺らいでいる中で、

「お前たち、中を見たな。このまま全員が死んでもらうぜ」と言
って拳銃を取り出すのが見えた。

—ああ、これで本当に殺される。

と思ったその時、

「まあ、少し待て」

という声とともに三人の男が入ってきた。それを見て全員が、

「あつ、」と声を上げた。

それは、王猛波教授と万建建設の劉旭鎮社長ともう一人がっしりした体軀の男であつた。

「王先生、私たち、この人たちに捕まって閉じ込められています。助けてください。よかつたわ、先生が来てくださつて」
美玲は安堵の顔つきになって王教授に走り寄ろうとする。

「この人たちは何かクーデターを計画しているようです。すぐに国防部知らせないといけません」

浅田もよろけながら立ち上げて、

「—どういふことか分からないが、ここに王教授と劉社長がいるということはお助かるかもしれない。と思った。ところが、」

「林君、悪いがそつもいかんのだよ。今から彼らと重要な打ち合

わせをしようとしていた矢先、君たちがここにいると分かって上がってきたのだよ。クーデターの計画まで知られたとあつてはやっぱり死んでもらうしかないね」

「えっ、どういふことですか、先生」

「君は気付かなかったかもしれないが、我々は中華統一を主導しているグループで、この人らは『竹聯幫』の中心メンバーなのだよ。鄭成功が解放して以来、台湾は中華民族の領土であり本土の中華民族と一体でなければならぬ。君たちのような少数民族の原住民が台湾の独立を叫んでも台湾には何のメリットもないのだよ」

美玲はあつけにとられて言葉が出てこない。とその時、後ろで聞いていた呉教授が、

「あなた、どうかしてしまったの、台湾大学の教授ともあろう人

が、台湾の人は誰も中国に統一されたいとも完全に独立したいとも思っていないわ。現状維持が一番いいと思っっているわ。そんなことはあなただってよくご存じよね。それも竹聯幫のようなやくざを引き入れるなぞ狂っっているわ」と早口でまくし立てた。

「この小さな島に閉じこもっていては将来の発展はない。本土と一体になって大中華体制の下で世界の覇権を握るのだ。そのためには台湾の独立を唱えるような政権には消えてもらわなければならない」

「あなた、中国共産党の回し者なのね」

「何を言っているのだ。そもそも中華民国は大中華の正当な政府だ。すでに中共とは話がついている。我々の新しい政権は三民主義の下で共産主義と一線を画して共栄の道を行くのだ」

「何を夢みたいなことを言っているのよ。そんなことを共産党

が許すわけがないわ。あなた騙されているのよ」

「黙りなさい、すでに賽は投げられているのだ。我々は大中華共栄圏の実現に向かって突き進んでいるのだ」

そう言われて、呉教授はあっけにとられて次の言葉が出なかった。そこで、

「劉社長、あなたも同じグループなのですか。どうしてですか」と浅田が劉社長に向かって訊いた。

「浅田さん、まだ分からないようだね、わしと王先生が一緒にここにいるということを」

「えっ、どういうことですか」

「鈍い男だね、お前は最初からわしらの筋書きに沿って動いてきてもらった。高雄のプロジェクトは最初からわしが受注することになっていた。ただうちには専門家がないのとアメリカ

力軍と仲のいい金城とうまくやれると見込んでそれらしく動いてもらった。そこのお嬢さんといろいろ邪魔をしてくれたが、最終的には運び屋までやってくれて感謝しているよ」

「高雄のプロジェクトとクーデターと何の関係があるのですか」「関係があるかどうかあんたには関係ない」と言ってそれ以上はしゃべらなかつた。

どういふことか分からないが、プロジェクトの入札の審査委員長が王教授だったことを思えば、審査結果はどうにでもできたのだろうとは容易に想像できる。だが待てよ、凜が体育館の着工式を十一月一日にやると言っていたなと思ひ出した。だがそれ以上に思考が回らない。とここで、王教授が、がっしりした背の高い男に向かって言った。

「いろいろ知られてしまったので全員に死んでもらう必要があ

るが、わしらがいる間、ここにいくつも死体を置いておくのも調子が悪い。李中尉、この連中に事が終わるまで眠っていてもらおう」

「分かりました。おい、例の物を持ってこい」

李中尉が後ろにいた男に指示する。

しばらくして、李中尉の部下と思える男が鞆を抱えて上がって来て、テーブルの上に中身を出した。注射器と注射薬であった。最初に熱を出してソファーに横になっていた楊品希を三人がかりで押さえ込んで腹に注射器を突き立てた。そして同じ男たちが浅田を押し倒して腕を押さえ込んで注射器を突き立てた。すぐには効いてこなかったが二人の男に押さえ込まれていて、次に美玲が押さえ込まれるのを見ているしかなかった。

その頃高雄では、急遽、『高雄超級競技場』の着工式をやることになり建設場所の整地と式典の準備が急ピッチで始まっていた。建設場所は高雄港の東に広がる鳳山区の丘陵地帯で低い草木が生い茂っている。このため数十台のショベルカー、ブルドーザー、ダンプトラックが投入され草木の撤去と整地が行われている。おおよそ八万平米の広大な敷地であるが、万建建設によると二十四時間やれば草木の撤去は一日ちよつとで終わるので式典が行われる場所だけを転圧してアスファルト舗装するのにさらに一日かかるが、並行して演壇や来賓用のテントを作るので十分間に合うとのことである。

プレゼンの後に浅田がいなくなったことについて金城凜は心配ではあるものの現場では万建建設の人々が忙しく動き回っており、自分たちも何かをしなければと右往左往している。新垣と

島袋は仮設のコンテナ事務所準備作業の詳細方法について万建設から説明を受けている。前田は準備作業には興味はなく、残りの金をもらうために黄天佑部長と連絡を取ろうとするが、何度やっても電話が通じず周りの台湾人に当たり散らしている。

着工式

そして、十一月一日の朝を迎えた。尖閣諸島周辺にはすでに昨日から海上自衛隊の護衛艦、哨戒艇などの戦艦が続々と集まってきていた。またアメリカ空軍の偵察機が嘉手納基地から何度も発着を繰り返していた。しかし、中国海軍の戦艦は未だ一隻も見られなかったが大型の漁船がいつもより多く国境近くに現れ

ては消えるようなことが観察されていた。これは何かのサインではないかと考えられ、日本側の緊張は最高潮に高まっていた。

その頃、巡洋艦、駆逐艦などの戦艦に続いて何百人もの兵士と戦車を積んだ上陸用舟艇が何隻も南シナ海の中国海軍の基地を出港した後、大陸の沿岸近くを北上していた。これは東沙諸島の台湾軍に怪しまれないためである。

許会長宅の二階の応接室で浅田はすでに目覚めていたが腕と足を縛られており、何とかして床から起き上がれないかと床の上を横にごろごろと動こうとしていた。しばらくして楊品希が目覚めて、

「おい、大丈夫か」と声をかけてきた。熱が下がって元気そうで

ある。

「ああ、大丈夫です。なんとかこの縄を解いてもらえませんか」
「よし、こっちに來い」

転がりながら楊品希のところに行く、後ろ手に縛られているにもかかわらず器用に結び目を緩めた。浅田の縄が解かれた後、浅田が楊、美玲、呉教授、家政婦の淑貞の縄を次々と解いていった。みんなが無事に目を覚まし、開口一番、

「今日は何日なの」と一斉に声を出した。しかし、異常に腹がすいている以外に何日なのか誰も分からない。ひよっとしてすでにクーデターが実行されたのではないかという不安が全員の心を覆った。

浅田が「ダン、ダン、」とドアを叩いたが反応がない。それを見た楊品希がドアを勢いよく蹴り込んだ。何度か蹴り込んでいる

うちにドアがゆがみ、壊れるようにドアが開いた。外には誰もいない。勢いよく階段を駆け下りリビングに出るが誰もいない。楊品希と淑貞は許会長の寝室に向かって走って行った。浅田はリビングの固定電話から金城凜に電話する。

「もしもし、凜さん、浅田です」

すぐに繋がり、元氣そうな凜の声が響いてきた。

「ああ、浅田さん、何日も連絡しないで今までどうしていたんですか。心配していたんですよ」

「すみません、今日は何日ですか」

「急に何をとぼけているのよ、何日も行方不明になっていた後に」

凜の怒っている顔が浮かぶ。

「すみません、とにかく何日ですか」

「今日は十一月一日よ、着工式の日よ。覚えていてるでしょ。今からすぐに来てください。社長も昨日から来ているのよ。それに着工式には蔡英文総統もいらっしやるのよ、分かったわね」

「えっ、総統が来られるのですか」

「そうよ、だから会場もすごく立派にできているわ。万建建設の人たちだけじゃなく、劉社長の手配でイベント会社の人たちが寝ずに働いてくださり、豪華な式場になったわ」

「分かりました、すぐに行きます」

浅田のおぼろげな不安は確信に変わった。美玲と呉教授に今の話をした。同じ大学の王教授に注射を打たれて眠らされ、怒り心頭の呉教授も、事の重大さがすぐに分かった。

「なんてことをするのかしら、馬鹿な男ね、つまり蔡総統を着工式に招待して暗殺するつもりなのね。しかし、どうやって阻止す

るのよ。私たちが警察に言っても突拍子もない話なので信用されるか分からないわ」

「それにどうやって暗殺しようとしているかも分からないし、台湾の上陸作戦やクーデターの計画が実行されようとしているということを実際には説明できる証拠はないわ」

美玲も慌ててやる必要があるが、どうしてやればいいのか分からない。

「でも、もう時間がない。とにかく高雄の現場に急ごう」
浅田が急ごうとするが、女二人は、まだ迷っている。

「私たちが行っても今のままじゃ阻止できないわ」

とその時、楊品希が晴れやかな顔をしてリビングに入って来た。

「会長は無事に目を覚まされた。よかったぜ」

「そうだ、今の話を許会長にして、会長から警察幹部に話しても

らおう」

浅田がそう言つて、会長の寢室に急いだ。会長はベッドに横になつていたが、浅田らが入つて行くと腰を押さえながらゆつくりと起き上がった。

「大丈夫ですか」

「いや、何とか無事のような。お前さんたちも無事だったか」

「会長、今大変なことが起きようとしています」

尖閣諸島上陸作戦はおとり作戦で、実は台湾への侵攻作戦が実行されようとしており、その前に蔡總統を暗殺してクーデターを起こそうとしていることを、順を追つて話した。そして、最後に会長に協力してほしい旨を伝える。

「まず總統の暗殺を阻止しなければなりません。そのために会長のお力が必要です」

「何やら突拍子もない話だな。それを誰かに話してもなかなか信用してくれんだろう」

「そうです。僕らが警察か国防部に話してもおそろくまともに受け取ってもらえません。そこで許会長から警察幹部か国防部に話していただきたいのです。時間がありません、お願いします」

「うむ、分かった。やってみよう」

「ありがとうございます。これから高雄の着工式場に向かいます。楊さん、お願いします」

浅田が運転して楊品希、美玲、呉教授の三人を乗せて、着工式場に向かってスピードを上げて車を走らせる。楊品希は会長宅に備えてあった武器をありったけバッグに詰め込んできて、他

の連中にも使い方を説明しようとするが、女二人は怖がってまともに触ることもできない。もうすでに九時を回っており、一刻の猶予もない。

中山高速公路を一時間ほど南下し、衛武宮都会公園を過ぎたところで一般道に下りる。臨海路から油管路に入ると目指す鳳山はすぐそこである。鳳山の山道を登っていくと、道沿いに三十メートルおきくらいに旗が立っており、「祝 着工高雄超級競技場」と書いてある。旗に沿って登っていくと大きな門型のゲートがあり華やかに飾られ、同じく「祝 着工高雄超級競技場」と大きく書かれていた。ゲートの近くは同じように坂を上ってきた車で混みあっている。しばらく待って誘導員が駐車場に案内してくれる。駐車場にはすでに百台を超えらると思われる車が置かれていた。駐車場から、コンサート会場のような大きなステージ

とその横に背の高い大型のイベント用テントが幾張りも張られているのが見える。すでにたくさんの人がテントに集まって互いに話をしている。また駐車場には大きなアンテナを付けたテレビの中継車まで来ている。なんと大層なことだと思わざるを得ない。

浅田ら四人は、王教授や劉社長のクーデターグループに見つからないように人々から遠く離れた駐車場の車の陰からテントの中を窺う。テントの中には椅子が並べられており、着工式が始まったら参加者が一斉に座るのだろうが、テントの外にまであふれた人々で混雑している。ここに至って万建建設の人たちの中に劉社長に協力した人がいるのは間違いない。また黄天佑、長嶺専務、前田らに見つかっても困る。とりあえずは金城凜を探して状況を訊くのが間違いないだろうと浅田は考えた。しかし、こ

れだけたくさんの人がいたので誰が誰だか分からず、密輸グループやクーデター集団に見つからずに凜を探し出すのは不可能に近い。

とその時、後ろから声をかけられた。

「林先生、ここで何をしているのですか、どうぞ中に入ってください」

全員がびっくりして振り返る。

それは浅田が以前、王教授に誘われて台湾大学を訪ねたときに会った周健松副教授で、そばに趙博文助理教授が立っていた。

「あら、周先生と趙先生、びっくりしましたわ。先生たちもお客様としていらしたのですね」

「そうですが、林さん、この数日お休みになっていたので心配していました」

咄嗟に、この人たちも王教授の仲間かもしれないと美玲も浅田も思った。

「すみません、ご心配をおかけしまして。今日は王教授から招待されていらしたのですか」

「いえ、僕らは王先生の代理で来たのです。王先生は急な話で、ご都合が合わないとのことでした」

これを聞いて、美玲は、この人たちはクーデター一味ではないかと直感的と思った。

「そうですか、私たちは人と待ち合わせをしているのですが、連絡を取ろうにもみんな携帯の電源が切れてしまっていて困っていました。少しか先生の携帯を貸していただけませんか」

「ああ、いいですよ」

何の疑いもなく周副教授が自分の携帯電話を差し出してくれた。

浅田はその携帯電話を持ってみんなから少し離れたところから凜に電話した。呼び出し音の後、すぐに出た。

「你好、金城です」

「凜さん、浅田です」

「浅田さん、どうしているのよ。もうすぐ……」

大声で話そうとするのを慌てて制止する。

「しっ、小さい声でお願いします。まず周りの人に気づかれないようにテントから出てください」

「えっ、どういうことですか」

「すみません、説明している時間がありません。すぐに出てください」

「分かったわ」

しばらくして、一人の女性が混雑している人々から離れて首を

回しながら周りを窺っているのが見えた。

「出てきたわよ」

「はい、見えています。そのまま駐車場の奥まで会社の人に気づかれないように来てください。近づいたらこちらから合図します」

そう伝えると、ゆっくりこちらに向かって歩いてくる。

ここで携帯電話を周副教授に返して、お礼を言ってから、

「僕らは少し後で行きますので、お先に行ってください」と言うと浅田たちを怪訝そうに振り向きながら、二人は入ってきたゲート方向に向かって歩いて行った。

凜が近づいてきたのを見て、見えるように車の影から出て手を振ると、それに気づいて浅田のところへ駆け寄ってきた。

「どうということよ、私たちは今日のために夜中まで働いていた

のよ。今頃やっと出てきたと思ったら、他の人に気づかれないように出てこいとは、」

声を上げて言った後、見知らぬ三人が一緒にいるのが分かり口をつぐんだ。

「こちらは台湾大学の呉先生と林先生、それに楊さんです。僕のこと言うことをまず聞いてください。この着工式で蔡總統の暗殺が企てられています。・・・」

「えっ、今なんて言いました？」

「黙って聞いてください。突拍子もない話なのですが本当です」
そう言うってから、總統の暗殺、クーデター、それに続いて中国軍の台湾進攻が進んでいることをかいつまんで話した。そして、

「とにかくまず總統の暗殺を阻止しなければなりません。着工式は何時からですか」

「十二時からだけど、それならまず警察に知らせなきゃだめでしょう」

「すでに知らせてあるのですが、まだ到着してないようです。総統は何時に到着される予定ですか」

「よくは分からないけど、もう十一時だから、後三十分もしたら来られると思うわ。でもそんなことが起こるとはとても思えないわ」

凜は、浅田の話を本当に信頼性のある話として、とても受け止めることはできず、疑いの目で他の連中を見ている。凜の立場からすれば当然のことである。

—これでは警察や国防部が間に合わないのではないか。それにしてもこれだけの人がいるので警備の人が何人も配置されているが所詮、民間人である。人ごみの中から何人かの狙撃手に狙

撃されたらひとたまりもない。

「いや待てよ、総統がこれだけの招待客の前に現れるということとは、すでにSPが来ていて周辺のチェックや招待客の武器のチェックなどをしているのではないか。そういえば駐車場から会場に入る所でなにやらチェックをしているのが見える。」

「とすれば、人ごみに紛れて武器を持ち込み狙撃するのは難しいのではないか。」

「この会場は劉社長の指示の下で作られた。つまり、万建建設がこのプロジェクトを受注して、この会場を作って確実に暗殺できることをもくろんだとしたらどうだろう。」

と浅田はここまで考えて、

「いくら総統が来られるにしても、たかだか工事の着工式をやるにすればえらく大きなステージが作ってあるけど、あれは誰

の案で作ることになったのですか？」と凜に訊く。

「当然万建設の方で考えてくださったのよ。受注後すぐに着工式をやることになったのだけど、もう以前から決まっていたように図面を見せてくださったわ。何か問題でもあるの」

浅田はそれを聞いて、図面まで入札前に用意してあったとすると、あのステージに何かの仕掛けがあるのではないかという考えに確信のようなものが湧いてきた。

女性たちに車の中で待機するようになってから、楊品希に同行を頼む。

「楊さん、あのステージに何か仕掛けがある可能性があります。僕と一緒に調べに行ってくださいませんか」

楊品希は快諾して、二人は一旦ゲートを出て工事用地の外側からステージの裏側に回り込むことにした。時間がかかるが、見つ

からないように近づくにはこれしかない。

ゲートを歩いて出て、先ほど車で上がってきた道を数百メートル下がったところから雑木林の中に入って行く。しばらく林の中を会場の方向に向かって登って行くと、かすかにステージの後ろのバックパネルが見えた。浅田が近づこうと歩を進めようとしたとき、楊品希が肩を掴んでバックパネルの端の方を指さした。指さした方向に警備員が一人立っているのが見える。楊品希が気づかれないように警備員に近づいて行く。どうするつもりなのかと不審に思った、とその時、「パタ。パタ。パタ……」という爆音が近づいてきた、と気づいた次の瞬間、木々が大きく揺れるほどの風と砂埃が襲ってきた。

蔡總統がヘリコプターで到着したのであった。工事用地は八

万平米の広大な敷地であり、ヘリコプターの離発着には何の問題もない。ヘリコプターのローターが止まるのを待ってドアが開き、紺のスーツに身を包んだ総統が下りてきた。ヘリコプターの着陸したところから式場のテントまで百メートル以上あり、SPに先導されながら笑顔で手を振りながら歩いてくる。

もはや一刻の猶予もない。総統の到着が分かり、先ほどのバックパネルのところにはいた警備員は持ち場を離れて総統を見に行つたようである。浅田と楊品希はすかさずバックパネルの背後に回り込み、木造のパネル板を裏手に積んであった鉄パイプで壊して、パイプ構造になっているステージの下に潜り込んだ。ステージの前面と側面には分厚い幕が張られており招待客からは見えない。

ステージは1.6メートルくらいの高さで、二人は少しかがみな

がら幕で隔離された薄暗い空間を念入りに調べていくが、一見して何かの仕掛けがあるようには見えない。浅田は、これは見込み違いだったかと思ったがしばらくして、楊品希が手で合図をするのが見えた。入り組んだパイプの間を進んで楊品希のところにいくと、ステージの真下にあたる天井を指さしながら、

「そこに張り付けてあるのはプラスチック爆弾だと思う。同じものがいくつも天井に張り付けてある。これはステージもろとも壇上の人間を吹き飛ばすつもりだ」と言うのではないか。

「じゃあ、すぐに取り外そう」と手を伸ばすと、

「やめろ！ よく見てみる、起爆装置に繋がっている。下手に外そうとしたら爆発するぞ」

「じゃあ、どうすればいいのだ」

「見る、起爆装置にさらに線が繋がっている。おそらくこの起爆

装置を一度に起動させるように集中制御装置に繋がっているはずだ。そいつを無力化できれば爆発を防げるかもしれない」

とその時、ステージ上に人が上がって来る足音がして、それに続いてマイクの声が聞こえてきた。着工式が始まったのだ。

「分かった、早く探そう」

その少し前、ステージの前に到着した蔡総統は高雄市長の出迎えを受けていた。

「蔡総統、本日はわざわざ高雄まで足を運んでいただきありがとうございます」

「聞いていますよ、高雄が台湾の南の玄関口を象徴するゲートアーチが付いたスーパーアリーナだそうですね」

「はい、この場所はちょうど高雄港を見下ろせる位置ですので

ゲートアーチに恰好のところですよ」

草木を撤去して整地された向こうに台湾海峡が見えるのを自慢するように指さした。

「そうね、素晴らしいアリーナができそうね」

この市政府の人たちと総統との会話を後ろで聞いていた劉社長に、

「おい、社長、」と言って市長が来るように手招きした。

「こちらが今回の請負業者の万建建設の劉社長です。受注が決まったらすぐに工事にかかろうということなので急いで着工式を準備してくれました」と総統に紹介した。

「劉旭鎮です。本日はよろしくお願いします」

微笑みながら言って総統と握手を交わした。

「頑張ってください」総統もにこりとして応じた。

とその時、

「皆様、総統がお着きになられました。着工式を始めますのでご着席ください」とアナウンスの声が響いてきた。

これに応じて全員がテントの中の椅子に座った。

「ご着席ください」とのアナウンスに金城社長は、凜がいなくなつたことにいらいらしていた。

「凜はどこへ行ってしまったんだ。もう式が始まると言うのに、」
「前田、凜を探してきてくれ」

前田に頼むが、密輸の分け前のことで黄天佑と話がついておらず、こちらもいらいらしていた。

「こんなときに何していやがるんだ」と言いながら席を立って出て行った。

そしてステージ上では、司会が式の予定を簡単に説明した後、式が始まった。

「ではまず高雄政府の陳明州市長よりご挨拶申し上げます」
司会の声に続いて、高雄市の市長が登場してスピーチを始めた。

ステージの下では浅田と楊品希は薄暗くパイプが入り組んだ空間の中で集中制御装置らしきものを必死で探していた。ステージの上では高雄市長のスピーチが始まったようである。もう無理かと浅田が思ったその時、

「浅田、」と楊品希の低い声が聞こえて手で合図している。すぐに楊品希のところに行く。

「ありましたか、処置できそうですか？」

「よく見てみる、これだと思うが全体が箱の中に入っている。箱を解体しないと中がどうなっているか分からない」

「それは困ったな」と浅田が呟いたとき、

「では、次に蔡総統に、「挨拶をいただきたいと思います」というアナウンスが聞こえてきた。

その頃、テントの中では高雄市議会議員や高雄市政府の職員らの後ろに座っていた劉社長が黄天佑部長らに、

「おい、退くぞ」と合図をして静かに席を立つと、かがみながらテントから出て行った。劉社長らはテントの横を一番後ろまで歩いていく。テントの中の人たちは蔡総統が登壇するところを見ようとして、劉社長らを気に留めた人たちはいなかった。金城建設の人たちを除いては。

金城社長は凜がいない上に、劉社長まで席を立ててどこかに行こうとしていることにさらにいらいらがつものる。

「蔡総統の話が始まるときに劉社長はどこに行つたんだ」
長嶺専務の隣の前田に話しかける。前田は凜を探しに行つたが見つからず戻つて来ていた。

「さあ、どういふことでしょうな」と他人事である。

「役に立たん奴だな」

自分らの席のあつたテントを出て、張られている全部のテントの後ろまで来た劉旭鎮は陳建志らと合流した。

「大丈夫だろうな」

「大丈夫です、すべて順調です」

そう言つて、小型のトランシーバーほどのリモコンを見せる。

「他の連中にも連絡したか」

「はい、全員が離れて待機しています。また李中尉にも連絡して待機中です」

「よし、ここまできたら焦ることはない。総統がスピーチを始めて最高潮に達したときにやろう」

密輸グループの黄天佑らは二人から離れたところで聞いているが、実際問題どういふことか分かっていない。

ステージの下にいる浅田と楊品希は、司会のアナウンスに続いてステージに上がって来る足音を聞いた。

「もう無理だ、逃げよう」

さすがの楊品希もステージごと爆破されることが分かっているので、焦燥感に襲われて逃げ出してしまった。

浅田は持っていた鉄パイプでステージの下に固定されている装置の箱を力の限り殴った。びくともしない。

蔡總統の女性の声が聞こえてきた。

今度は、側面に張られた幕に鉄パイプを突き立てると穴が開いた。開いた穴を鉄パイプでこじ開けると幕が裂けた。このスキマから飛び出してステージの上端に飛びつく。飛びついた浅田の体はステージ上のSPの間をすり抜けて横になりながら蔡總統の演壇まで転がって行った。一瞬のことであった。

遠くから演壇の總統を見ていた劉旭鎮は、人が總統のところまで転がっていくのが目に飛び込んできた。

「何だ、あれは、建志、早く押せ！」

陳建志に向かって叫ぶ。陳建志も何が起きたのか分からず、一瞬

間をおいてから起爆装置のリモコンのボタンを押した。

突然ステージ上に飛び出してきて転がっていく浅田の体を止めようとSPが一斉に走りよる。蔡總統が足元に転がってきた浅田を見る。何か言おうとする蔡總統の体を即座に抱き上げ、走り寄って来るSPの一人を突き飛ばしてステージの端から大きくジャンプした。と同時に「ドウオーン」という轟音とともに爆風が起き、ステージの部材が大きな赤い火炎の玉と一緒に飛び散った。

駐車場の車の中から出て、遠くからステージ上の總統を見ていた美玲ら三人の女たちも、大きな火の玉の爆発に悲鳴を上げ、恐怖が全身を覆い言葉も出ない。しかし、美玲は恐怖に立ちすく

むも浅田を探しにステージに向かって走った。凜は金城建設の人たちがいるテントに向かって走った。呉教授も美玲を追って走っていく。

爆発の起きたステージは黒い残骸がくすぶって煙が立ち上っており、裏の林ではあちこちに火の手が上っている。ステージの前のテントは爆風で飛んでしまい、椅子に座って総統のスピーチを聞いていた聴衆はなぎ倒されてバラバラになった椅子の間に倒れている。何人もの人が血を流して動かないでいる。しかし、ステージが聴衆より高くなっており、薄いステージ板を突き破って上方に爆風が飛んだことが幸いしたのであるか、あるいは爆弾の威力を暗殺団自身に及ばないように調整していたためであろうか、血を流しながらも立ち上がるようにしている人が

何人もいるのが遠くからでも見て取れる。

「よし、うまくいったな。李中尉に連絡しろ」

劉旭鎮が陳建志に命令する。

「はい、すでに李中尉が国防部の占拠に向かっています。また近くの鳳山国防隊の有志がここに向かっています」

「王教授がこられたらテレビ中継をして、すでに蔡總統は我々の手により暗殺されたことを告げる」

黄天佑ら万建建設の密輸団は、蔡總統がスピーチをしていたステージが爆発して吹っ飛んでしまったのを目の当たりにして、

「社長、これは一体どういうことですか」と言うのが精いっぱいであった。彼らは一緒になって密輸をやってきたが、總統を暗殺するなどということは全く思いもよらないことであった。

「お前らは黙って見ておれ。わしについてくればいいのだ」

劉旭鎮の声は届かず、全員が思考が停止して黙って立ちすくんでいる。

会場に何人も配置されていた警備員が拳銃を持って爆風で倒れた人たちを囲むように近づいて行く。あの警備員らはクーデターグループの仲間だったようである。

そのとき、黒い乗用車が爆風で壊れたゲートをくぐって会場に入ってきた。乗用車は劉旭鎮らのところまで来て止まる。ドアが開いて王猛波教授が姿を現した。

「劉さん、犠牲は最小限に収まったようだな。一般人の犠牲者を出すのは本意ではないからな」

「はい、先生が計画されたように爆発の方向と威力を調整した結果、死亡者はSPと数人に収まったようです」

「よし、さっそくテレビ中継をしてクーデターを宣言しよう」

王教授が中継車に向かって歩いて行き、全員がそれに続いて行く。

とその時、パトカーのサイレンの音がたくさん近づいて来るのが聞こえた。

「来たな、建志、鳳山国防隊の連中に言って早く上がって来て蹴散らせと伝えろ」

「はい、もう上がってきますので問題ありません」

そう応えたのと同時に遠くの方で「パーン」と拳銃の音がした。

音がした方を見ると、二つの影が裏の林からヘリコプターを目がけて走っていくのが見えた。それを警備員が拳銃で撃ったようだ。すると、また「バーン」と音がして警備員が倒れた。

「何だ、あれは！」劉旭鎮が叫ぶ。

ステージが爆発したとき浅田は蔡總統を抱きかかえるようにしてスージから大きくジャンプした。後から来た爆風でゲートの近くまで飛ばされた。浅田は体から地面にたたきつけられ、しばらく意識が薄れて動けなかったが、幸運にも打撲傷だけで生きていた。總統は浅田の体がクッションになり手足に擦り傷ができた程度であった。浅田が膝をついて起き上がる。

「大丈夫ですか、あなたが私を助けてくれたのね。あなたは誰？」
「總統の味方です。よく聞いてください。總統を暗殺してクーデターを起こそうとしている連中がいます。爆弾を仕掛けたのはその連中です。まず台湾全土に戒厳令を出す必要があります。そして、クーデターが成功するのを見計らって中国軍が上陸してきます」と一気にしゃべった。

「えっ、中国が台湾に侵攻してくるといふの?」

「そうです。これはまやかしても何でもありません。本当の話で、すでに進行作戦は始まっています。すぐに国防部に連絡して防衛線を張らなければなりません」

「分かった、あなたを信用するわ」

「クーデター一味が向こうにいて、おそらくすぐに国防軍の中に一味に味方している連中が来ます。その前にここを脱出しましょう」

そう言うと、総統の手を引っ張ってゲートのところから林の中に入って行った。二人は火の手が上がっているところをよけながらヘリコプターに近いところまで辺りを見回しながら歩いて行く。とそこに前方から爆発前にステージの下から逃げ出した楊品希が歩いてくるのが見えた。

「楊さん、無事だったのですね、」

「蔡總統か、お前が助けたのか。悪かったな」

要人警護のプロが、總統をおいて逃げ出したことに情けなさとして引け目を感じざるを得ない。

「この人は？」と總統が聞く。

「味方です。心配ありません」と言ってから楊品希に、

「楊さん、僕は總統をヘリコプターまでお連れします。拳銃を持った連中がテントの周りを取り囲んでいるので僕らが林から出たら撃つてきます。援護をしてください」

楊品希は会場に着いて駐車場の車から出るときに用意してきた拳銃を持ってきていたのだった。ヘリコプターはテント群のあったところを挟んで駐車場とは反対側に駐機している。

浅田と總統の二人は林を出ると、整地された見通しのいい工事用地を全力でヘリコプターに向かって走った。案の定、一人の警

備員が気づいて撃ってきた。しかし、距離が百メートル以上あり、かすることもなかった。とその時、楊品希が駐車場の車の陰から警備員に向けて発砲した。警備員は無防備の後ろから撃たれたので備えることもなく肩を撃ち抜かれた。これに他の警備員も楊品希の方を振り返し、楊品希を目がけて発砲してきた。爆発の後、起き上がっていた多くの招待客もこの銃声の音にびつくりして一斉に地面にひれ伏す。

楊品希は何人も警備員から射撃を受け、たまらず拳銃を撃ちながら浅田の車に向かって走る。車に着くとすかさずバググからマシンピストルを出して撃ち出した。マシンピストルというのはフルオート射撃が可能なピストルでサブマシンガンとも言われる。

劉旭鎮が、二人が走っていくのを見て「何だ、あれは！」と叫んだ。しかし、それに続いて銃撃戦が始まったのを見て王教授と劉旭鎮は何が起こったかすぐに分かる。

「劉、総統は生きているじゃないか。どうということだ、何をやっていたのだ、お前は！」

王教授が劉旭鎮に大声で罵声を浴びせる。

「くっそう、やつらを撃ち殺せ！」

劉旭鎮が陳建志に叫ぶと、陳建志は拳銃を出しながら、ヘリコプターに向かって走っている二人に向かって走っていく。

浅田は遅れそうになる総統に声をかけるとともに、総統の盾になるように彼女の横を必死で走る。

「もう少しです。頑張ってください」

そう言った時に、遠くでパトカーのサイレンが聞こえた。「よしっ、もう少しだ」と思った瞬間、「パーン」という銃声とともにわき腹を激痛が襲った。それでも激痛をこらえ、左手でわき腹を押さえながらヘリコプターまで総統の手を引っ張って行き、息を切らせながらドアを開けた。総統はすかさずヘリコプターに乗り込み、

「早く出して！」とパイロットに叫ぶとともに、

「あなた、早く乗って！」と手を差し伸ばしながら浅田に大声で言う。浅田がドアに手を伸ばそうとしたとき、腕にまたも激痛が走った。前腕に弾丸が当たったのだ。「うっ」と唸って、伸ばした手を引っ込めた瞬間、棒立ちになった体がローターの爆風に煽られて後方に飛ばされてしまった。

「早く行け！」

倒れたまま叫ぶ。ヘリコプターのローターがうなりを上げて回転し出すが、警備員や陳建志の放った銃弾が機体に当たり、「カーン、カーン」と音がする。一刻の猶予もない。ローターがさらに勢いを増し周りに砂煙をあげる。

倒れて砂だらけになっている浅田に、総統が手を差し出して、「頑張って、乗るのよ！」と叫ぶ。

とその時、駆けつけてきた陳建志が砂煙に飛ばされそうになるのを、腰を下ろして踏ん張り、両手で拳銃をかまえてパイロット目がけて銃弾を放った。弾丸が前面のウィンドウを突き破った。途端に浮き上がるうとしていたヘリコプターが左右に大きく揺れ、ドアが大きく開いたと思われた瞬間、今度は前につんのめるように傾きそのまま前方へ地を這うようにして陳建志に向かって飛んで行った。

「わあー」という叫び声を残して陳建志はヘリコプターのローターに巻き込まれ、周りに血が飛び散った。さらにヘリコプターはそのまま伏せっている後方の招待客の方に飛んで行き、そのまま「ガーン」という轟音とともに駐車場に止まっていた中継車に激突した。激突したと同時に真っ赤な炎とともに爆発し、周囲に駐車していた車が吹き飛んだ。

この時すでに何台かのパトカーがゲートに着いており、拳銃を持った警備員の服を着たクーデター一味に向かって、「抵抗は無駄だ、投降しろ！」と呼び掛けていた。

そこにヘリコプターがパトカーの近くの駐車場に飛び込んできて爆発した。爆風でパトカーのガラスが吹き飛び、数名の警官が飛ばされて地面にたたきつけられた。

陳建志に続いてヘリコプターに向かって走っていた王教授や劉旭鎮一味は浮かび上がりそうになったヘリコプターが、突然自分たちの方に向かって飛んで来るではないか。

「な、なんだ、みんな逃げろ！」

劉旭鎮が叫んで、全員が一瞬早くかわして横っ飛びに飛んだ。

わずかに連中をかすめて飛んで行ったヘリコプターが爆発、炎上するのを地面に倒れながら見た劉旭鎮は、

「よし、これで総統は死んだな」と思った。

ヘリコプターが飛んで行った跡に未だ砂埃が舞い上がっている中に二人の人間が倒れ込んでいる。そしてそれに向かって走っていく一人の人間があった。倒れているうちの一人のところ

まで行き、

「玄、しっかりして！」と肩を起こして抱きしめた。

林美玲であった。美玲はステージが爆発した後に駐車場の後方から駆け付け、爆発の跡に近づいていくと、ゲートの近くから浅田が総統を連れて林の中に入って行くのが見えた。そこで美玲も林の中に入って浅田を探していたのだった。

美玲の呼びかけに浅田が口を開いた。

「ああ、腹と腕をやられたみたいだけど起きられそうだ、」

「総統はどうなった？」

「あそこに倒れている人かしら」

美玲が五メートルほど先を指さした。浅田がわき腹を押さえてふらつきながら起き上がり、うつ伏せに倒れている女性を丁寧に仰向けにして、顔を見て呼び掛ける。

「総統、しっかりしてください」

少し間をおいて、ゆっくり目を開けた。

「大丈夫ですか」再び呼び掛ける。

「ああ、体中が痛いわ」と呟いてから、

「ヘリコプターが揺れて外に放り出されたのよ」と返事が返ってきた。

大丈夫そうである。パイロットが撃たれてヘリコプターが大きく左右に揺れたときに反動で外に振り出されたようである。

総統の肩を掴んで起こそうとしたその時である。砂埃の舞い上がる向こうから二、三十人の兵士が小銃を持って歩いて来るのが見えた。まずいと思った瞬間、ゲート付近の警官に向けて小銃を発射した。警官も反撃して銃撃戦が始まった。浅田は総統と美玲を両腕で抱えるように地面に伏せた。招待客の人たちもま

た一斉に地面にふせた。兵士たちは中腰でゆっくり近づいてきて小銃を撃ちまくる。地面に伏せっているのが蔡総統だと気づくものは誰もいなく、ただの土くれのように見過ごして前へ進んで行った。

ヘリコプターが飛んできて、すんでのところでローターに巻き込まれるのを免れた王教授と劉旭鎮一味は味方の兵士がゲートとは反対側のヘリコプターが停まっていた方向から現れ、警官に向けて発砲を開始したのを見て、

「よし、これでクーデターは成功だ」

劉旭鎮が王教授に笑顔で言った。

案の定、自動小銃を持った兵士に警官らの何人かが撃たれ、パトカーを盾にしていた者もパトカーが銃弾で穴だらけになるに従

い逃げ出す者も出てきた。実際にパトカーは盾としての役目を失いつつあり、警官隊は全滅の危機にあった。

砂埃がかぶったままうつ伏せになっていた浅田、美玲、そして蔡総統は、クーデターの兵士が彼らを顧みることなく警官に向かつて進んでいった後、ゆっくりと伏せたまま兵士らが出てきた林の方に進んでいった。後ろの方では「バーン、バーン、……」という銃声が響き渡っている。

林がすぐそこに見えるところまで来たところで、三人は林に向かつて走った。

それを劉旭鎮一味のひとりが見つけて、

「あれは、総統じゃないのか！」と大声を出す。その場の全員がそちらを振り向く。三人を視界にとらえた劉旭鎮が、

「くっそう、しぶといやつらだ。まだ生きていやがったか」と言
つてから兵士らに、

「おおーい、あの三人を殺せ！」と大声で怒鳴った。

劉旭鎮の近くまで来ていた兵士らは、それを聞いて振り返り、数
人が三人の方向に逆走して小銃を発砲した。三人は一目散に林
の中に走り込む。林の中は膝元まである草が一面に茂っており、
思うように走れない。どんどんと兵士が迫って来る。なんとか逃
げる方法はないか辺りを見回した、とその時である。前方からま
た兵士の一団が上がって来るのが見えた。三人は挟み撃ちなり、
もはやこれまでかと思うと恐怖で血の気が引いていく。浅田も
「ああ、ここで死ぬのだな」と思い美玲を抱きしめた。美玲も浅
田の体にしがみついていた。人は恐怖の極限状態でいろいろな
ことを思い出すと言われるが、二人は互いを抱きしめるのみで

何も考えられない。

さらに兵士の一団が迫って来て、何発か発砲してきた。二人はさらに抱きしめあった。すると、

「江隊長！」蔡總統が叫んだ。

「總統、大丈夫ですか。遅くなりすみません」

兵士の一団は、三人を追ってきた劉旭鎮一味の兵士を目がけてどんと発砲し、追いかけてきた兵士は一目散に走って逃げていく。

「大丈夫よ、ありがとう。助かったわ」

總統が江隊長に礼を言ってから、

「江隊長、携帯電話を貸してください。国防部長に電話するわ」
国防部長とは国防大臣のことである。

つぶさにはどういうこか分からないが、どうも助かったようだ

と感じ、恐怖の緊張から解き放たれた浅田と美玲はその場にしゃがみこんだ。総統は携帯電話を手にして、

「彼は鳳山国防隊の隊長で彼らはここの正規の兵士たちよ」と浅田らに説明してくれた。許会長が連絡してくれたおかげなのであろうか、いずれにしても総統の説明を聞いて安堵感が全身に滲みるように感じた。

総統は早速、台北の国防部長に電話をして自分が暗殺されそうになったこと、クーデターが起きていることを告げ全国に総統の名前で戒厳令を出すこと、またこれに乗じて中国軍が台湾進攻作戦を実行しようとしていることを告げ、早急に防戦体制をとることに加えアメリカ軍への協力要請を出すように命令した。

警官隊と対峙していた兵士の一団は、後ろから銃声が聞こえたと、振り返ると同時に地面に伏せるようにして防戦体制を取った。彼らの後ろには大勢の招待客がおり、容易に撃ってこないだろうとの考えから、江隊長率いる一団が林から出てくると一斉に発砲した。案の定、江隊長の部隊は林の出口で横に百メートルほど横に並んで防戦体制を取ったまま撃ってこない。

林から江隊長の部隊が姿を見せたのを見て、王教授と劉旭鎮一味は招待客の方へ逃げ戻り、

「撃て、撃て、ひるむんじゃない！」

劉旭鎮が兵隊たちに向かって叫ぶ。たくさんの招待客らは頭の上を銃弾が飛び交い、生きた心地もなくてただ地面に伏せているしかない。

すると、遠くから江隊長の大音声が響いてきた。

「江隊長である。お前たち、鳳山国防隊がお前たちを取り囲んでいる。お前たちに勝ち目は無い。今投降すれば死刑になることはない。これ以上抵抗すれば射殺する。投降しろ！」
そう言われて、ひとり、二人と発砲するのを止める兵士が出てきた。

「あんな言葉に騙されるな。撃て、撃て！」

劉旭鎮が叫ぶが、ひとり、二人と小銃を置いて立ち上がって両手を上げる兵士が出てきた。

「くっそう、俺に貸せ！」

劉旭鎮が、そばの兵士の銃を取り上げて、江隊長に向けて発砲した。すると、それに呼応するように「パーン」という音がして劉旭鎮が仰向けに倒れた。

兵士全員が両手を上げて江隊長の部隊に投降し、これを見たクーデター一味は銃を置くしかなかった。逃げ出していった警官らが戻って来て王教授を含めて次々と逮捕していく。これを見て大勢の招待客も徐々に起き上がり、互いの無事を確認している。

劉旭鎮が撃たれ、味方の兵士が投降するのを見た王教授は呆然となって立ちすくみ、警官に促されるままにパトカーの止まっている方に歩いて行った。彼が実際にどんな考えで、またどんな経緯でクーデターを起こすまでになったかを知るすべはなかった。

黄天佑ら密輸団の連中は、

「俺たちはクーデターとは何の関係もない。単なる万建建設の社員だ」と言ってその場から立ち去ろうとする。警察もたくさん

の人々がいて実際問題、誰がクーデター一味なのかよくわからない。立ち去ろうとする黄天佑を見つけた前田が、

「おい、お前、まだ俺たちに半分しか払っていない。爆発や拳銃の撃ち合いやらとんでもないことになったが、払うべきものは払ってもらうぜ」と黄天佑に詰め寄った。

「お前、何を言っているのだ。その話はクーデター一味の話だ。あいつらが捕まったらどうにもならんだろう」

「俺はお前としかこの話をしていない。お前が払うしかない」「訳わからん奴だな、黙って帰れ！」

かっとなった前田が黄天佑の顔面をこぶしで殴った。この勢いで黄天佑は仰向けに倒れる。警官がすぐに気が付いて「何をしているのだ」と割り込んでくる。

「くっそう、首を洗ってまっっている。後で行くからな」

前田は、そう言つて逃げるように人々の中に入って行つた。これ以上不審に思われたくない黄天佑は「大したことではない」と言つて警官を下がらせた。

また人々の中に松葉杖をついた陳金福とあの二人の手下がいた。もともと陳金福はクーデターの大義になど興味がなく劉旭鎮に大陸と一緒になつたら新華実業は大発展をするし、成功の暁にはお前が総裁として頂点に立てると言われて参加したのだが、総統を暗殺すると聞いて腰が引けていたのである。知らぬ顔をして立ち去ろうとしたところを警官に呼び止められた。

「陳金福さんではないですか、松葉杖をついた人がクーデターに加わっていると通報があつたのですが」と言われ、つい、「誰がそんなことを言っているんだ」と言つてしまった。

「新華実業の許会長ですよ。ご存じですよね」

「くっそう、あのじじい、」

逃げ出そうとするも、松葉杖をついては逃げようにも逃げられず警官に連行されていった。

とその時、「パタパタパタ……」という轟音が近づいて来るとともに砂埃が舞い上がった。総統を迎えに来たヘリコプターが到着したのであった。ローターは回ったままで、総統は強風の中を、頭を手で押さえながら乗り込んでいった。浅田と美玲は他の人たちとともに風に飛ばされないよう踏ん張りながらお辞儀をし、飛び立つときに

「頑張ってください」と声を出して手を振った。

その少し前、江隊長がクーデターに加担した兵士を投降させ

その後、浅田、美玲と蔡總統の三人はゆっくり林から出てきた。浅田のわき腹のところのシャツに血が滲んでいるのを見て、總統が心配そうに語り掛ける。

「あなた、怪我をしているわ。早く病院に行かなくては、」

「大丈夫です。弾がかすめただけだと思います」

手でわき腹を押さえながら応える。

「それにしてもあなたは私の命の恩人だわ。名前を聞かせてください」

「浅田玄です」

「えっ、あなた日本人なの。台湾語が台湾人と遜色ないから台湾人だと思っていたわ」

「光栄です」

「今から私が国防軍の指揮をとります。無事に中国軍を撃退し

たら永和寓所（総統官邸）に来てください」

「ありがとうございます」

「それにしてもたくさん犠牲者が出てしまったわ。この犠牲者のためにも絶対にこの台湾を守るわ」

などと話しているところにヘリコプターが到着したのであった。

招待客の人々がいる場所では、ステージが大爆発したり、銃撃戦で弾丸が飛び交ったりして、拳銃の果てには軍隊まで登場してクーデターだったと聞かされて無事だったほとんどの人は話が尽きない。しかし、ステージの近くでは五、六人いた総統のS Pは爆発で吹き飛ばされて死体となって転がっていたのを人々が一か所に集めていた。

またステージの前に座っていた人たちは爆風をまともに受けた

人が何人もおり、亡くなってしまった人や大けがを負った人が横たわっていた。これらの人達の手当をしている人たちの中に呉教授も楊品希もいた。総統を見送った後、浅田もよろけながら美玲と一緒に彼らと合流した。

「血が出ているじゃないの、ここは私たちに任せて早く病院に行きなさい」

呉教授が浅田を見て、心配してくれる。楊品希も

「お前、よくやったな。総統も感謝していただろう、早く傷の手当てをしないと俺みたいに細菌にやられるぞ。ちよつと待て」
そう言うってから、その場で、自分のシャツを脱ぎ、あつという間に引き裂いて浅田の腹と腕に巻き付けてくれた。

「少しは気休めになるだろう」

「ありがとう、楊さん」

「じゃあ、すみませんが私たちは病院に向かいます」
美玲がそう言つて、駐車場に向かった。幸い浅田の車はなんとか動かすことができ、パトカーや救急車で込み合っている坂道を下って行った。

高雄のホテルで

美玲は高雄の病院に向かつて車を走らせようとしていた。ところが鳳山を下りたところで、

「もう何日も荷物をホテルに置いたままにしてある。ホテルも何日も帰つてこない客を不審に思っているはずだ。ホテルによつてから行こう」と浅田が言い出した。

「病院で手当てしてからでいいでしょう」

「楊さんのお陰で少しよくなったような気がする。それに、おそらく入院することになるだろう。荷物だけでも持っていこう」
「そう、でもホテルは病院に行く途中にあるから、仕方がないわね」

美玲も同意して、何日も前にチェックインしたままになっている寒軒国際大飯店に向かった。

ホテルに着いて、フロントデスクに向かい、すでにチェックインしてから五日になるが問題なく支払いをするのでさらにもう一泊したい旨を告げる。客がわき腹を押さえており、その押さえているところから血がにじんでいるのを見てフロントの係員は不審に思ったが宿泊の追加の手続きを始めた。
とその時、後ろから呼び掛ける声が聞こえた。

「あら、浅田さん、帰っていらしたのね」

振り向くと、金城凜が先頭になって金城社長、長嶺専務、新垣、島袋、そして前田の全員が入ってくる。

「よかったです、皆さん、無事だったのですね」

「聞いたわよ、あなたが蔡総統を助けたのだそうね、すごいわね」

「いえ、行きがかり上、ああなっただけです」

などと話していると、後ろから声を掛けてきた人物がいた。

「長嶺さん、前田さんはいらっしやいますか」

全員がそちらの方を振り向くと、そこには薄青色のシャツを着た二人と警官の制服を着た二人が立っていた。

「長嶺は私です」

長嶺が恐る恐る慣れない中国語で応える。

「前田さんは？」

「俺だが、」

前田が懺然として応える。

「あなたたちに逮捕状が出ています」

そう言っって中国語で書かれた逮捕状を見せた。

「何だ、どういうことだ！」

引き攣った顔で前田が日本語で大声をあげる。

「あなたたちがクーデターに加担した容疑です」

薄青色のシャツの男が手錠を出した。

「待て、俺たちは関係ない。黄天佑に聞けば分かる」

「黄天佑はすでにクーデターの一味として逮捕されました」

鋭い目で前田の目を見つめて言った。長嶺は言葉がよく分からず、凜に聞く。凜から何を言っているのか聞くと、

「わしは、こいつに脅されて密輸を手伝っただけだ。クーデター

など何の関係もない」大声でまくしたてた。

これを聞いた金城社長が、

「お前、何を言っているのだ。密輸とは何のことだ」

「こいつは旭琉会の組員でこいつに脅されて仕方なく手伝っただけなんです」

警官らは日本語が分からず、手錠を出した警官が一步下がった。

「前田が会社に入ったのもお前が連れてきたからだ。何で脅されたんだ、お前」

なおも金城社長が追及する。すると、前田が口を開く。

「そうだ、俺は旭琉会の前田源治だ。こいつは会社の金をちよろまかしていやがったんだ。最近はやくざもビジネスをやらんと生きていけねんがやぞ。旭琉会と台湾の竹聯幫は兄弟の盃を交わしているんだ。ビジネスパートナーでやつだ」

少し訛りの入った言葉で言ってから、警官に向けて、

「だがクーデターとかには何の関係もない。黄天佑もクーデターとは関係ない。俺と取引があったただけだ」と中国語で言った。

しかし、警官は「竹聯幫（ジュリエンパン）」という言葉に反応して、腰の拳銃に手を付けた。竹聯幫は台湾で最大の暴力団で中国共産党とも深くつながっているとされているのだ。今回、着工式の現場でクーデターの容疑で逮捕した者の多くが竹聯幫の組員だった。この言葉を聞いて、警官は今回のクーデターに前田らが関係していると確信した。

警官が拳銃に手を付けるのを見ると、前田がすばやく折りたたみ式のナイフを出した。そして、すばやく後ろに下がってカウスターの近くにいた美玲の後ろに回り込んだ。回り込んだ瞬間に美玲の首に左手を回して締め付ける。咄嗟のことでその場の

全員が「あつ、」と息をのた。

「何をするんだ、やめろ！」

すぐそばにいた浅田が叫ぶ。

「バカ野郎、お前も俺たちの仲間じゃねえか、」

「こいつも俺たちの仲間だ。逮捕するならこいつも逮捕しろ」
顎で浅田を指しながら、中国語で警官に言ったが、

「その人は総統を救った人だ。そんなはずはない」

警官は拳銃をかまえながら応える。

「くっそ、銃を捨てて出ていけ。この女を殺すぞ！」

中国語で怒鳴る。全員が前田から徐々に離れるが、

「お前、そんなこととしてどうやって逃げるつもりだ。逃げられるわけがないだろう」

警官が説得しようとする。

「とやかく言っていないで拳銃をすてる！」

「竹聯幫はクーデターの一味なのだぞ、お前を助けになんかに来ない。もうあきらめろ」

「なにっ、」と一瞬うろたえたかに見えたが、

「とにかく濡れ衣で捕まるわけにはいかない。早く銃を捨てて出ていけ」と大声を上げる。

「お前、こんなことをしていると益々刑が重くなるぞ、ナイフをこちらに渡せ」

そう言つて警官が一步近づいた、とその時である。

前田が何も言わず無表情で、美玲のわき腹を刺した。全員が凍り付いたようにそれを見つめる。次の瞬間、美玲がゆっくりとスロ―モーションのように床に崩れ落ちる。

一瞬に、浅田は頭の中が真っ白になり、真っ白の中で何かがきら

めいた。フラッシュバックのようにあの悪夢が突然に現実感を持ってきた。幼い自分が同じくらいの女の子をナイフで刺すというあの悪夢である。しかし、フラッシュバックし、鮮明になっていったそのシーンでは、その女の子を自分の隣にいた男の子が刺したのであった。そして、隣にいたのに何もできずに呆然と立っていた自分が浮かんできた。女の子が血を流しているのにどうにもならない。凍り付いている自分。ますます血が流れてくる。そして、それがああ、これは自分のせいだという自責の念になり、こんなことは現実ではないと自分に言い聞かせて、その記憶を封印したいという思いが幼い自分を締め付けるように覆っていった。その一瞬の空白と現実のはざまの後、

「げ・ん・ちゃん」と前田を見ながら呟いた。

「なに！」

前田が言ったと同時に渾身の力で前田の顔面を殴っていた。前田がナイフを持ったまま後ろ向きに飛ばされる。すかさず倒れている美玲の傷口を押さえるが出血が止まらない。

「救急車を！」

叫ぶと同時に自分のシャツを力の限り引き裂いた。引き裂いたシャツを止血用のガーゼのように当て、さらに残ったシャツでわき腹をきつく締め付けた。

「美玲！」と呼び掛ける。

「玄、痛い、．．．」と呟くが意識が揺らいでいる。

「美玲、がんばれ！」

数日後

ここは、風光明媚な澄清湖のほとりに建つ高雄長庚記念医院の中の病室である。病室に二つのベッドが並んで置かれ、窓際のベッドの横に金城凜とその父親である金城海が並んで座っていた。

「美玲さんも命に別状がなくてよかったですね」
凜がベッドの浅田に話しかけている。美玲はまだ安静状態ですっと上を向いて眠っているの、三人はなるべく声を伏せて話をしている。

「ええ、すぐに病院へ運んでもらえたのが幸運でした。それに、クーデターの一団はあの後すぐに鎮圧されて、中国軍も侵攻作

戦を中止したと聞きました。本当によかったです」

「ええ、中国軍が上陸してくるかもしれないと台湾で大々的にニュースにしたので、中国も秘密裡に作戦を進めることができなくなったのでしょね」

凜がニュースで知った情報で解説する。

「ところでスーパーアリーナのプロジェクトは大変なことになってしまいましたね。せっかかないプロジェクトだったのに残念です」

「いや、プロジェクトそのものがなくなったわけじゃないから、また改めて入札があると思うよ」

金城社長が楽観的な見通しで応え、さらに凜もそれに追従する。

「そうね、高雄市もあのゲートアーチは気に入っていたみたいだし、その時はまた手伝ってください」

「ありがたいお言葉をありがとうございます」

「ところで、前田が美玲さんを刺した後に『ゲンちゃん』と呼んだわね。もともとあなたたちは知り合いだったの」と不審そうに訊く。

「実はあの時、突然昔の幼い頃のことを頭の中に浮かんできたのです。苗字は覚えていないのですが、『げんちゃん』という男の子が金沢の僕の家近くに引っ越してきたのですが、近くの女の子と三人で遊んでいるうちに、突然『げんちゃん』が女の子をナイフで刺したのです。僕はその時、あまりにもびっくりして血を流している女の子に何もしてあげられず、それがずっとトラウマのようになっていて、そのトラウマから逃げていたのですが、あの時、前田が美玲を刺した時の状況がその子供の時の記憶とかぶさってきて、思わずそう呼んでしまったのです。前田源

治があの中の時の「げんちゃん」かどうかは分かりません」

「そう、前田という苗字は沖縄じゃ珍しいから本土から来たの
でしょうね。それにしても前田が暴力団だったとは、もつとよく
調べてから採用しないといけないわね、社長」

「そうだな、それに長嶺も馬鹿な奴だ。これから会社の評判を取
り戻すのは簡単ではないが、なんとかやらんとな」

「大丈夫ですよ、長い間築いてきたアメリカ軍との関係は崩れ
ませんよ」

そう言いながら、あのアメリカ軍のスパイのマイク・ネーダーや
ジョージ・ブラウンはどうしているのだろうと思った。

浅田と美玲が病院へ運ばれたころ、着工式の現場から蔡総統
がヘリコプターで台北の官邸に到着し、戒嚴令の指揮と中国軍

に対する防戦体制がすばやく整えられた。戒厳令の発令にともなうて、国防軍の基地、並びに主要な官庁の周辺には国防軍の車両が展開し、それらに通ずる主要道路は閉鎖された。クーデター部隊を指揮して国防部に向かった李中尉は国防部の前の大広場にちようど戦車や装甲車が続々と集結しつつあるのを目の当たりにして完全に戦意を消失してしまった。高雄の着工式で總統が暗殺されたと思ひ込んでいた李中尉にとっては思ひもよらないことであつた。

蔡總統が官邸に到着するとすぐにテレビで演説し、自身の暗殺未遂があつたこと、クーデターが起こり、これに対して全土に戒厳令を出したこと、また中国軍の台湾進攻作戦が進んでいることを全国民に知らせた。人々はこれを聞いて家に閉じこもり、街から人影が消えた。

移動中のヘリコプターの中から、総統から国防部長に指令が出され、空軍の基地では偵察機と戦闘機が次々と台湾海峡の南に向かって飛び立って行った。また総統の協力要請を受けた沖縄のアメリカ軍は嘉手納基地から次々と偵察機とともにF15などの戦闘機を出発させた。

一方、中国国内では蔡総統の演説をSNSで国民が知る所となり、もはや秘密裡に台湾進攻を進めることができなくなっていた。中国国防部は作戦の中止を余儀なくされ、中止を決めた。香港を過ぎ、広州沖まで北上していた上陸船隊はきびすを返すようにUターンをした。

その後、中国国営テレビは、

「本日、あたかも中国国防軍が中国台湾に対して侵攻作戦を実施したというトンでもないデマが中国台湾より流された。これ

は中国に対する中国台湾の許されざる挑戦であり、中国政府としては今後断固たる措置をとる」というニュースが全世界に流された。

取り調べ

さらに数日して浅田が退院すると、高雄警察に呼ばれて事情聴取を受けた。逮捕された連中から浅田の名前が出てくるのはしごく当然で、浅田も覚悟していた。捜査官の質問に、

「僕がこの事件に巻き込まれた経緯から順を追ってお話します」と言うてから、偶然台北の路地で走ってきた男が転倒して金印を落とし、それを拾ったことから始まり、中国まで連れていか

れて、やむを得ず機密情報を持ち帰ったことまですべてを話した。捜査官は浅田の話を、メモを取りながら黙って聞いてから、「今のあなたの話を聞くと、あなたの彼女のためにやむを得ず彼らに協力したということですが、それを完全に証明するものはありません。あなたが最初は進んで協力したものの最後に彼らを裏切ったということもできます」

「そんな、確かに金印をすぐに警察に届けていればこんなことに巻き込まれなかったかもしれない。本当に申し訳ありませんでした。しかし、僕が進んで密輸団に協力したことは絶対にありません。信じてください」

「私もそれを信じてあげたいですが、証拠がありません。ただあなたが大統領の命を救ったという事実は大統領の話からも信頼性があります」と言ってから、

「まあ、逮捕した連中の供述が進むにつれて、真実が明らかになるでしょう。今日はあなたが持ってきたパソコンなどを押収させていただきますので帰って結構です。ただし、我々と連絡がとれるようにしておいてください」と言って解放してくれた。帰り際に、

「新華博物館の郭館長も呉麗華さん、林美玲さんの誘拐に関与した疑いで事情を聴いています。この事件の解明には大勢の人が関与しており、警察としても全容解明には時間がかかるとみています」と付け加えた。呉教授と美玲が捕まって監禁された件についても捜査しているということを書いたかっただのである。

浅田はそのまま高雄長庚記念医院に行った。美玲はまだ入院しており彼女を見舞うためである。美玲は回復が早く、ベッドで起き上がって食事ができるほどになっていた。

「まあ、それじゃあ、共犯として逮捕されるかもしれないということ？」 浅田が先ほどの事情聴取の話をする、驚いて訊く。

「前田や黄天佑らが何というかだが、無理やり協力させられたというのが事実なわけだから逮捕はされないと思うがね」

「甘いわね、彼らは何とか自分たちの罪を軽くしようとしてあなたにそそのかされたと言うかもしれないわよ。だいたいあなただって少しくらい分け前にあずかるうと思っただでしょう」

「そんな訳はないじゃないか」

そう言ったものの顔が赤くなっていくのが分かった。一方で、そうした厳しいことを言った美玲だが、

「でも、もし逮捕されたら会えなくなってしまうわ」と、しよんぼりと肩を落とす。

「まだ逮捕されると決まった訳じゃないさ。大丈夫だよ」

逆に美玲を慰めるとともに自分にも言い聞かせた。

浅田が入院している間に、許会長の邸宅の捜査が行われるとともに会長や楊品希からも事情聴取が行われていた。この捜索で邸宅から本物の金印とともにコピーの金印も発見された。

また呉教授と美玲が拉致されて、それを浅田と楊品希がクーデター一味から一旦は救い出したものの、逆に全員が捕まって会長の邸宅に監禁されていたことなどが判明していた。これらの事実を知った上での浅田の事情聴取だったわけで、浅田の口から同じことが語られるかどうかの再確認でもあったのだ。

そして、一週間ほどして浅田については不起訴にするとの連絡があった。すでに退院していた美玲にこのことをさっそく電話で知らせた。

「不起訴の連絡がきた！」

「今すぐ私の部屋に飛んできて！」

エピソード

二か月後、浅田と美玲は台北の桃園国際空港のコンコースを歩いていた。

「私、雪を見たことがないから本当に楽しみだわ。雪ってどんなものかしらね」

「この時期に金沢に行くのはばかげていると言っただろ。僕は金沢の冬がいやで台北に住んでいるのに」

「バカね、これを逃したら金沢に行くタイミングを失うかもし

れないと言っていたくせに」

つまり、二人は浅田の両親の住む日本の金沢に向かおうとしているのだ。浅田はあの事件と向かい合うことでずっと苦しめられていた悪夢からも解放されて、久しぶりに故郷に帰ってみようかと思いい立ったのであった。

「そうだったね、金沢に着いたら豪華に日本海の幸をいただこう」と言った浅田のリュックには、あの沖縄の喜屋武公園でもらった分け前がこっそりと入っていた。

「わあ、楽しみだわ」

二人が手荷物検査場に入ろうとしたその時、携帯電話に電話のメッセージが入った。開けてみると、英語のメッセージである。マイク・ネーダーからであった。

「お前、蔡総統を救ったそうだな。今回のことで中国のスパイだ

った唐林杏は軍事作戦の失敗の責任を取らされてどこかに消えたそうだ。新しいスパイがコンタクトしてきているがまた一緒にやらないか？

—もうまっぴらごめんだ。

完